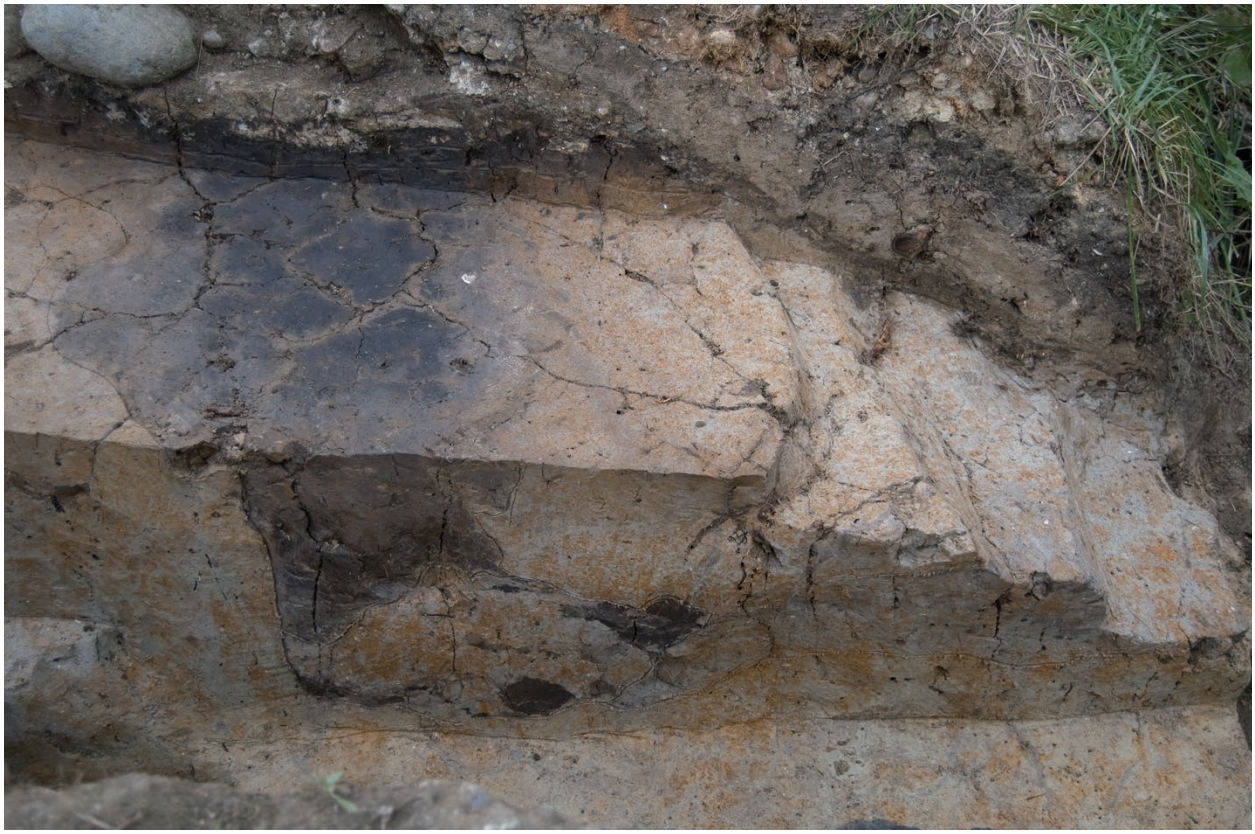
東北大学埋蔵文化財調査室調査報告３

芦ノ口遺跡
第７次調査・第８次調査

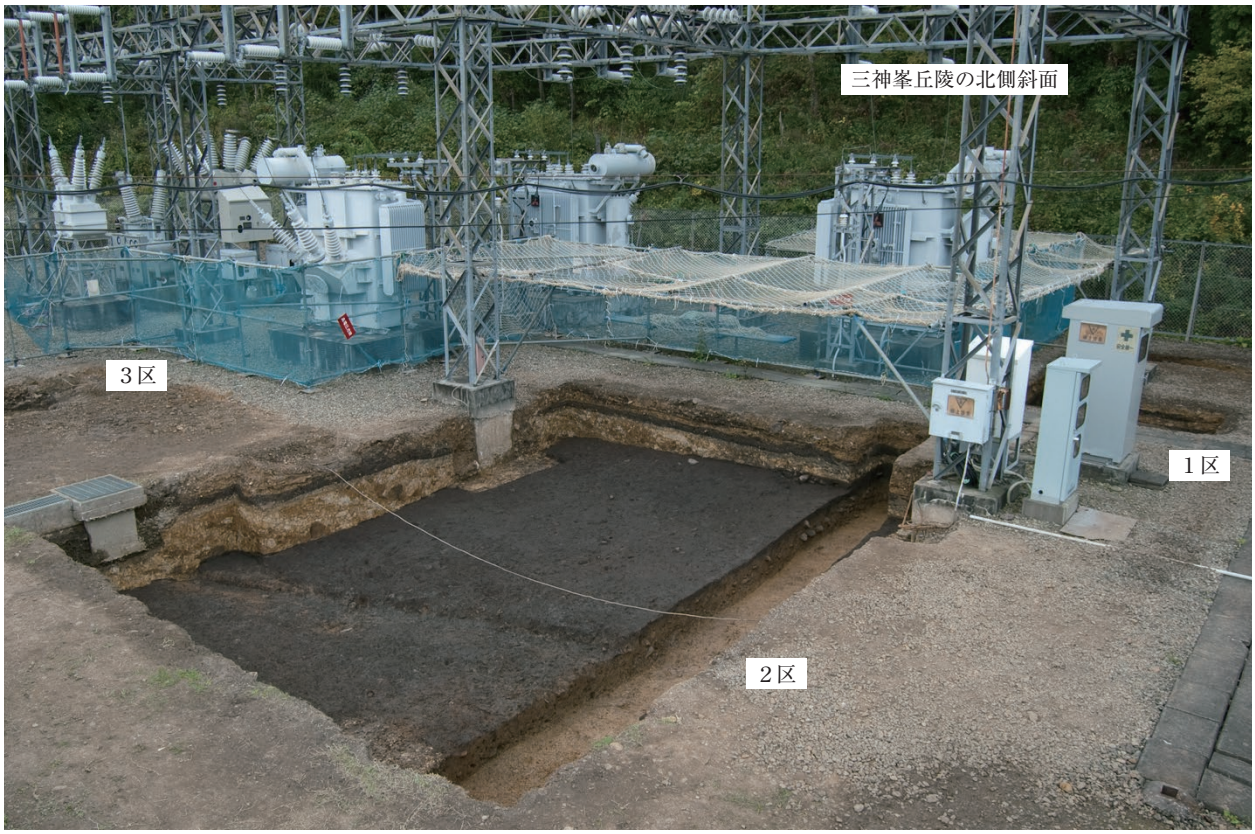
東北大学埋蔵文化財調査室
２０１４

1．芦ノ口遺跡第７次調査地点全景（南から）

2．芦ノ口遺跡第７次調査地点基本層序（東壁中央・西から）



3．芦ノ口遺跡第７次調査で検出された粘土採掘坑・57号土坑（東から）



4．芦ノ口遺跡第８次調査地点全景（西から）

序

本報告書は、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』の３冊目として、2009年度に実施した、富沢地区光源加速器棟建設に伴う芦ノ口遺跡第７次調査、同地区特高変電所の受変電設備改修に伴う同遺跡第８次調査の成果を報告いたします。

東北大学埋蔵文化財調査室では、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』という新たなシリーズで、東北大学構内における埋蔵文化財調査報告書を刊行しております。本報告書は、その３冊目となります。以前は『東北大学埋蔵文化財調査年報』として、年度ごとに事業概要と調査成果の報告をまとめて刊行してきました。年度ごとの事業概要の報告は、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』として別に刊行し、発掘調査の報告については『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』として、独立させて刊行していくこととしております。

今回報告する芦ノ口遺跡第７次調査では、縄文時代、古墳時代中期のものと考えられる粘土採掘坑を多数確認いたしました。北側の以前の調査においては、縄文時代晩期、古墳時代前期の粘土採掘坑が確認されていましたが、今回の調査では、その粘土採掘坑が南側に広がること、時期的に異なるものも存在することが判明いたしました。三神峯丘陵周辺に位置する埴輪、須恵器、瓦等の窯跡の存在と合わせ考え、過去の窯業生産体制を理解する上で基礎的なデータを得ることができました。また、第８次調査では、三神峯丘陵から崩れてきた堆積物の中から縄文前期から中期の土器や石器が出土し、自然の沢状地形も確認できました。芦ノ口遺跡の立地面の古地形を考える上で、重要な知見を得ることができたと考えております。

調査の実施から報告書の刊行まで、大学内外の関係機関の御協力を得て、滞りなく事業を進めることができました。ここに厚くお礼申し上げるとともに、本書で報告されるデータが各方面で活用されることを望むものです。

東北大学埋蔵文化財調査室
室長　阿子島　香

例　言

1．本調査報告は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査室が2009年度に行った芦ノ口遺跡の調査成果をまとめたものである。

2．報告する遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下のとおりである。

芦ノ口遺跡第７次調査（ＴＭ７）　2009年８月３日～2009年９月30日
藤沢敦・柴田恵子・菅野智則・百々千鶴（2009年度まで）

芦ノ口遺跡第８次調査（ＴＭ８）　2009年９月24日～2009年10月23日
藤沢敦・柴田恵子・菅野智則・百々千鶴

3．調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査室が行った。

4．本報告の編集は、柴田恵子・菅野智則が担当した。

5．本文は、菅野智則が執筆したほか、「第Ⅲ章２（２）石器」については傳田惠隆氏（当時：東北大学大学院文学研究科考古学研究室）に執筆を依頼し、報告をいただいた。英文要旨については、柴田恵子が作成し、阿子島香が校訂した。

6．遺物実測図の作成にあたっては、原図はすべて手描きで作成している。遺物実測図のうち、石器については手描きのトレースによって原版を作成した。土器の実測図と遺構の測量図は、デジタルトレースによって原版を作成した。

7．遺物写真については、有限会社仙台写真工房に委託して撮影したほか、図版24のP1a・２・５～８、10、WL1については、菅野が撮影した。

8．図３－１の写真については、東北大学史料館の提供を受けた。

9．発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申しあげる（敬称略）。

東北大学考古学研究室、東北大学史料館、秋山綾子（東北大学考古学研究室）、川口亮（東北大学考古学研究室）

10. 出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査室で保管・管理している。

凡　例

1．図１は、国土地理院発行の１万分の１地形図（青葉山）を使用したものである。図２は、国土地理院発行の２万分の１地形図（仙臺南部：明治38年測量）、2.5万分の１地形図（仙台西南部：昭和３年測量・平成４年修正測量）、１万分の１地形図（仙台南部：昭和28年測量）、米軍撮影の空中写真（NJ－54－21－3：昭和22年撮影）を使用したものである。

2．挿図・写真等の方位は、それぞれに示した。

3．遺物の実測図および写真の縮尺は、それぞれに示した。

4．引用・参考文献は、巻末にまとめた。また、本文中で当室が刊行した報告書類を引用する際には、下記のように略した。

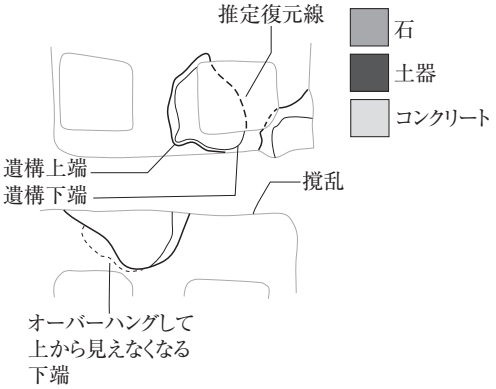
例　『東北大学埋蔵文化財調査年報』１　…　年報１

『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』2008　…　年次報告2008

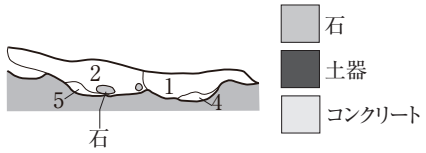
『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』１　…　調査報告１

5．挿図中の表記は、特に指示しないものについては、以下の通りである。

遺構平面図



遺構断面図



これら以外については、それぞれに指示した。

目　次

巻頭カラー図版
序
例言
凡例
目次
図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章　芦ノ口遺跡の立地と調査経過……1
　1．芦ノ口遺跡の立地と周辺の遺跡……1
　　(1) 芦ノ口遺跡の立地……1
　　(2) 芦ノ口遺跡の周辺遺跡……6
　2．2008年度までの調査……7
　3．調査の方法と調査経緯……7
　　(1) 調査地点の位置……7
　　(2) 調査の経過……7
　　(3) 調査の方法……8

第Ⅱ章　芦ノ口遺跡第７次調査（TM７）……12
　1．基本層序……12
　2．検出遺構……12
　3．出土遺物……33
　4．まとめ……35

第Ⅲ章　芦ノ口遺跡第８次調査（TM８）……43
　1．基本層序……43
　2．出土遺物……43
　　(1) 縄文土器……46
　　(2) 石器……47
　3．まとめ……49

引用・参考文献
東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧
国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程
英文要旨
写真図版

図　目　次

図１　東北大学と周辺の遺跡……2
図２　富沢地区周辺の地形（1）……3
図３　富沢地区周辺の地形（2）……4
図４　富沢地区調査地点……5
図５　芦ノ口遺跡第７次調査区平面図……13
図６　芦ノ口遺跡第７次調査区断面図……14
図７　芦ノ口遺跡層序模式図……15
図８　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（1）……22
図９　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（2）……23
図10　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（3）……24
図11　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（4）……25
図12　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（5）……26
図13　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（6）……27
図14　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（7）……28
図15　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（8）……29
図16　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（9）……30
図17　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（10）……31
図18　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（11）……32
図19　芦ノ口遺跡第７次調査出土土器……35
図20　芦ノ口遺跡での泥炭層の分布範囲……36
図21　芦ノ口遺跡の土坑（1）……37
図22　芦ノ口遺跡の土坑（2）……38
図23　芦ノ口遺跡の土坑（3）……39
図24　芦ノ口遺跡第８次調査平面図・断面図……44
図25　芦ノ口遺跡第８次調査断面図……45
図26　芦ノ口遺跡第８次調査出土土器……46
図27　芦ノ口遺跡第８次調査出土石器……48

表　目　次

表１　芦ノ口遺跡における調査一覧……8
表２　芦ノ口遺跡第７次調査遺構名対照表……9
表３　芦ノ口遺跡第７次調査遺構属性表（1）……10
表４　芦ノ口遺跡第７次調査遺構属性表（2）……11
表５　芦ノ口遺跡第７次調査出土土器集計表……34
表６　芦ノ口遺跡第７次調査出土遺物観察表……34
表７　芦ノ口遺跡検出土坑・ピット一覧表……40
表８　芦ノ口遺跡第８次調査出土遺物集計表……43
表９　芦ノ口遺跡第８次調査出土縄文土器観察表……47
表10　芦ノ口遺跡第８次調査出土石器属性表……49

図　版　目　次

図版１　芦ノ口遺跡第７次調査全景（1）‥‥‥‥‥‥59
図版２　芦ノ口遺跡第７次調査全景（2）‥‥‥‥‥‥60
図版３　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（1）‥‥‥‥61
図版４　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（2）‥‥‥‥62
図版５　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（3）‥‥‥‥63
図版６　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（4）‥‥‥‥64
図版７　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（5）‥‥‥‥65
図版８　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（6）‥‥‥‥66
図版９　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（7）‥‥‥‥67
図版10　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（8）‥‥‥‥68
図版11　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（9）‥‥‥‥69
図版12　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（10）‥‥‥70
図版13　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（11）‥‥‥71
図版14　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（12）‥‥‥72
図版15　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（13）‥‥‥73
図版16　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（14）‥‥‥74
図版17　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（15）‥‥‥75
図版18　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（16）‥‥‥76
図版19　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（17）‥‥‥77
図版20　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（18）‥‥‥78
図版21　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（19）‥‥‥79
図版22　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（20）‥‥‥80
図版23　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（21）‥‥‥81
図版24　芦ノ口遺跡第７次調査出土遺物‥‥‥‥‥‥82
図版25　芦ノ口遺跡第８次調査全景‥‥‥‥‥‥‥‥83
図版26　芦ノ口遺跡第８次調査１区調査状況（1）‥84
図版27　芦ノ口遺跡第８次調査１区調査状況（2）‥85
図版28　芦ノ口遺跡第８次調査２区調査状況‥‥‥86
図版29　芦ノ口遺跡第８次調査２・３区調査状況‥87
図版30　芦ノ口遺跡第８次調査出土土器‥‥‥‥‥‥88
図版31　芦ノ口遺跡第８次調査出土石器‥‥‥‥‥‥88

第Ⅰ章　芦ノ口遺跡の立地と調査経過

１．芦ノ口遺跡の立地と周辺の遺跡

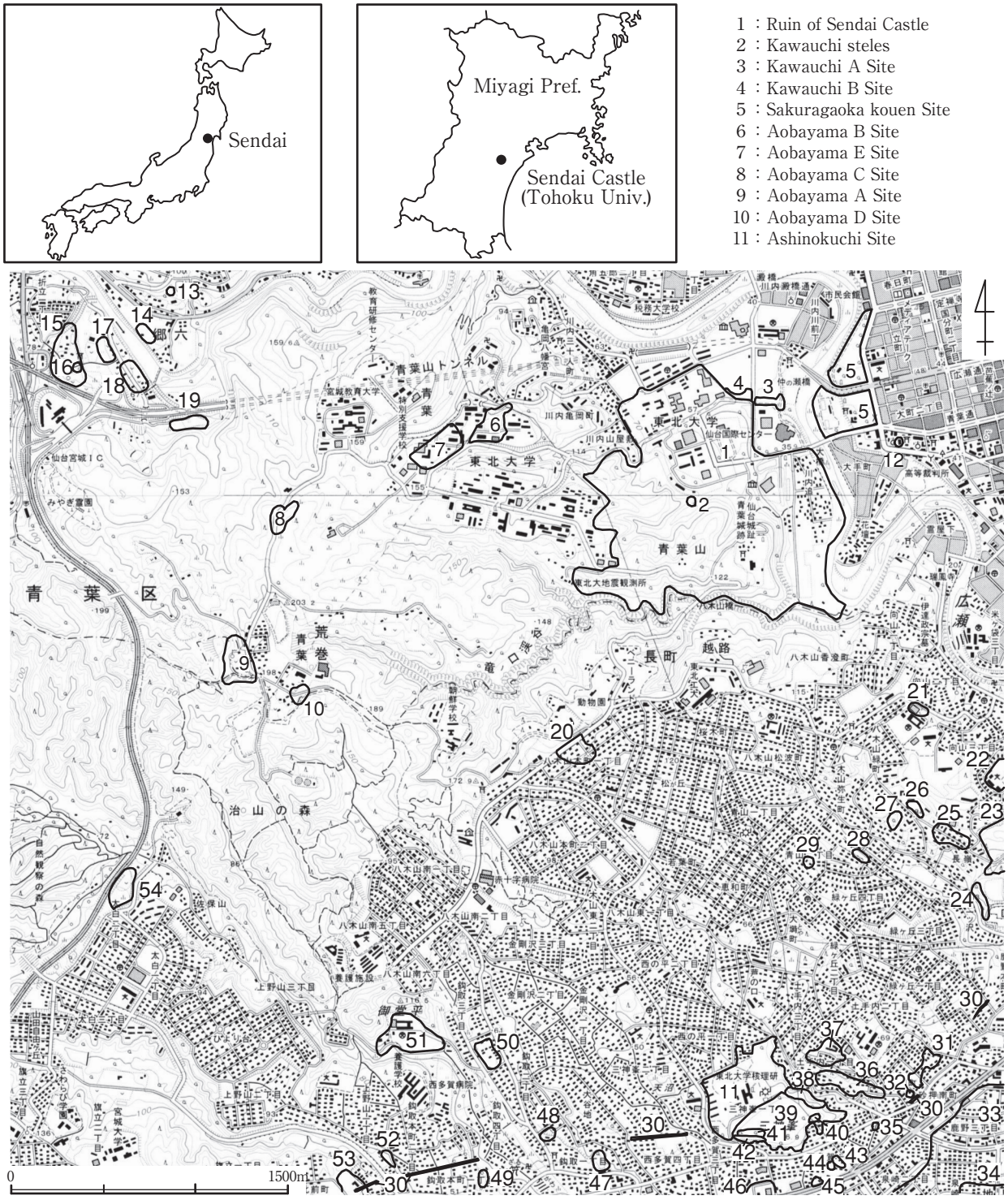
(1) 芦ノ口遺跡の立地

芦ノ口遺跡は、宮城県仙台市太白区三神峯一丁目に所在し、現在は東北大学の富沢地区として利用されている（図１－11）。この富沢地区は、隣接する三神峯公園とともに、第二次大戦後までは仙台陸軍幼年学校が置かれていた。戦後、旧制第二高等学校による利用を経て東北大学により活用されてきた。

この芦ノ口遺跡は、仙台市南部の三神峯丘陵北側に位置し、仙台上町段丘面に相当するとされている（中川久夫1998）。三神峯丘陵は、台ノ原段丘面に位置する標高65m前後の丘陵で、南東側には沖積平野が広がる。台ノ原段丘面の形成年代は、約10万年前の酸素同位体ステージ5cに対比され（豊島正幸ほか2001）、仙台上町段丘の形成年代は約2.6万年前より新しいと推定されている（小岩直人・平野信一・松本秀明2005）。しかし、これまでの調査では、芦ノ口遺跡の下層から検出される泥炭層の年代は、約３万年前より古く、約６～８万年前より新しいことが指摘されている（年報14）。したがって、芦ノ口遺跡立地面の段丘対比、泥炭層の年代については今後検討が必要である。また、三神峯丘陵と沖積平野の境が、北西上がりの逆断層である長町－利府線（中田高ほか1976）に相当する。長町－利府線の北西側には、大年寺断層と鹿落坂断層が併行して走っており、副断層を形成している。長町－利府線と大年寺断層に挟まれた隆起帯が三神峯丘陵となる。また、現在も確認できる三神峯丘陵と芦ノ口遺跡が立地する面との間に存在する急斜面は、大年寺断層により形成された低断層崖にあたる。

芦ノ口遺跡が立地する地形は、明治38年（1905年）には、荒地、針葉樹林等の表記がなされ、人家などは全く存在していなかった。現在の道路や大学宿舎がある地点近辺が、最も高い平坦地面となることがわかる（図２－２）。そして、そこから北側に向かって舌状に張り出し、北側にある丘陵へと繋がる。また、東西両方向には沢が存在し、そちらに向かって傾斜する。今回調査した地点は、東側の金洗沢方面へと続く緩やかな傾斜面地に位置している。その後の昭和３年（1928年）（図２－３）の時点では、建物３軒分の表記が新たに表れる以外、大きな変更点はない。昭和12年（1937年）に、仙台陸軍幼年学校が三神峯丘陵を含めたこの地に置かれることが決まり、昭和13年（1938年）には、未完成ながら機能し始める（松下芳男1973）。この幼年学校が機能し始めた頃の昭和16年（1931年）頃とされる航空写真（松下芳男1973）では、芦ノ口遺跡近辺は広く造成され、数多くの建物が並んでいる様子が窺える。東側の金洗沢へと向かう傾斜面部には、広大な運動場を造成している。西側には、本部や教舎等の建物が立ち並ぶ。その中央部には段が形成され、西側が一段高いことが当時の写真からわかる。その後、米軍が撮影した昭和22年（1947年）の航空写真（図２－１）では、数棟の建物が存在しておらず、その基礎のみが残っている様子が見受けられる。この変化は、昭和20年（1945年）の米軍による空襲（仙台市史編さん委員会2009）によるものと推定できる。また、この仙台空襲によって校舎が破壊された旧制第二高等学校がこの地に入り、戦後の昭和24年（1949年）に東北大学第一教養部となる（図２－４、図３）（東北大学百年史編集委員会2003）。昭和26年（1951年）以降、教養部の統廃合が進められ富沢分校となり、昭和31年（1956年）の航空写真では､新たにコンクリートの建物も認められる（図３－１）（東北大学百年史編集委員会2009）。昭和33年（1958年）には教養部は川内へと移転し、その後に理学研究科附属原子核理学研究施設が入り、東北大学電子光理学研究センターへと改組されて現在に至っている。現在は、旧運動場上には電子ライナック実験棟などの電子光理学研究センターの実験施設の建物が立ち並ぶ。そして、中央の段は、道路の西側に現在も残っている。

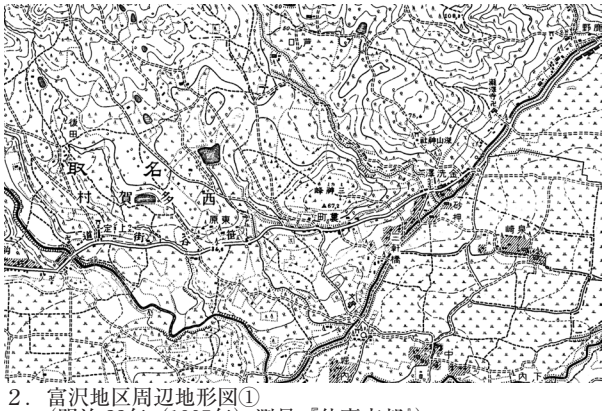
今回の調査区は、幼年学校教舎などが位置していた西側の地域（第７次調査：ＴＭ７）と、東側の大年寺断層により形成された低断層崖の斜面下にあたる現在の変電施設、かつての幼年学校運動場南側にあたる部分（第８次調査：ＴＭ８）となる（図４）。調査の結果からすると、第７次調査で検出された遺構は、幼年学校に関わる建物基礎により、大部分が破壊されている。そして、図２・３などからすると、空襲の際に破壊された建物の跡地に位置することがわかる。一方、運動場の南端にある第８次調査では、旧表土も発見されており、近代以降の破壊は少ないものと推定できる。



1：仙台城跡　2：川内古碑群　3：川内Ａ遺跡　4：川内Ｂ遺跡　5：桜ヶ岡公園遺跡　6：青葉山Ｂ遺跡　7：青葉山Ｅ遺跡
8：青葉山Ｃ遺跡　9：青葉山Ａ遺跡　10：青葉山Ｄ遺跡　11：芦ノ口遺跡　12：片平仙台大神宮の板碑　13：郷六大日如来の碑
14：葛岡城跡　15：郷六城跡　16：郷六建武碑　17：沼田遺跡　18：郷六御殿跡　19：郷六遺跡　20：松ヶ岡遺跡
21：向山高裏遺跡　22：萩ヶ丘遺跡　23：茂ヶ崎城跡　24：二ツ沢横穴墓群　25：萩ヶ岡Ｂ遺跡　26：八木山緑町遺跡
27：二ツ沢遺跡　28：青山二丁目遺跡　29：青山二丁目Ｂ遺跡　30：杉土手（鹿除土手）　31：砂押屋敷遺跡　32：砂押古墳
33：富沢遺跡　34：泉崎浦遺跡　35：金洗沢古墳　36：土手内窯跡　37：土手内遺跡　38：土手内横穴墓群　39：三神峯遺跡
40：金山窯跡　41：三神峯古墳群　42：富沢窯跡　43：裏町東遺跡　44：裏町古墳　45：原東遺跡　46：原遺跡　47：八幡遺跡
48：後田遺跡　49：町遺跡　50：神漉山遺跡　51：御堂平遺跡　52：上野山遺跡　53：北前遺跡　54：佐保山東遺跡

図１　東北大学と周辺の遺跡
Fig. 1　Archaeological sites and Tohoku University

1．富沢地区周辺地形空撮（昭和22年（1947年）10月23日撮影）



2．富沢地区周辺地形図①
（明治38年（1905年）測量『仙臺南部』）

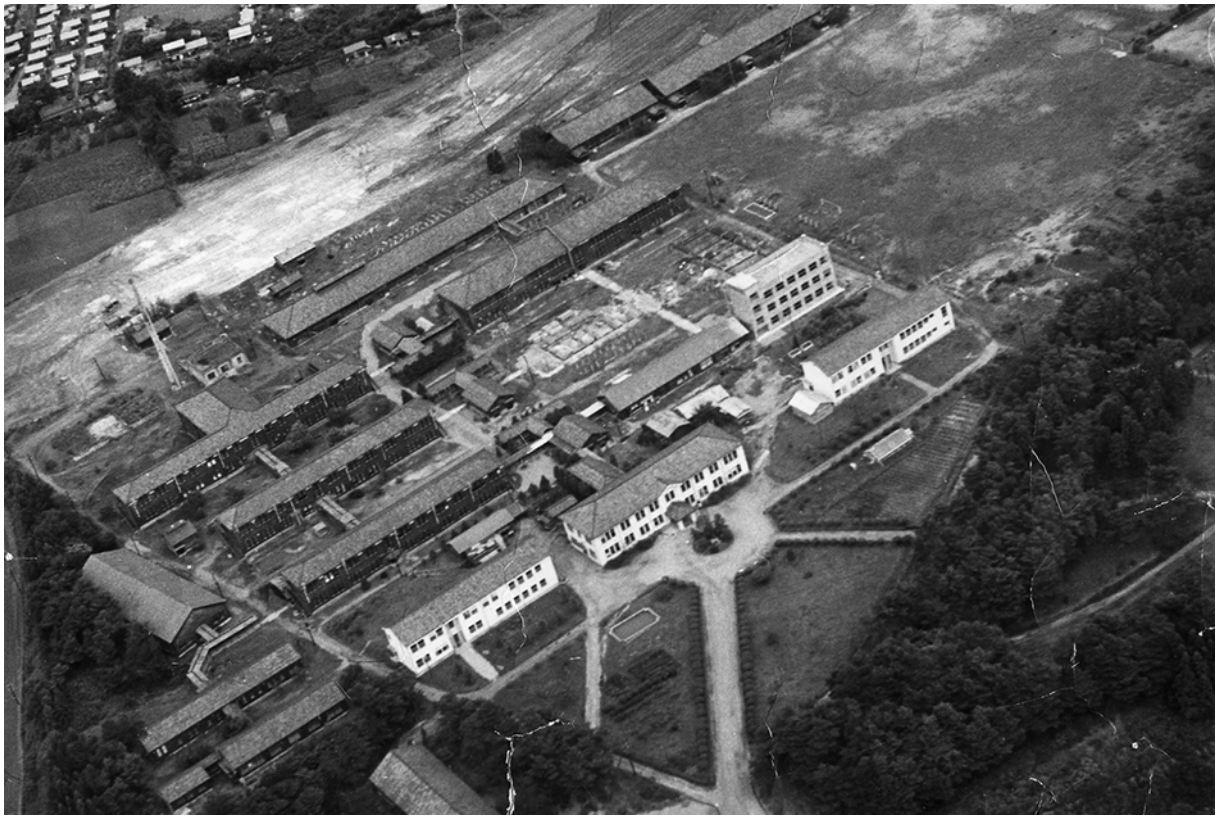
3．富沢地区周辺地形図②
（昭和３年（1928年）測量『仙台西南部』）

4．富沢地区周辺地形図③
（昭和28年（1953年）測量『仙台南部』）

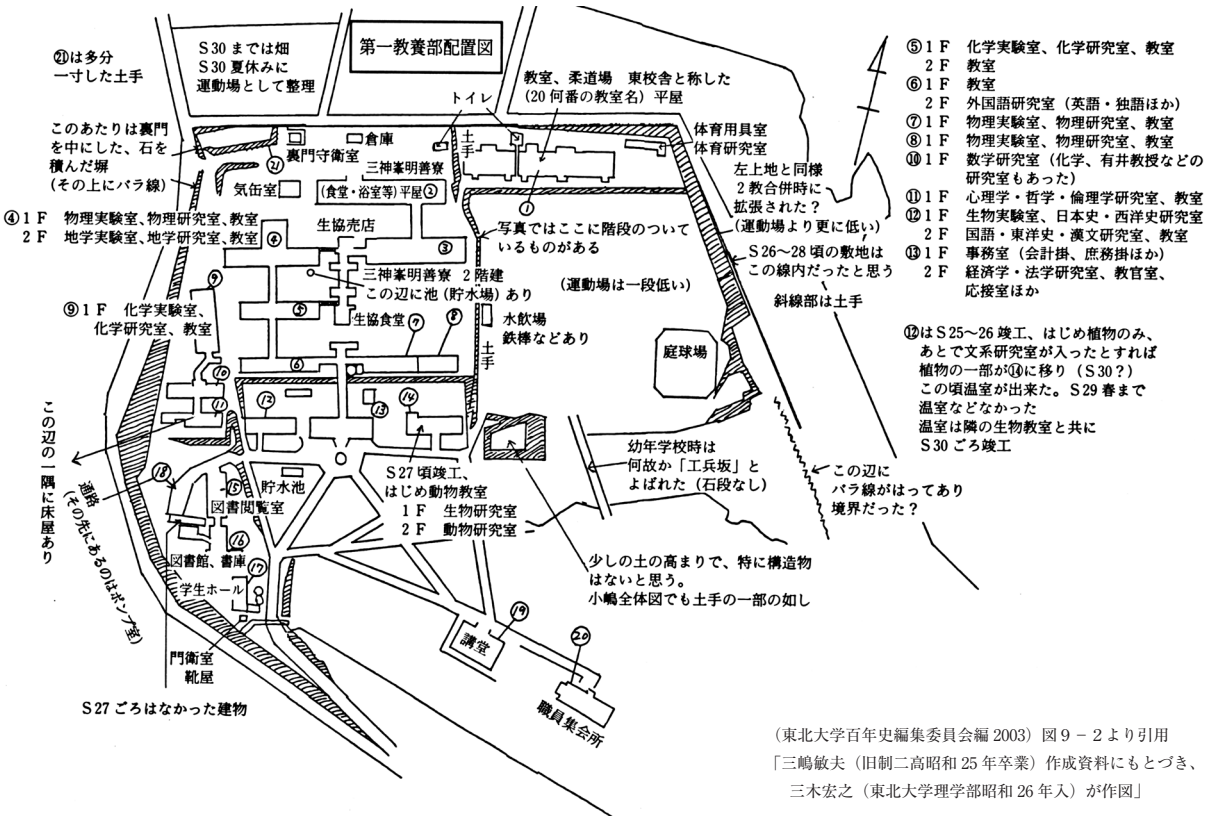
5．富沢地区周辺地形図④
（平成４年（1992年）修正測量『仙台西南部』）

図２　富沢地区周辺の地形（1）
Fig. 2　Topographical map around Tomizawa campus (1)

２・３・５：S=1/40,000
４：S=1/20,000



1．東北大学第一教養部空撮（昭和 31年（1956年）撮影：東北大学史料館提供）



（東北大学百年史編集委員会編 2003）図９－２より引用
「三嶋敏夫（旧制二高昭和 25 年卒業）作成資料にもとづき、
三木宏之（東北大学理学部昭和 26 年入）が作図」

2．東北大学第一教養部建物配置図

図３　富沢地区周辺の地形（2）
Fig. 3　Topographical map around Tomizawa campus (2)

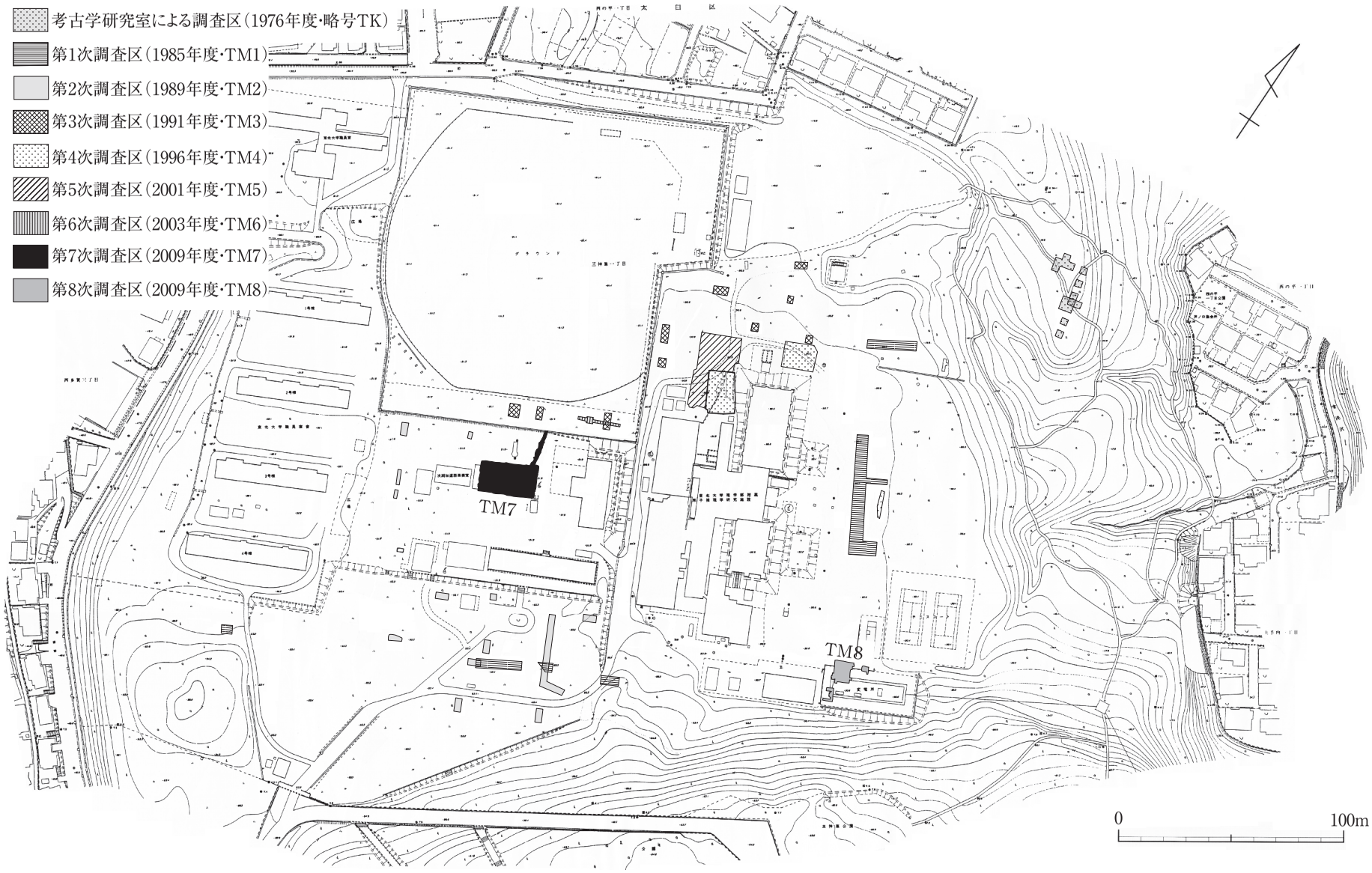


図４　富沢地区調査地点
Fig. 4　Location of excavations at Tomizawa campus (TM i.e. Tomizawa Ashinokuchi site)

（2）芦ノ口遺跡の周辺遺跡

芦ノ口遺跡の周辺には、多くの遺跡が存在している。芦ノ口遺跡南側の三神峯公園一帯は、古くより縄文時代の遺跡と知られ（伊東信雄1950）、現在は三神峯遺跡として登録されている（図１－39）。これまでに６次の調査がなされている。その結果、縄文時代前期前葉の竪穴住居跡や前期から中期にかけての遺物が出土している（１次：白鳥良一1974、２・３次：岩渕康治ほか1980、４・５次：佐伯修一2010、６次：大久保弥生ほか2009）。これらの調査の中で、第６次調査地点は、今回報告する第８次調査地点の南側斜面上方にあたり、出土している土器もほぼ同時期である。

第８次調査で確認された縄文時代前期中葉から中期初頭の時期の仙台市内の遺跡は、それ程多くはない。三神峯丘陵より北側に位置する丘陵には、八木山緑町遺跡がある（吉岡恭平ほか2001）（図１－26）。八木山緑町遺跡では、大木６式期から大木7a式期と推定される竪穴住居跡５軒が検出されている。これらの竪穴住居跡は、周溝と地床炉を有する方形の竪穴住居跡であり、いずれもその規模は小さい。仙台市内のそのほかの遺跡では、北前遺跡（渡辺紀1989）（図1－53）で土坑が検出されている程度であり、遺構を伴うような遺跡は少ない。宮城県内では、北部に大木５式期から大木7a式期を主体とする集落遺跡の栗原市嘉倉貝塚（佐藤憲幸・三好秀樹2003）があり、南部には大木7a式期から大木8b式期まで継続する集落遺跡の七ヶ宿町小梁川遺跡（村田晃一ほか1987）がある。どちらの集落遺跡でも、長軸方向が特に長い大型竪穴住居跡を有している。三神峯遺跡の立地地形、これまでの調査内容等からすると、三神峯遺跡にも同様な集落遺跡が存在している可能性が考えられる。

また、三神峯遺跡の南側には三神峯古墳群、富沢窯跡がある（図１－42・42）。三神峯古墳群は、円墳２基からなる古墳時代中期後半（５世紀後半頃）の古墳群とされてきた（伊東信雄1950、藤沢敦1995a）。しかし、平成19年（2007年）の三神峯遺跡第５次調査時に、新たに１基の円墳と円筒埴輪片を多く含む溝が１条検出され、さらに古墳群が広がるものと推定されている（佐伯修一ほか2010）。富沢窯跡には、４基の窯跡の存在が確認されており、うち１基は昭和49年（1974年）に発掘調査がなされている（渡部泰伸ほか1974、藤沢敦1995b）。その結果、５世紀後半頃に操業していた埴輪窯跡であることが判明した。この富沢窯跡で焼成された埴輪と同じ特徴を有する埴輪は、近接する三神峯古墳群のほか、仙台市内の名取川・広瀬川流域の多くの古墳から発見されている（藤沢敦2002）。

西側には、土手内横穴墓群、金山窯跡がある（図１－38・40）。土手内横穴墓群は、金洗沢を挟む両斜面に位置する。西側は昭和24年（1949年）の工事中に発見され、人骨４体分などが発見されている（伊東信雄1950）。また、対岸のＢ地点では、８世紀前半期の８基の横穴墓が調査されている（主浜光朗ほか1992）。なお、この対岸の地域には弥生、古墳時代の集落遺跡である土手内遺跡（図１－37）、あるいは７世紀第２四半世紀から中葉を中心とする須恵器窯跡の土手内窯跡（図１－36）が位置している（主浜光朗ほか1992）。金山窯跡は未調査であるが、富沢窯跡と同時期の須恵器が採集されており、５世紀後半頃の須恵器窯と考えられている（藤沢敦1995b）。

また、現在は確認することができないが、旧制第二高等学校正門前の道路傍には、かつて木戸口瓦窯跡と命名された古代の瓦窯跡も存在していたようである（内藤正恒1944、伊東信雄1950）。現在、その痕跡は確認できていないが、富沢窯跡、三神峯遺跡第５次調査時にも布目瓦等が出土（結城慎一ほか1974、佐伯修一ほか2010）している。このように、埴輪、須恵器、瓦などを生産していた数多くの窯跡が三神峯丘陵近辺には位置している。そして、芦ノ口遺跡では、これまでの調査で縄文・古墳時代の粘土採掘坑が確認されており、これらの窯跡への粘土素材の提供地とも推定される。芦ノ口遺跡における粘土層の成分分析は実施している（年報14）が、芦ノ口遺跡および周辺窯跡出土遺物等への分析は行っておらず、実証的な検討については今後の課題としたい。

２．2008年度までの調査（表１）

芦ノ口遺跡は、昭和51年（1976年）の野球場建設工事の際に発見され、東北大学文学部考古学研究室により緊急の発掘調査がなされた（年報３）。その結果、縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器、須恵系土器等の遺物や、平安時代の竪穴遺構等が発見され、周知の遺跡として登録されることとなった。その後、原子核理学研究施設において大規模な施設拡充計画が持ち上がったため、その計画に先立ち昭和60（1985）年度（第１次調査）、昭和64（1989）年度（第２次調査）、平成３（1991）年度（第３次調査）の３次にわたり、遺跡の内容と範囲確認のための調査がなされている（年報３・９）。それらの調査により、各所において縄文時代、古墳時代、平安時代の遺構・遺物等が確認され、富沢地区の全域を含む形に遺跡範囲が拡大した。また、下位から泥炭層が発見されている。

平成８（1996）年度には、施設の電源室と照射・測定室の新営、排水管改修工事に伴い第４次調査（ＴＭ４）が実施された（年報14）。そのうちの１区からは、縄文時代晩期前葉の土器とそれに伴う粘土採掘坑12基等が発見された。排水管区からは古代の竪穴住居跡の一部が確認された。

平成13（2001）年度には、第４次調査調査地点に予定されていた建物が変更されたため、新たな調査が必要となり、第５次調査（ＴＭ５）が実施された（年報19）。その結果、古墳時代前期塩釜式の土師器と共に粘土採掘坑と推定される土坑が10基発見された。また、平成16年（2004）年度には屋外排水管の改修に伴い、第３次調査N12区の隣接区域において第６次調査（ＴＭ６）がなされ、同様に古墳時代前期の粘土採掘坑と考えられる土坑７基が検出されている（年報21）。

これまでの調査から、遺跡の北側には縄文時代晩期と古墳時代前期の粘土採掘坑が分布していることが判明した。さらにその北・東側には、平安時代の竪穴住居跡等が分布することがわかった。そして、粘土採掘の目的となる良質な粘土層の下層からは、泥炭層が発見されている。この泥炭層の範囲は遺跡の北・西部に限られ、南・東部からは検出されていない（年報14）。『年報』14においては、この泥炭層から出土した植物遺体の同定、花粉分析がなされ、亜寒帯性針葉樹林であることが判明している。

３．調査の方法と経緯

（1）調査地点の位置（図４）

第７次調査地点は、原子核理学研究施設本館（現：電子光理学研究センター本館）北側に位置し、倉庫として利用されていた建物の場所になる。この場所は、第２次調査N３区、第３次調査N13・14区の南側になる。第８次調査地点は、富沢団地入口より東側に位置する特高変電所の場所となる。第１次調査Ｂ区の南方50m程の場所になる。

（2）調査の経過

第７次調査は、光源加速器棟建設に伴う調査である。建物本体のほか、北側に伸びる排水管部分についても調査を実施した。本報告では、建物本体部分を本体調査区、排水管部分を北部調査区と呼称する。総調査面積は330.3㎡である。既存の建物を撤去後、重機により整地・撹乱層等の除去を行った。整地層除去後、かつての仙台陸軍幼年学校の建物基礎と考えられる玉石とコンクリートを用いた堅固な基礎が、調査区全面に広がった。建物基礎は地山面に布掘りで掘り込まれている。この掘方の幅が狭いため、重機による撤去は難しく、人力によって撤去せざるをえなかった。人力による基礎撤去には時間がかかるため､遺構等の広がりが確認できない場合は、撤去しなかった。なお、本調査区東側には南北に走る深い撹乱が認められた。この撹乱は、仙台陸軍幼年学校に伴うものと考えられるが、建物基礎よりも深く、その用途については不明である。本調査では、この深い撹乱を利用し、南北方向のセクションを作成した。こうした整地・撹乱層の下には、包含層等は無く、すぐに地山が広

がる。その上面を遺構検出面として調査を行い、土坑81基を検出した。

第８次調査は、特高変電所の受変電設備改修に伴う調査である。増設される受変電設備の基礎で、深く掘削される場所に合わせ、１～３区の調査区を設定した。発掘調査を実施した総面積は90.2㎡である。本調査では、盛土を重機で掘削した後に、旧表土層と考えられる黒色土層を確認した。その下層を確認するため、部分的にトレンチを設定し人力で掘り下げた。遺構は確認できなかったが、縄文土器・石器などが出土した。

(3) 調査の方法

第７次調査では、１層から１点のみ、残りは土坑からの出土となるため、グリッド等で遺物は取り上げていない。第８次調査でも、調査区が狭いことから、グリッドは用いず調査区と層位により遺物を取り上げた。また、両方の調査区から出土した土器は非常に脆いため、洗浄後にアクリル系合成樹脂「バインダーNo.17」を含浸させて補強した。

調査を行った部分の平面図、断面図は、縮尺1/20で作成した。写真は35mmのモノクロとカラーリバーサル、デジタルカメラ（ニコン　D70）で適宜撮影した。

第７次調査で検出した土坑は、当初「ピット」と名づけて調査を行っていた。本報告にあたり、検討した結果「土坑」という名称に変更した（表２）。

表１　芦ノ口遺跡における調査一覧
Tab. 1　List of excavation of Ashinokuchi site

<table>
<tr><th>調査次数</th><th>調査年度</th><th>略称</th><th>目的</th><th>主な遺構など</th><th>主な遺物</th><th>文献</th><th>調査面積（㎡）</th></tr>
<tr><td>—</td><td>1976</td><td>—</td><td>遺跡確認調査</td><td>竪穴遺構（平安）、ピット</td><td>縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器</td><td rowspan="2">年報３</td><td>126</td></tr>
<tr><td>第１次</td><td>1985</td><td>TM1</td><td rowspan="3">遺跡範囲の確認と性格究明のための調査</td><td rowspan="3">溝跡、ピット、泥炭層など</td><td>縄文土器、石器、土師器、須恵器、埴輪</td><td>745</td></tr>
<tr><td>第２次</td><td>1989</td><td>TM2</td><td rowspan="2">縄文土器、石器、土師器</td><td rowspan="2">年報９</td><td>305.8</td></tr>
<tr><td>第３次</td><td>1991</td><td>TM3</td><td>202.5</td></tr>
<tr><td>第４次</td><td>1996</td><td>TM4</td><td>実験棟新営に伴う調査</td><td>竪穴住居跡（平安）、粘土採掘坑（縄文）、ピット、埋没林など</td><td>縄文土器、石器</td><td>年報14</td><td>323</td></tr>
<tr><td>第５次</td><td>2001</td><td>TM5</td><td>実験棟新営に伴う調査</td><td>溝跡、粘土採掘坑（古墳）</td><td>土師器、石器</td><td>年報19</td><td>512</td></tr>
<tr><td>第６次</td><td>2004</td><td>TM6</td><td>屋外配水管布設に伴う調査</td><td>粘土採掘坑（古墳）</td><td>土師器</td><td>年報21</td><td>24.5</td></tr>
<tr><td>第７次</td><td>2009</td><td>TM7</td><td>実験棟新営に伴う調査</td><td>粘土採掘坑（縄文・古墳）</td><td>縄文土器、土師器</td><td>調査報告３（本報告書）</td><td>330.3</td></tr>
<tr><td>第８次</td><td>2009</td><td>TM8</td><td>特高変電所整備改修工事に伴う調査</td><td>沢状の落ち込み</td><td>縄文土器、石器</td><td>調査報告３（本報告書）</td><td>90.2</td></tr>
<tr><td>第９次</td><td>2012</td><td>TM9</td><td>設備災害復旧工事に伴う調査</td><td>沢状の落ち込み</td><td>縄文土器、石器</td><td>報告予定</td><td>89.6</td></tr>
<tr><td>第10次</td><td>2013</td><td>TM10</td><td>研究棟増築に伴う調査</td><td>なし</td><td>土器</td><td>報告予定</td><td>292.1</td></tr>
</table>

表２　芦ノ口遺跡第７次調査遺構名称対照表
Tab. 2　List of the features name which are collated at TM7

ピット番号	確定名称	備考
1	1号土坑	
2	2号土坑	
3	3号土坑	
4	4号土坑	
5	5号土坑	
6	6号土坑	
7	7号土坑	
8	8号土坑	
9	9号土坑	
10	10号土坑	
11	11号土坑	
12	12号土坑	
13	13号土坑	
14	14号土坑	
15	15号土坑	
16	16号土坑	
17	17号土坑	
18	18号土坑	
19	19号土坑	
20	20号土坑	
21	21号土坑	
22	22号土坑	
23	23号土坑	
24	24号土坑	
25	25号土坑	
26	26号土坑	
27	27号土坑	
28	28号土坑	
29	29号土坑	
30	30号土坑	
31	31号土坑	
32	32号土坑	
33	33号土坑	
34	34号土坑	
35	35号土坑	
36	36号土坑	
37	37号土坑	
38	38号土坑	
39	39号土坑	
40	40号土坑	
41	41号土坑	
42	42号土坑	
43	43号土坑	
44	44号土坑	
45	45号土坑	

ピット番号	確定名称	備考
46	46号土坑	
47	欠番	51号土坑に統合
48	欠番	
49	49号土坑	
50	50号土坑	
51	51号土坑	
52	欠番	
53	欠番	
54	欠番	35号土坑に統合
55	55号土坑	
56	56号土坑	
57	57号土坑	
58	58号土坑	
59	59号土坑	
60	60号土坑	
61	61号土坑	
62	62号土坑	
63	63号土坑	
64	64号土坑	
65	65号土坑	
66	66号土坑	
67	67号土坑	
68	68号土坑	
69	69号土坑	
70	70号土坑	
71	71号土坑	
72	72号土坑	
73	73号土坑	
74	74号土坑	
75	75号土坑	
76	76号土坑	
77	77号土坑	
78	78号土坑	
79	79号土坑	
80	80号土坑	
81	81号土坑	
82	82号土坑	
83	83号土坑	
84	84号土坑	
85	85号土坑	
86	86号土坑	

表３　芦ノ口遺跡第７次調査遺構属性表（1）
Tab. 3　Attribute of the features at TM7 (1)

土坑名	区	調査区	規模				古い遺構	新しい遺構	出土遺物		
			面積（㎠）	長軸×短軸（㎝）	深さ（cm）	底面標高（m）			種別・点数	図	図版
１号土坑	I－6・7・8	北部	（40279.1）	（650）×（86）	52	51.16			土師器13点	19－１	24－1
２号土坑	I－8・9	本体	（724.2）	30×（24）	12	51.66					
３号土坑	I－9	本体	（569.5）	（50）×（16）	32	51.60					
４号土坑	H－9	本体	2851.8	70×52	8	51.48					
５号土坑	G－10	本体	（2470.8）	62×46	14	51.72					
６号土坑	G・H－10・11	本体	（41650.9）	264×（220）	22	51.66			縄文土器８点 不明漆製品１点	－	24－2・11
７号土坑	G－8	本体	（6371.3）	100×（78）	20	51.50					
８号土坑	G－7	本体	（2796.2）	（98）×（42）	28	51.52					
９号土坑	G－8	本体	（1895.9）	（42）×（58）	8	51.70					
10号土坑	H－7	本体	967.8	28×42	18	51.58					
11号土坑	H－7・8	本体	1244.9	46×32	12	51.60					
12号土坑	G・H－8	本体	（695.1）	40×（14）	12	51.62					
13号土坑	G－6・7	本体	（7231.6）	（94）×（100）	14	51.74					
14号土坑	H－9・10	本体	（772.1）	58×（26）	12	51.62					
15号土坑	H－8	本体	（833.6）	（12）×（58）	26	51.46					
16号土坑	G－8	本体	（647.9）	（40）×（28）	32	51.62					
17号土坑	G－7	本体	（384.8）	（44）×（6）	10	51.72					
18号土坑	G－6・7	本体	（2650.5）	（68）×56	12	51.70					
19号土坑	F－10	本体	（1174.1）	56×（26）	20	51.66					
20号土坑	F－9・10	本体	（15789.9）	196×（120）	8	51.76			不明土器１点		
21号土坑	E－10	本体	（985.4）	42×32	16	51.52					
22号土坑	E－9	本体	（5159.1）	（82）×（70）	30	51.48					
23号土坑	F－7	本体	（1909.5）	80×（42）	32	51.56					
24号土坑	F－6	本体	（596.7）	（24）×（24）	28	51.62	42号土坑				
25号土坑	F－6	本体	（1139.8）	（40）×（44）	30	51.60					
26号土坑	F－7	本体	297.6	20×18	24	51.64					
27号土坑	F－7	本体	（1026.1）	（34）×（30）	18	51.68					
28号土坑	F－6・7	本体	（10129.8）	76×（106）	14	51.76					
29号土坑	F－7	本体	（1331.9）	62×（20）	22	51.66					
30号土坑	F－8	本体	（1895.5）	64×（40）	14	51.62					
31号土坑	E－8	本体	（1139.6）	40×（34）	12	51.66					
32号土坑	H－8	本体	（2700.6）	（44）×（100）	28	51.50					
33号土坑	D・E－7・8	本体	（13664.8）	（152）×（116）	32	51.50			縄文土器13点 土師器？16点	19－2	24－3
34号土坑	E－7	本体	（5158.1）	94×（62）	24	51.62					
35号土坑	D・E－7	本体	（5114.1）	（58）×（100）	—	—					
36号土坑	E－7	本体	（2928.0）	72×68	36	51.72					
37号土坑	D・E－7	本体	（1474.7）	（40）×（44）	30	51.40					
38号土坑	E－6	本体	（356.1）	（28）×（14）	28	51.66					
39号土坑	E－6	本体	（3105.7）	64×（54）	26	51.62					
40号土坑	D・E－6・7	本体	（11720.1）	（116）×（114）	60	51.30			土師器28点	—	24－6・7
41号土坑	E－7	本体	（800.9）	（28）×（14）	16	51.72					
42号土坑	F－6	本体	（718.2）	36×（26）	28	51.60		24号土坑	縄文土器35点	19－3	24－4

・規模の（　　）は残存面積・残存長を示す。
・「深さ」は、最も深い値を示した。

表４　芦ノ口遺跡第７次調査遺構属性表（2）
Tab. 4　Attribute of the features at TM7 (2)

土坑名	区	調査区	規模				古い遺構	新しい遺構	出土遺物		
			面積（㎠）	長軸×短軸（㎝）	深さ（cm）	底面標高（m）			種別・点数	図	図版
43号土坑	Ⅰ－5	北部	（531.9）	（36）×（16）	38	51.36					
44号土坑	Ⅰ－5	北部	（442.3）	（20）×（34）	22	51.44					
45号土坑	Ⅰ－5	北部	3851.7	88×52	44	51.36			土師器３点	—	24－8
46号土坑	Ⅰ・Ｊ－3	北部	（2285.8）	56×（52）	14	51.54			土師器６点		
49号土坑	Ⅰ－3	北部	（5807.0）	104×（102）	36	51.38			不明土器７点		
50号土坑	Ⅰ－4・5	北部	（20607.8）	（200）×（164）	44	51.30					
51号土坑	Ⅰ－4	北部	（7533.2）	（158）×（74）	48	51.34					
55号土坑	Ｄ－8	本体	（2052.7）	86×（20）	2	51.78					
56号土坑	Ｃ－8	本体	（1266.6）	50×36	8	51.78					
57号土坑	Ⅰ・Ｊ－1	北部	（9886.5）	（198）×（56）	44	51.22			土師器４点 不明土器２点	—	24－5
58号土坑	Ｃ－8	本体	（3945.5）	90×（44）	16	51.70					
59号土坑	Ⅰ・Ｊ－2	北部	（13481.5）	（198）×（100）	38	51.38			土師器97点 不明土器10点	—	24－10
60号土坑	Ｃ・Ｄ－7・8	本体	（4749.8）	（126）×（90）	30	51.48					
61号土坑	Ｄ－7・8	本体	（10554.2）	（120）×106	18	51.72					
62号土坑	Ｄ－10	本体	（1486.6）	（106）×（96）	12	51.72					
63号土坑	Ｃ－10	本体	（436.3）	36×（22）	12	51.68					
64号土坑	Ｄ－9	本体	（294.4）	30×（12）	8	51.76					
65号土坑	Ｃ－7	本体	（1118.4）	（50）×（26）	6	51.74					
66号土坑	Ｅ－9	本体	（3891.6）	102×（64）	8	51.74					
67号土坑	Ｄ－7	本体	（3349.0）	82×（36）	16	51.76					
68号土坑	Ｃ・Ｄ－7	本体	（13662.0）	142×（104）	36	51.60			縄文土器２点	19－4	24－9
69号土坑	Ｃ・Ｄ－6	本体	（1657.3）	88×（6）	24	51.62					
70号土坑	Ｃ・Ｄ－10	本体	（1112.9）	（42）×32	10	51.74					
71号土坑	Ｃ－10	本体	（6511.2）	142×（100）	16	51.74					
72号土坑	Ｃ－10	本体	（1061.6）	66×（14）	24	51.66					
73号土坑	Ｃ－9	本体	（707.4）	（26）×（30）	10	51.74					
74号土坑	Ｃ・Ｄ－9	本体	（1357.8）	（48）×（40）	10	51.74					
75号土坑	Ｃ－7・8	本体	（1631.5）	（94）×（18）	14	51.68					
76号土坑	Ｂ－8	本体	736.8	32×28	40	51.34					
77号土坑	Ｂ－8	本体	（1711.4）	62×（36）	6	51.64					
78号土坑	Ｂ－9	本体	（596.0）	32×24	8	51.62					
79号土坑	Ｂ・Ｃ－6・7	本体	（40104.0）	（292）×（190）	14	51.68					
80号土坑	Ａ・Ｂ－6・7	本体	（32107.1）	（228）×（188）	20	51.74					
81号土坑	Ⅰ－3	北部	693.2	32×26	14	51.52					
82号土坑	Ⅰ－2・3	北部	1698.5	46×46	24	51.44					
83号土坑	Ⅰ－3・4	北部	（16381.8）	174×（128）	18	51.52			土師器３点		
84号土坑	Ⅰ－5	北部	（202.9）	（20）×（12）	34	51.36					
85号土坑	Ｊ－2・3	北部	（2050.5）	（46）×（46）	38	51.46			不明土器１点		
86号土坑	Ⅰ－3	北部	1298.6	36×46	32	51.32					

・規模の（　　）は残存面積・残存長を示す。
・「深さ」は、最も深い値を示した。

第Ⅱ章　芦ノ口遺跡第７次調査（ＴＭ７）

１．基本層序

今回の調査区では、７枚の堆積層を確認した（図５・６）。１層が近・現代の盛土や撹乱などである。その直下の２層以下は地山となる。今回の調査区では、旧表土層は確認されていない。２層は小さな礫や砂を含むが、比較的夾雑物が少ない水性堆積の粘土層である。以下の３、４層もその土質から水性堆積層と考えられる粘土層である。３層は、砂を多く含み、部分的に粘土がラミナ状に入る。４層は、夾雑物や砂を全く含まない緻密で良質な粘土層である。その下部は、グライ化し青く変色している。第４次調査（年報14）では、この良質な粘土を採掘した縄文時代晩期の土坑が検出されている。５層は、黒色主体で部分的に茶褐色を呈する粘土層である。第４次調査で確認された泥炭層に相当する。本調査区では、形状を保った植物遺体はほぼ無く、そのほとんどは分解され土壌化している。この５層は、南側では12cm程の厚さしか無いが、北側では20～30cm程の厚さとなる。６・７層は礫層となる。南側で確認した６層は、その土質から７層の礫が風化し土壌化したものと考えられる。

これまでの周辺の調査で同様の土層が確認されている第４次調査地の土層と対比させるならば、今回の調査区４層が、第４次調査２区6B・6C層に対応し、同様に５層が７層に対応する（図７）。この特徴的な４、５層を鍵とするならば、今回の調査区２、３層は、第４次調査２区6A層に対応する。同様に、南側の第２次調査N5区と対比させると、６－４・６－５層は２・３層、７層は４層、８層は５層と対応する。これらの対応関係からすると、元々の地形は南から北へ向かって低くなるように傾斜していることが理解できる。そして、この様相は、明治38年（1905年）の地形図（図２－２）から読み取れる地形と一致する。

２．検出遺構

【１号土坑】（図６・14、図版３）

Ｉ－６・７・８区に位置する、今回の調査では規模の大きい土坑である。残存長6.5m、残存幅0.86mを測る。調査区東側にさらに伸びるものと考えられる。深さは52cmであり、基本層３層上部が底面となる。埋土の主体は、２層あるいは３層由来と考えられる砂・粘土である。そして、植物遺体が土壌化した黒あるいは灰色の粘土を、薄く層状に含む。場所によっては、黒色度が強い場所もある。床面が大きく凹凸することから、複数の土坑の存在も考えられたが、明瞭に区分できず、一つの土坑として扱った。出土遺物は土師器13点（286.8g）が出土している。図化できた資料は土師器１点のみである（図19・図版24－P1）。

【２号土坑】（図６・13、図版４）

Ｉ－８・９区に位置する小型方形の土坑である。深さは12cmと浅い。底面は基本層２層となる。埋土は、２層由来の粘土を主体とし、１号土坑と同様に黒色の粘土を含む。

【３号土坑】（図６、13、図版４）

Ｉ－９区に位置する長方形状を呈する土坑である。さらに東側に伸びるものと考えられる。深さは32cmである。底面は基本層２層となる。その埋土は２号土坑と同様である。

【４号土坑】（図13、図版４）

Ｈ－９区に位置する不整楕円形の土坑である。深さは最大で８cmと浅い。

【５号土坑】（図13、図版４）

Ｇ－10区に位置する不整楕円形の土坑である。深さは14cmと比較的浅いが、埋土は３層に区分できる。埋土上層の１層には、黒色の粘土を含む。底面は、有段となり凹む。

【６号土坑】（図13、図版５）

Ｇ・Ｈ－10・11区に位置する。残存長2.64m、残存幅2.2mの方形を呈する大きな土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。基本層３層上部が底面となる。その底面には緩やかな凹凸が認められる。埋土は１層のみで黒色の

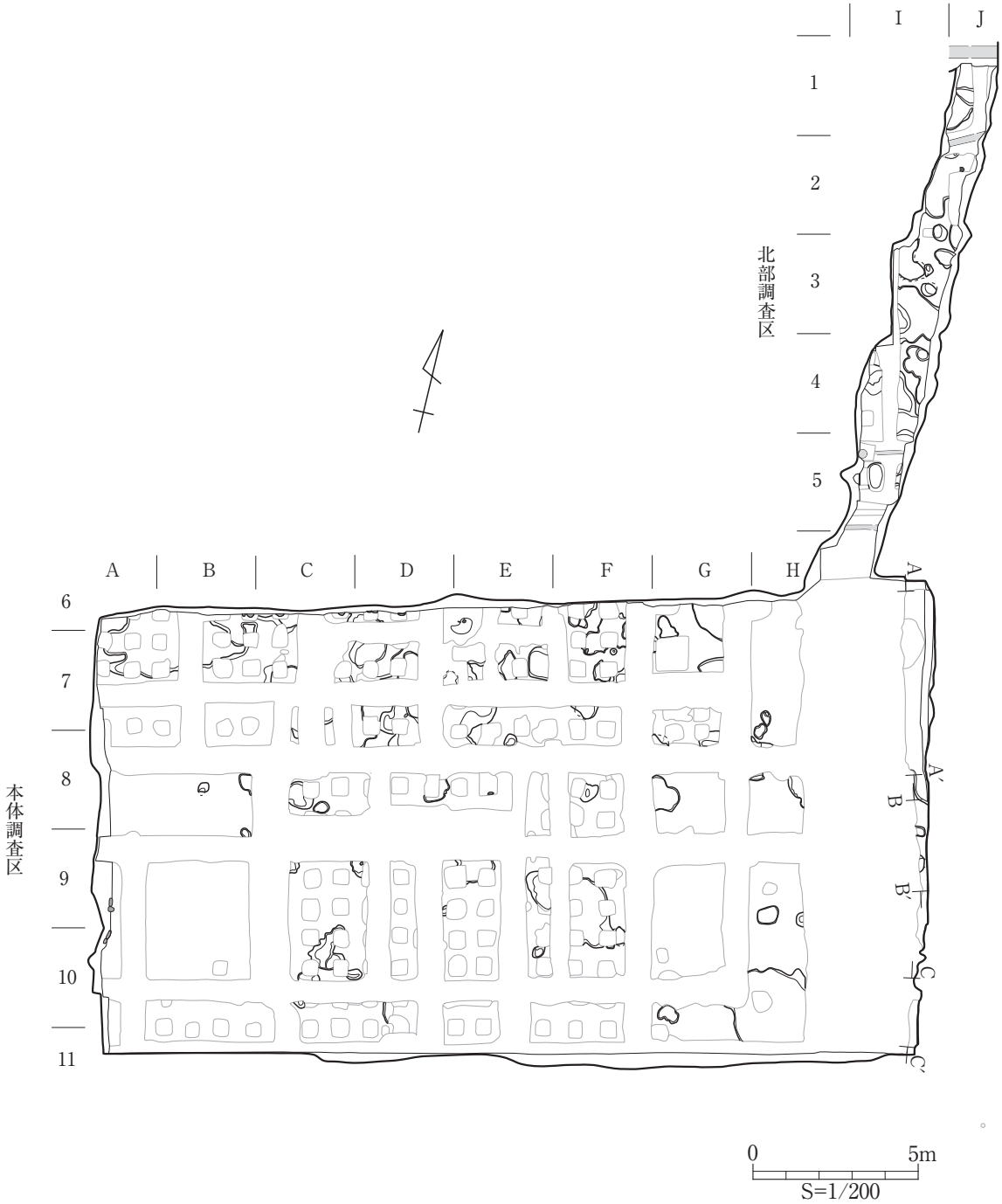
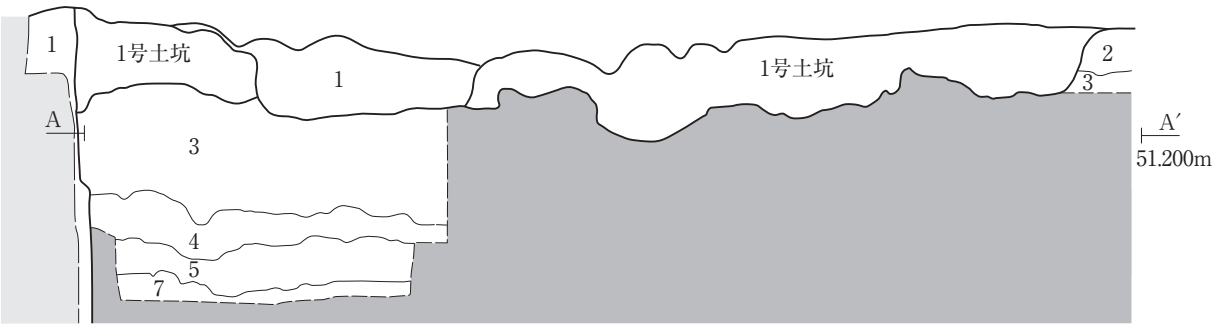
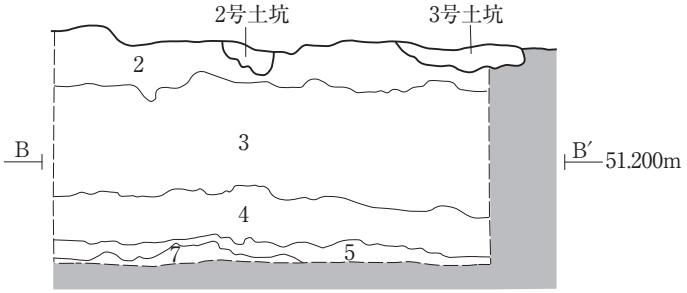


図５　芦ノ口遺跡第７次調査区平面図
Fig. 5　Plan of excavation at TM7

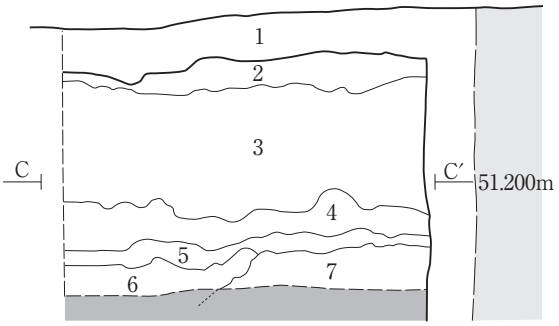
①東壁セクション（北側）



②東壁セクション（中央）



③東壁セクション（南側）



1号土坑
　1　2.5Y5/1 黄灰色　粘土　粘性強･しまり強　黒褐色土・オリーブ黄色粘土ブロックを大きく斑に含む　白色岩片（径2－5mm）を僅かに含む
　マンガンを含む
2号土坑
　1　5YR3/1 褐灰色　粘土質シルト　粘性中･しまり中　灰黄褐色土・明褐色土ブロックを含む　炭化物を僅かに含む
3号土坑
　1　7.5YR5/2 灰褐色　粘土質シルト　粘性中･しまり中　褐灰色土粘土ブロックと明褐色土ブロックを含む　炭化物を僅かに含む

基本層
　1　近現代の盛土・撹乱等の層
　2　10YR6/2 灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　明黄褐色粘土を斑状に含む　くされ礫を僅かに含む
　3　2.5Y7/6 明黄褐色　砂　粘性なし・しまり中　浅黄色粘土をラミナ状に含む　一部に径5－10mm のくされ礫を僅かに含む
　4　7.5Y6/2 灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり強　良質な粘土層
　5　10YR3/2 黒褐色　粘土　粘性強･しまり強　泥炭層　一部に風化した植物遺体を含む
　6　10YR7/3 にぶい黄橙々色　粘土　粘性強･しまり強　風化した礫を僅かに含む　帯状に黄褐色に変色した部分を含む
　7　5Y5/2 灰オリーブ　粘土　粘性強・しまり強　くされ礫を多く含む

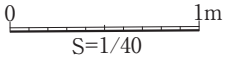


図６　芦ノ口遺跡第７次調査区断面図
Fig. 6　Cross section of excavation at TM7

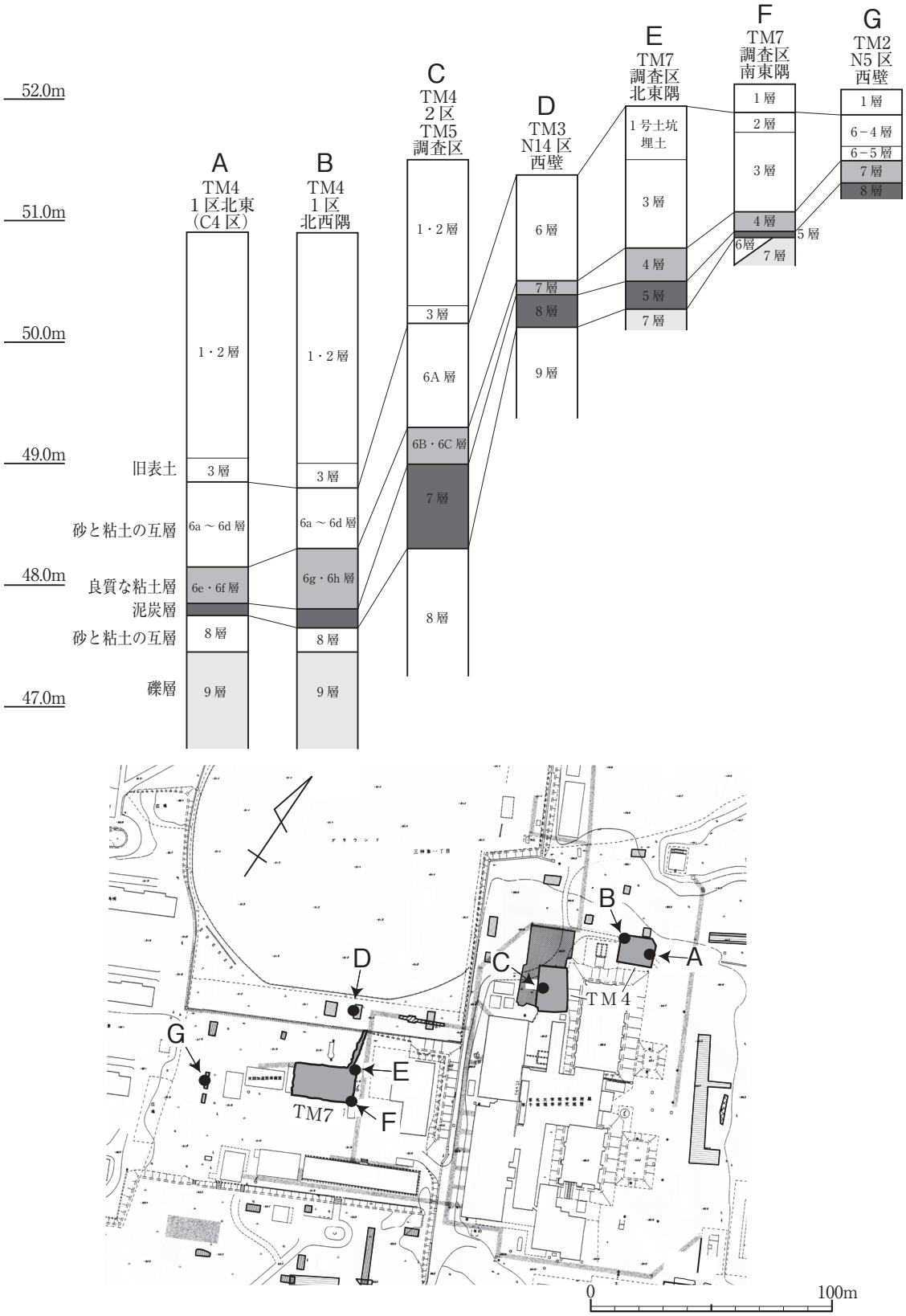


図７　芦ノ口遺跡層序模式図
Fig. 7　Schematic profiles of TM7

粘土を斑状あるいは線状に含む。深さは22cmとなる。遺物は底部近くから縄文土器８点（43.9g）、不明漆製品が１点出土している（図版24－P2・WL1）。縄文土器の詳細な時期は不明である。

【７号土坑】（図14・15、図版５）

Ｇ－８区に位置する不正形の土坑である。深さは16cmであり、床面には微小な凹凸がある。埋土１層のみであり、部分的に黒色の粘土を含む。

【８号土坑】（図14・15、図版５）

Ｇ－７区に位置する楕円形の土坑である。壁は垂直に立ち上がり、底面は凹凸が著しい。凹部の深さは最大で28cmである。また、埋土１・３層に黒色の粘土を含む。

【９号土坑】（図14・15、図版５・６）

Ｇ－８区に位置し方形状を呈する土坑である。底面は平坦である。埋土は8cmと浅い。

【10号土坑】（図14・15、図版６）

Ｈ－７区に位置し楕円形状を呈する土坑である。壁は垂直に立ち、底面は北側が窪む以外は平坦である。埋土は部分的に黒あるいは灰色の粘土を含む。深さは18cmである。

【11号土坑】（図14・15、図版６）

Ｈ－７・８区に位置し、２つの楕円が接触したような形状を呈する土坑である。２基が重複しているように見受けられるが、平面・断面共に区分できなかった。深さは12cmで、埋土は１層とした。埋土上部では灰色、下部では黒色の粘土が多く混じる。

【12号土坑】（図14・15、図版６）

Ｇ・Ｈ－８区に位置する不正形の土坑である。その大部分は撹乱により破壊されている。深さは12cmである。

【13号土坑】（図14・15、図版６・７）

Ｇ－６・７区に位置するやや規模の大きい土坑である。底面は凹凸がある。深さは14cmである。

【14号土坑】（図13、図版７）

Ｈ－９・10区に位置し円形の小型の土坑である。東側を撹乱により破壊される。深さは12cmである。

【15号土坑】（図14・15、図版７）

Ｈ－８区に位置する。そのほとんどが撹乱により破壊される。深さは26cmである。底面は基本層３層となる。

【16号土坑】（図14・15、図版７）

Ｇ－８区に位置する。上端部は僅かに残るだけであるが、フラスコ状に広がる。深さは32cmあるが、分層はできなかった。埋土下部には黒色粘土が層状に堆積する。

【17号土坑】（図14・15、図版７・８）

Ｇ－７区に位置する。そのほとんどが撹乱により破壊されている。皿状に窪む土坑であり、深さ10cmと浅い。

【18号土坑】（図14・15、図版８）

Ｇ－６・７区に位置する不正形の土坑である。底面は凹凸があり、深さは12cmと浅い。

【19号土坑】（図11・12、図版８）

Ｆ－10区に位置する楕円形の土坑である。深さは20cmである。埋土には黒色、灰色粘土を層状に含む。

【20号土坑】（図11・12、図版８）

Ｆ－９・10区に位置し、残存長1.96m、残存幅1.2mの大きめの土坑である。底面に凹凸がある。埋土は8cmと浅い。埋土には礫を含み、種別不明の土器１点（1.8g）が出土している。図化等はできなかった。

【21号土坑】（図11・12、図版８）

Ｅ－10区に位置し、楕円形を呈する小型の土坑である。深さは16cmであり、埋土は２層に分かれる。埋土上層は、黒色の粘土である。

【22号土坑】（図11・12、図版９）

Ｅ－９区に位置し、楕円形のやや規模の大きい土坑である。深さは30cmであり、埋土は２層に区分できる。下層の２層には黒色の粘土と木質の植物遺体が層状に混じる。その植物遺体はほぼ分解され、その周辺が黒い粘土となっている。

【23号土坑】（図14・15、図版９）

Ｆ－７区に位置し、不正方形でフラスコ状を呈する土坑である。深さは32cmである。底面には凹凸がある。

【24号土坑】（図14・16、図版９）

Ｆ－６区に位置する楕円形を呈する小型の土坑である。42号土坑と重複し、24号土坑の方が新しい。深さは24cmで、埋土は５層に細分できる。底面には凹凸がある。

【25号土坑】（図14・16、図版９）

Ｆ－６区に位置し、調査区外に伸びる土坑である。深さは30cmであり、埋土は２層に分かれる。埋土上層は黒色あるいは灰色の粘土を層状に含む。

【26号土坑】（図14・16、図版９・10）

Ｆ－７区に位置する小型の柱穴状の土坑である。柱痕跡が無いことや、埋土の状況から土坑と判断した。深さは24cmで、埋土は３層に分かれる。埋土最下層には黒色粘土をブロック状に含む。

【27号土坑】（図14・16、図版10）

Ｆ－７区に位置し、南・東側を撹乱により破壊されている土坑である。深さは18cmで埋土は２層に分かれる。

【28号土坑】（図14・16、図版10）

Ｆ－６・７区に位置する残存長0.76m、残存幅1.06mのやや大きめの不整形の土坑である。深さは14cmであり、全体的に浅い。底面にはゆるやかな凹凸があり、南西部には大きめの礫がある。

【29号土坑】（図14・16、図版10）

Ｆ－７区に位置する不整方形の土坑である。底面は凹凸が著しく、部分的にはフラスコ状になる。深さは22cmで、埋土は２層に分かれる。埋土上層には黒色粘土を多く含む。また、この層には灰を含んでいる。

【30号土坑】（図14・16、図版10・11）

Ｆ－８区に位置する不整円形の土坑である。底面は丸い。深さは14cmで、埋土は２層に分かれる。埋土上層には黒色の粘土を多く含む。また、灰も含む。

【31号土坑】（図８・９、図版11）

Ｅ－８区に位置する小型円形の土坑である。深さは12cmで、底面は平らである。

【32号土坑】（図14・16、図版11）

Ｈ－８区に位置する不整形の土坑である。そのほとんどは撹乱により破壊されている。底面は基本層３層を床面とする。深さは28cmで、埋土は１層である。埋土には、部分的に黒色粘土が含まれる。

【33号土坑】（図８・９、図版11）

Ｄ・Ｅ－７・８区に位置する残存長1.52m、残存幅1.16mの規模の大きな不整形の土坑である。その底面には凹凸が顕著に認められ、場所によってはピット状に一段下がる。深さは32cmで、埋土は２層に分かれる。そのうち検出面に近い部分では、黒色粘土が認められる。遺物は、埋土から土師器かあるいは縄文土器と考えられる土器片が25点（89.1g）出土している。図化した１点（図19・図版24－P3）は、縄文土器と考えられ、床面付近から出土している。

【34号土坑】（図14・16、図版11・12）

Ｅ－７区に位置する方形に近い形状の土坑である。底面は比較的平らで、壁はやや垂直気味に立ち上がる。深さは24cmあるが、埋土は１層のみである。

【35号土坑】（図８、図版12）

Ｄ・Ｅ－７区に位置し、３方向を撹乱により破壊された土坑である。当初２基の土坑（35号・54号土坑）が重複していると考えたが、平面と断面の検討により１基のみ（35号土坑）と判断した。床面は平らで深さは浅い。土坑セクション図は、誤りのため作成していない。

【36号土坑】（図８・９、図版12）

Ｅ－７区に位置し、不整な楕円形を呈する土坑である。床面には凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。深さは36cmと深いが、埋土は１層のみである。埋土上部には黒色粘土を層状に含み、部分的に灰が確認できる。

【37号土坑】（図８・９、図版12）

Ｄ・Ｅ－７区に位置し、四方が撹乱により破壊され、下部のみが遺存した土坑である。壁はややオーバーハング気味となる。深さは28cmであり、埋土は２層に分かれる。そのうち上層は黒色と灰色の粘土が主体となる。

【38号土坑】（図８・９、図版12・13）

Ｅ－６区に位置し、そのほとんどは北側の調査区外に伸びる土坑である。深さは28cmで、埋土は４層に分かれる。３層は灰色の粘土、２層は黒色の粘土が主体となる。

【39号土坑】（図14・16、図版13）

Ｅ－６区に位置し、北側の調査区外に伸びる土坑である。壁はややオーバーハングし、床面は僅かに凹凸する。深さは26cmあるが、埋土は１層のみである。

【40号土坑】（図８・９、図版13）

Ｄ・Ｅ－６・７区に位置し、北側の調査区外に伸び、そのほかの三方は撹乱によって破壊されている。その規模は、残存長1.16m、残存幅1.14mと大きい。底部には僅かな凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。深さは60cmで、埋土は４層に分かれる。上層の１～３層には黒色あるいは灰色の粘土を斑状に含んでいる。この上層から土師器28点（78.3g）が出土している（図版24－P6・P7）。

【41号土坑】（図８・９、図版13）

Ｅ－７区に位置し、そのほとんどは撹乱により破壊され、部分的に残っていた土坑である。深さは16cmで、埋土は１層のみである。37号土坑の上部である可能性もある。

【42号土坑】（図14・16、図版13・14）

Ｆ－６区に位置し、北側が撹乱により破壊されている楕円形の土坑である。東側は24号土坑と重複し、42号土坑の方が古い。壁は垂直に立ち上がる。深さは28cmあるが、埋土は１層のみである。底部付近より縄文土器35点（346.3g）が出土した。図化したP4（図19・図版24）は底部であるが、伏せた状態で出土している（図版14－1）。その隣にある破片は同一個体のものと考えられるが、接合はしなかった。

【43号土坑】（図17・18、図版14）

Ｉ－５区に位置し、東側は調査区外へと伸び、北と西側は撹乱により破壊されている小型の土坑である。壁はオーバーハングする。底面は平らで、深さは38cmあるが、埋土は１層のみである。地山由来の黄色粘土のほか、黒色や灰色の粘土が層状に堆積する。

【44号土坑】（図17・18、図版14）

Ｉ－５区に位置する。部分的に検出した小型の土坑であり、西側は調査区外に伸びる。壁は緩やかに立ち上がる。深さは22cmで、埋土は２層に分かれる。埋土下層には、黒色や灰色の粘土が層状に混じる。

【45号土坑】（図17・18、図版14・15）

Ｉ－５区に位置し、周囲が撹乱により破壊されているが、ほぼ楕円形の土坑である。壁は垂直気味に立ち上がる。底面には凹凸がある。深さは44cmあるが、埋土は細分できなかった。埋土は、基本層由来の黄色粘土、黒色と灰色の粘土が層状に堆積する。その中から土師器と推定される土器（図版24－P8）が出土した。

【46号土坑】（図17・18、図版15）

Ⅰ・Ｊ－３区に位置し、不整楕円形を呈する土坑である。北側の壁は緩やかに立ち上がるが、南側の壁はオーバーハングする。深さは14cmで、埋土は１層のみである。黒色粘土を斑状に含む。この埋土から土師器６点（7.1g）が出土したが、図化等はできなかった。

【49号土坑】（図17・18、図版15）

Ⅰ－３区に位置する不整形の土坑である。底面は段を有し、微小な凹凸がある。深さは36cmで、埋土は上下の２層に分かれる。上層は、黒色粘土を層状あるいは斑状に含む。埋土から種別不明の土器７点（9.3g）が出土しているが、細片のため図化等はしていない。

【50号土坑】（図17、図版15）

Ⅰ－４・５区に位置する残存長2.00m、残存幅1.64mの大型の土坑である。中央部は撹乱により破壊されている。底面は凹凸が著しく、南側は一段低くなる。その深さは44cmで、埋土は５層に細分できる。そのうち、５層には黒色の粘土が層状に入る。

【51号土坑】（図17、図版15・16）

Ⅰ－４区に位置する不整形の土坑である。壁はオーバーハング状になり、底面には凹凸が認められる。当初は２基の土坑として認識したが、埋土断面の観察から、一連の遺構と判断した。深さは約48cmと深く、埋土は６層に分かれる。そのうち南側最下層の５層には黒色と灰色の粘土が斑状に多量に入る。

【55号土坑】（図８・９、図版16）

Ｄ－８区に位置する不正方形の土坑である。壁は緩やかに立ち上がり、深さは2cmとごく浅い。

【56号土坑】（図８・９、図版16）

Ｃ－８区に位置する楕円形を呈する小型の土坑である。壁は緩やかに立ち上がり、深さは5cmと浅い。

【57号土坑】（図17、図版16・24）

Ⅰ・Ｊ－１区に位置する最も北側の土坑である。撹乱で北側と東側は破壊されているが、その規模は大きく、残存長1.98m、残存幅0.56mで、深さは44cmとなる。残存していた南壁は垂直気味に立ち上がる。埋土は４層に区分できる。最上層の１層はそのほとんどが黒色あるいは灰色の粘土である。その層からは、土師器４点（84.7g）（図版24－P5）、縄文土器４点（73.2g）、不明土器２点（2.1g）が出土している。

【58号土坑】（図８・９、図版16）

Ｃ－８区に位置する円形の土坑である。壁は垂直気味に立ち上がる。深さはで16cmである。

【59号土坑】（図17、図版17）

Ⅰ・Ｊ－２区に位置し、不整形を呈し、残存長1.98m、残存幅1.00mの大型の土坑である。壁はややオーバーハングする箇所もある。底面は緩やかな凹凸がある。深さは38cmであり、埋土は３層に分かれる。埋土は57号土坑と類似し、黒色粘土を斑状に含む。遺物は、土師器97点（322.9g）、種別不明土器10点（54.7g）が出土しており、今回の調査区の中では最も遺物が出土している。P10（図版24）は２層中から出土している。

【60号土坑】（図８・９、図版17）

Ｃ・Ｄ－７・８区に位置し、東側以外撹乱によって破壊されている土坑である。その規模は、長さ126cm、幅90cmと大きい。底面には大きな凹凸があり、最も深い場所で30cmとなる。埋土は５層に分かれる。そのうち最上部の１層には、黒色と灰色の粘土が含まれる。

【61号土坑】（図８・９、図版17）

Ｄ－７・８区に位置し、西側以外は撹乱によって破壊されている。西側には60号土坑がある。規模は、残存長1.20m、残存幅1.06mと大きい。底面は緩やかに凹凸しており、壁は緩やかに立ち上がる。深さは18cmであり、埋土は１層のみである。

【62号土坑】（図11・12、図版17）

Ｄ－10区に位置し、西側以外は撹乱により破壊されている。深さは12cmと浅く、底面は平らである。

【63号土坑】（図11・12、図版18）

Ｃ－10区に位置し、北側と東側は撹乱によって破壊されており、ほとんどが残っていない小さな土坑である。その深さは12cmである。埋土１層のみで、黒色あるいは灰色粘土を斑状に含んでいる。

【64号土坑】（図11・12、図版18）

Ｄ－９区に位置する小型の円形の土坑である。底面にはゆるやかな凹凸があり、深さは8cmである。

【65号土坑】（図８・10、図版18）

Ｃ－７区に位置し、南側以外を撹乱によって破壊された土坑である。底面には凹凸があり、深さは6cmと浅い。

【66号土坑】（図11・12、図版18）

Ｅ－９区に位置し、北側を撹乱により大きく破壊されている。深さは8cmと浅い。床面は緩やかに凹凸する。

【67号土坑】（図８・10、図版19）

Ｄ－７区に位置し、東・南側を撹乱により破壊されている。壁は緩やかに立ち上がり、底面にはゆるやかな凹凸がある。深さは16cmあり、埋土１層のみである。

【68号土坑】（図８・10・18、図版19）

Ｃ・Ｄ－７区に位置し、東側以外撹乱に破壊されているものの、残存長1.42m、残存幅1.04mの大きな土坑である。西側が大きく窪み、深さは36cmである。埋土は４層に分かれる。そのうち１層には、黒色と灰色の粘土が斑状に混ざる。底部近くから、縄文土器２点（71.4g）（図19・図版24－P9）が出土している。

【69号土坑】（図８・10、図版19）

Ｃ・Ｄ－６区に位置し、東・南側は撹乱により破壊され、北側は調査区外に伸びる土坑である。壁は部分的にオーバーハングしている。最大の深さは24cmであり、埋土は２層に分かれる。埋土上層の１層には、黒色と灰色の粘土が斑状に混じっている。

【70号土坑】（図11・12、図版19・20）

Ｃ・Ｄ－10区に位置する楕円形の小型の土坑である。床面は緩やかに凹凸し、壁は緩やかに立ち上がる。深さは10cm程で、埋土は１層のみである。

【71号土坑】（図11・12、図版20）

Ｃ－10区に位置する不整形の土坑である。底面は著しく凹凸しており、深さは16cmである。埋土は２層に分かれ、上層には黒色と灰色粘土を多く含む。

【72号土坑】（図11・12、図版20）

Ｃ－10区に位置する楕円形と考えられる土坑である。床面はやや凹凸しており、深さは24cmである。埋土には黒色粘土が部分的に入る。

【73号土坑】（図11・12、図版20）

Ｃ－９区に位置し、円形と推定されるが、北・西側は撹乱により破壊されている。壁はオーバーハングしている。底面は平らである。深さは10cmであり、埋土は１層のみである。

【74号土坑】（図11・12、図版20・21）

Ｃ・Ｄ－９区に位置し、円形と推定されるが、北と東側は撹乱により破壊されている。壁は緩やかに立ち上がり、底面は緩やかに凹凸する。深さは10cmであり、埋土は１層のみである。

【75号土坑】（図８・10、図版21）

Ｃ－７・８区に位置し、南側以外は撹乱により破壊される。底面は緩やかに凹凸する。深さは14cmである。

【76号土坑】（図８・10、図版21）

Ｂ－８区に位置するほぼ円形の小型の土坑である。壁南側はオーバーハングする。底部は平らである。底面には、夾雑物を含まない粘土層が認められる。この粘土層は、基本層の４層に対応する可能性が高い。深さは40cmであり、埋土は２層に分かれる。埋土下層の２層は、４層由来の粘土を含む層である。

【77号土坑】（図８・10、図版21）

Ｂ－８区に位置し、東側が撹乱によって破壊されたほぼ方形の土坑である。底面は皿状に窪み、壁は緩やかに立ち上がる。深さは6cmと浅く、埋土は１層のみである。

【78号土坑】（図８・10、図版21・22）

Ｂ－９区に位置するほぼ楕円形の小型の土坑である。底面は緩やかに凹凸し、壁は緩やかに立ち上がる。深さは8cmと浅く、埋土は１層のみである。埋土には、黒色と灰色粘土が層状に入る。

【79号土坑】（図８・10、図版22）

Ｂ・Ｃ－６・７区に位置し、不整形に広がる土坑である。その規模は、残存長2.92m、残存幅1.90m程と大きい。底面には著しく凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。深さは14cmではあるが、埋土は５層に細分できる。その内、埋土上層の１・２層は黒色と灰色粘土を斑状に多量に含む。80号土坑とは、埋土の特徴等が一致することから、一連の遺構と考えられる。

【80号土坑】（図８・10、図版22）

Ａ・Ｂ－６・７区に位置し、不整形に広がる土坑である。79号土坑の西側に位置する。その規模は、残存長2.28m、残存幅1.88mであり、79号土坑と同様に大きい。底面は凹凸し、壁は緩やかに立ち上がる。深さは20cmであるが、埋土は４層に細分できる。そのうち上層の１・２層には黒色と灰色の粘土を多く斑状に含んでいる。79号土坑とは、埋土の特徴等が一致することから、一連の遺構と考えられる。

【81号土坑】（図17・18、図版22）

Ｉ－３区に位置する小型円形の土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや凹凸がある。深さは14cmであり、埋土は１層のみである。その埋土には、黒色と灰色粘土が斑状に含まれる。

【82号土坑】（図17・18、図版22・23）

Ｉ－２・３区に位置する小型円形の土坑である。壁はやや垂直に立ち上がり、底面は平らである。深さは24cmである。埋土は１層のみであり、黒色と灰色粘土が斑状に含まれる。

【83号土坑】（図17・18、図版23）

Ｉ－３・４区に位置し、不整形を呈し、長さ1.74m、幅1.28mとなる規模の大きな土坑である。底面は緩やかに凹凸し、壁はおおむね垂直に立ち上がるが、オーバーハングする場所もある。深さは18cmで、埋土は２層に分かれる。埋土上層の１層には黒色と灰色の粘土を斑状に含む。土師器３点（8g）が出土しているが、図化等はできなかった。

【84号土坑】（図17・18、図版23）

Ｉ－５区に位置し、そのほとんどが撹乱により破壊される土坑である。壁は底面付近で奥に入り込み、オーバーハング状となる。深さは34cmで、埋土は４層に細分できる。そのうち３層は、灰色粘土が主体となる。

【85号土坑】（図17・18、図版23）

Ｊ－２・３区に位置し、北側は撹乱により破壊されている。底面は緩やかに凹凸し、壁は不整形に抉られる。深さは38cmで、埋土は３層に分かれる。埋土最下層の３層には、黒色と灰色粘土を斑状に多く含む。種別不明の土器片１点（0.4g）が出土しているが、図化等はできなかった。

【86号土坑】（図17・18、図版23）

Ｉ－３区に位置し、小型円形の土坑である。底面から北側に向かって掘り込まれ、底部が一段下がる。そのほかの壁は垂直に立ち上がる。深さは32cmで、埋土は２層に分かれる。

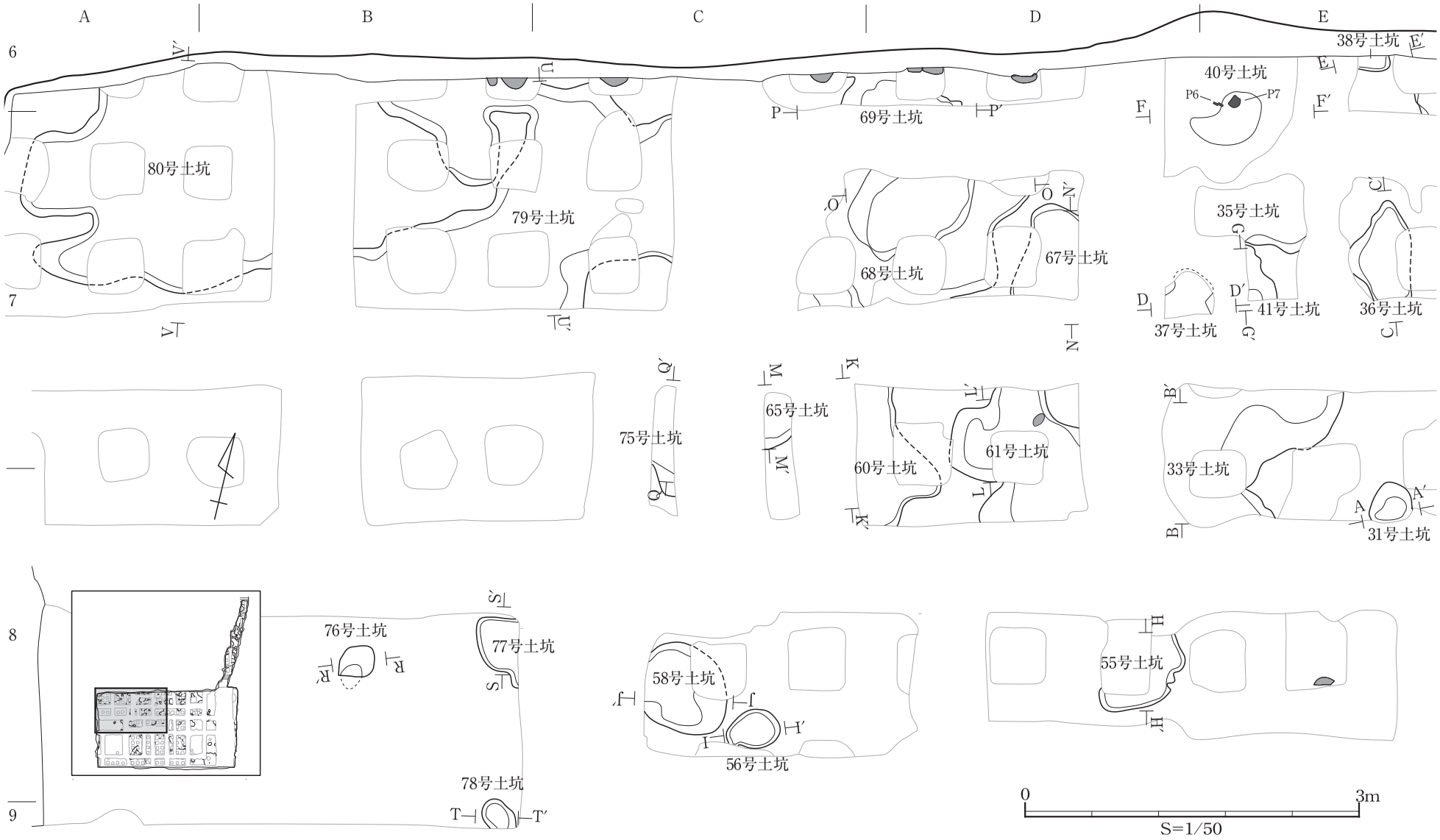
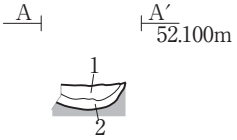


図８　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（1）
Fig. 8　Features at TM7 (1)

31号土坑



1　10YR6/8明黄褐色　粘土　粘性強･しまり強
褐炭色と黒褐色土ブロックを含む　白色岩片を僅かに含む
2　10YR7/3にぶい黄橙色　粘土　粘性強･しまり中　黄橙土粒と赤色土粒を斑状に含む
白色岩片を僅かに含む

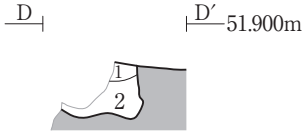
33号土坑

1　7.5YR5/2灰褐色　粘土質シルト　粘性中･しまり強
上部には黒褐色粘土を主体とし、灰褐色土をブロック状に含む　埋土下部は黒褐色土、浅黄色粘土ブロックを斑状に含む　白色岩片を極僅かに含む
2　2.5Y7/3浅黄色　粘土　粘性強･しまり強　灰褐色土小ブロックを極僅かに含む

36号土坑

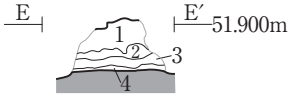
1　7.5YR6/2灰褐色　粘土　粘性強･しまり強
灰黄褐色粘土と黄褐色粘土をブロック状に僅かに含む　埋土上層に灰と黒褐色粘土をブロック状に含む
2　2.5Y7/3浅黄色　粘土　粘性強・しまり中
灰黄褐色土を僅かに含む　黄褐色土を全体に多く含む　白色岩片を全体に含む

37号土坑



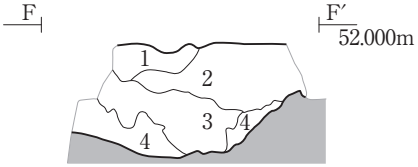
1　7.5YR5/2灰褐色　粘土　粘性強･しまり強
黒褐色土、黄褐色土をブロック状に僅かに含む
2　2.5Y5/3黄褐色　粘土　粘性強･しまり強
にぶい黄橙々を僅かに含む　白色岩片を僅かに含む　鉄分を多く含む

38号土坑



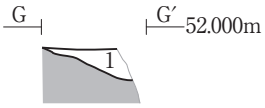
1　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強主体
明黄褐色粘土を極少量斑に含む　径0.5cm程の炭化物を極僅かに含む
2　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強主体
にぶい黄橙色粘土と黄褐色粘土を僅かに斑に含み、層全体に炭化物を多く含む
3　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強主体
浅黄色粘土と明褐色粘土を径2cm程のブロックで含み、径0.5cm程の炭化物を極僅かに含む
4　2.5Y7/3浅黄色　砂　粘性弱･しまり強主体　橙色砂質シルトを極僅かに含む

40号土坑



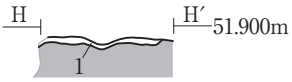
1　7.5YR3/2黒褐色　粘土　粘性強･しまり強　炭化物を含む 一部に黄褐色土小ブロックを含む　白色土粒を含む
2　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性中-強･しまり強　炭化物を僅かに含む　黄褐色土をブロック状に含み下部ではやや多くなる
3　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　炭化物を僅かに含む　黒褐色土と黄褐色土、にぶい黄橙色土を斑状に含む
4　2.5Y6/2灰黄色　粘土　粘性強･しまり強　黒褐色土を僅かに含む　黄褐色土を多く含む

41号土坑



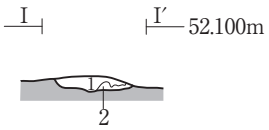
注記なし

55号土坑



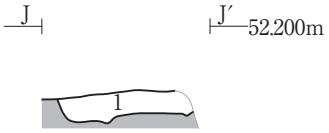
1　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強主体
橙色粘土を少量斑に含む　黒色土、白色土粒を僅かに含む

56号土坑



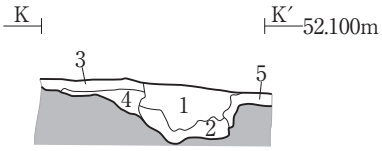
1　10YR7/1灰白色　粘土　粘性強･しまり強
黄褐色粘土、明黄褐色粘土を少量斑に含む
2　10YR8/4浅黄橙色　粘土　粘性強･しまり強
明橙色粘土のブロックを斑に少量含む

58号土坑



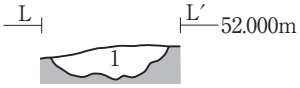
1　7.5YR6/8 橙色　粘土　粘性強･しまり強
灰褐色土ブロック、黒褐色土ブロックを含む　白色土粒を含む

60号土坑



1　10YR2/2黒褐色　粘土　粘性強･しまり強　径2-3mmの炭化物を僅かに含む　褐炭色粘土小ブロックを全体に含む
2　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　明黄褐色粘土小ブロックを全体に斑状に含む　白色土粒を僅かに含む
3　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強を主体とし、黒褐色土、にぶい黄橙土、明黄褐色の小ブロックを斑状に含む
4　10YR6/6明黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　にぶい黄色土、灰褐色土小ブロックを僅かに含む　白色土粒を僅かに含む
5　2.5YR6/4にぶい黄色　砂質シルト　粘性中･しまり強　白色土粒を含む　黄褐色土小ブロックを僅かに含む

61号土坑



1　10YR6/2灰黄褐色　粘土質シルト 粘性やや強･しまり強　明黄褐色粘土と、灰黄褐色粘土を少量斑に含む　所々に砂を含む

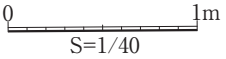
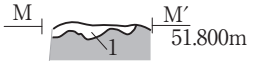


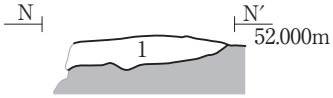
図９　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（2）
Fig. 9　Features at TM7 (2)

65号土坑



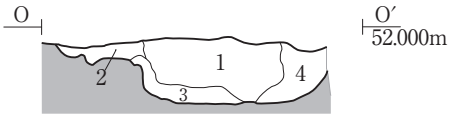
1　2.5Y6/2灰黄色　粘土　粘性強･しまり強　明黄褐色粘土を少量斑に含み、黒色土粒、白色土粒を僅かに含む

67号土坑



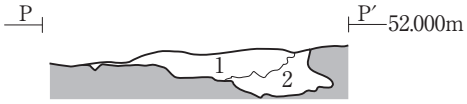
1　10YR6/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強･しまり強　明褐色粘土と灰黄褐色粘土を少量斑に含む

68号土坑



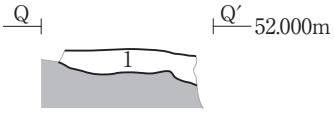
1　10YR5/3 にぶい黄褐色　シルト質粘土　粘性中･しまり強　褐灰色粘土と黄褐色粘土のブロックを全体的に含む　部分的に黒褐色シルトを多く含む
2　10YR6/3 にぶい黄橙色　粘土　粘性強･しまり強　橙色粘土を全体的に少量斑に含む
3　2.5Y7/3 浅黄色　粘土　粘性強･しまりやや強　橙色粘土を少量斑に含み、灰白色粘土をブロック状に極少量含む
4　10YR7/2 にぶい黄橙色　粘土　粘性強･しまりやや強　橙色粘土を全体に斑に含む　炭化物を極僅かに含む

69号土坑



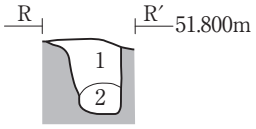
1　10YR3/2 黒褐色　シルト質粘土　粘性中･しまり強　灰黄褐色シルト質粘土と橙色シルト質粘土のブロックを少量含む　黒色土粒、白色土粒を僅かに含む
2　2.5Y7/2 灰黄色　シルト質粘土　粘性強･しまり強　橙色シルト質粘土、浅黄橙色シルトを少量斑に含む　白色土粒、黒色土粒を僅かに含む

75号土坑



1　10YR7/2にぶい黄橙色　シルト質粘土　粘性やや強･しまり強　灰黄褐色シルト質粘土と明黄褐色シルト質粘土を少量斑に含む　白色土粒と黒色土粒が、極僅かに混入する

76号土坑

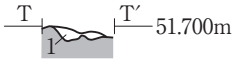


1　2.5Y6/3にぶい黄色　粘土　粘性強･しまりやや弱　浅黄色粘土と灰黄褐色粘土を少量斑に含む　粒状の炭化物を僅かに含む
2　5Y6/2灰オリーブ色　粘土　粘性強･しまり弱　明オリーブ灰色粘土を少量斑に含む

77号土坑

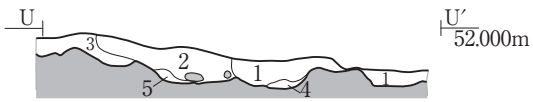
1　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性中･しまり強　浅黄色粘土と、暗灰黄色シルト質粘土をブロック状に少量含む　白色土粒、黒色土粒が僅かに混じる

78号土坑



1　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性やや強･しまり強　灰黄褐色粘土質シルトを少量斑に含み、にぶい黄色粘土を径1cm程のブロックで僅かに含む　白色土粒と粒状の炭化物を極僅かに含む

79号土坑



1　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト質粘土　粘性やや強･しまり強　橙色粘土と黒褐色シルトをブロック状に少量含む
2　10YR4/2灰黄褐色　シルト質粘土　粘性やや強･しまり強　黒褐色シルトと黄褐色粘土のブロックを斑に少量含む
3　10YR6/2灰黄褐色　シルト質粘土　粘性やや強･しまり強　黄褐色粘土を少量斑に含む　白色土粒と黒色土粒を僅かに含む
4　2.5Y7/4浅黄色　粘土　粘性強･しまり強　橙色粘土を少量斑に含み、黒色土粒を僅かに含む
5　2.5Y7/2灰黄色　粘土　粘性強･しまり強　にぶい黄色粘土と黒色土を極僅かに斑に含む

80号土坑

1　10YR4/2 灰黄褐色　粘土　粘性やや強･しまり強　灰黄褐色粘土と黄褐色粘土が混じった径 30cm 程のブロックを全体に含み、黒色土粒を僅かに含む
2　10YR6/8 明黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　灰黄褐色シルト質粘土を少量斑に含む
3　2.5Y7/3 浅黄色　粘土　粘性強･しまりやや強　橙色土と黒色土を僅かに含む
4　2.5Y7/4 浅黄色　粘土　粘性強･しまり中　灰黄色粘土を僅かに斑に含む

0　1m
S=1/40

図10　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（3）
Fig. 10　Features at TM7 (3)

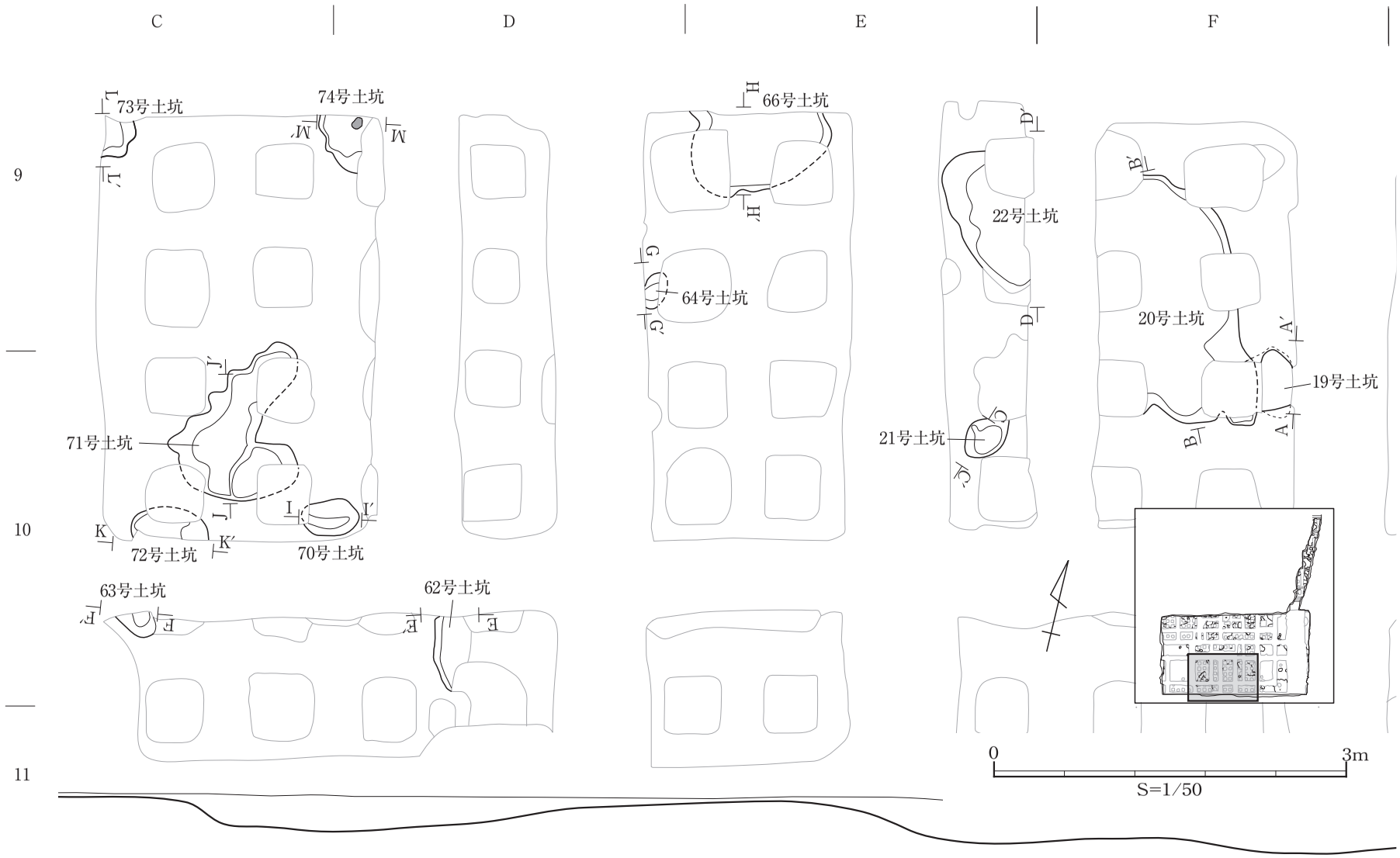
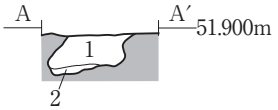


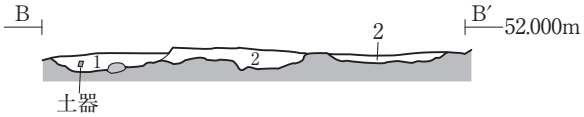
図11　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（4）
Fig. 11　Features at TM7 (4)

19号土坑



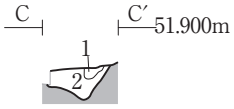
1　2.5Y4/2暗灰黄色　シルト　粘性中･しまり強　黒色土を層状に含む　白色土粒を含む　黄褐色土を極僅かに含む
2　2.5Y5/2暗灰黄色　粘土　粘性中～強・しまり中　白色土粒を含む

20号土坑



1　7.5YR4/1褐灰色　シルト　粘性弱･しまり強　浅黄色土ブロック、黄褐色土ブロックを斑状に含む　径2-3mmの炭化物を僅かに含む
2　2.5YR6/3にぶい黄色　粘土　粘性強･しまり強　黄褐色粘土ブロックを斑状に含む　にぶい黄褐色粘土を極僅かに含む

21号土坑

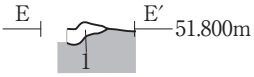


1　7.5YR2/1黒色　粘土　粘性強･しまり強
2　2.5Y6/3にぶい黄色　粘土　粘性強･しまり強　赤色土粒･白色土粒を僅かに含む　灰白色粘土を層状に含む

22号土坑

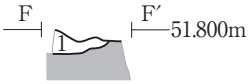
1　10YR6/1褐灰色　粘土　粘性強･しまり強　明黄褐色粘土ブロックを斑に含む　黄褐色土粒を含む　白色土粒を含む
2　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　白色土粒を含む　一部に木を含む　灰を含む

62号土坑



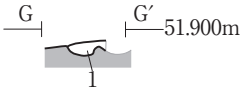
1　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　明黄褐色粘土を径2cm程のブロックで少量、径1cm程の黒色土ブロックと白色土粒を僅かに含む

63号土坑



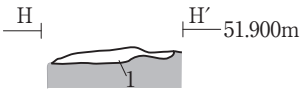
1　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　にぶい黄橙色粘土のブロックを少量含む　部分的ににぶい黄橙色砂を含む

64号土坑



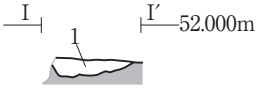
1　10YR7/2にぶい黄橙色　粘土　粘性強･しまり強　橙色粘土を径1cm程のブロックで含み、白色土粒を僅かに含む

66号土坑



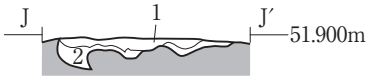
1　7.5YR6/1褐灰色　粘土　粘性強･しまり中　にぶい黄土ブロック、黄灰色土小ブロックを全体に含む　黄褐色土粒を多く含む

70号土坑



1　10YR7/2にぶい黄橙色　粘土　粘性やや強･しまり強　にぶい黄橙色粘土ブロック、黒褐色シルト質粘土を極少量斑に含む

71号土坑

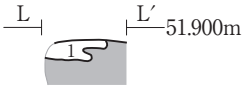


1　10YR6/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性中･しまり強　黒褐色粘土を少量斑に含む
2　2.5YR6/4にぶい黄色　粘土　粘性強･しまりやや弱　明赤褐色粘土と灰黄褐色シルト質粘土を僅かに斑に含む

72号土坑

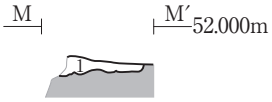
1　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　灰黄褐色粘土と明褐色シルト質粘土を少量斑に含み、白色土粒を僅かに含む

73号土坑



1　2.5Y5/2暗灰黄色　シルト質粘土　粘性やや強･しまり強　暗黄褐シルト質粘土を少量、橙色粘土質シルトを僅かに含む　黒色土粒、白色土粒を僅かに含む

74号土坑



1　2.5Y7/4浅黄色　粘土　粘性強･しまり強　灰黄色粘土をブロック状に含み、橙色シルト、灰黄褐色粘土を僅かに斑に含む　黒色土粒が疎らに見られる

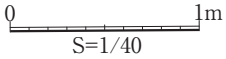


図12　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（5）
Fig. 12　Features at TM7 (5)

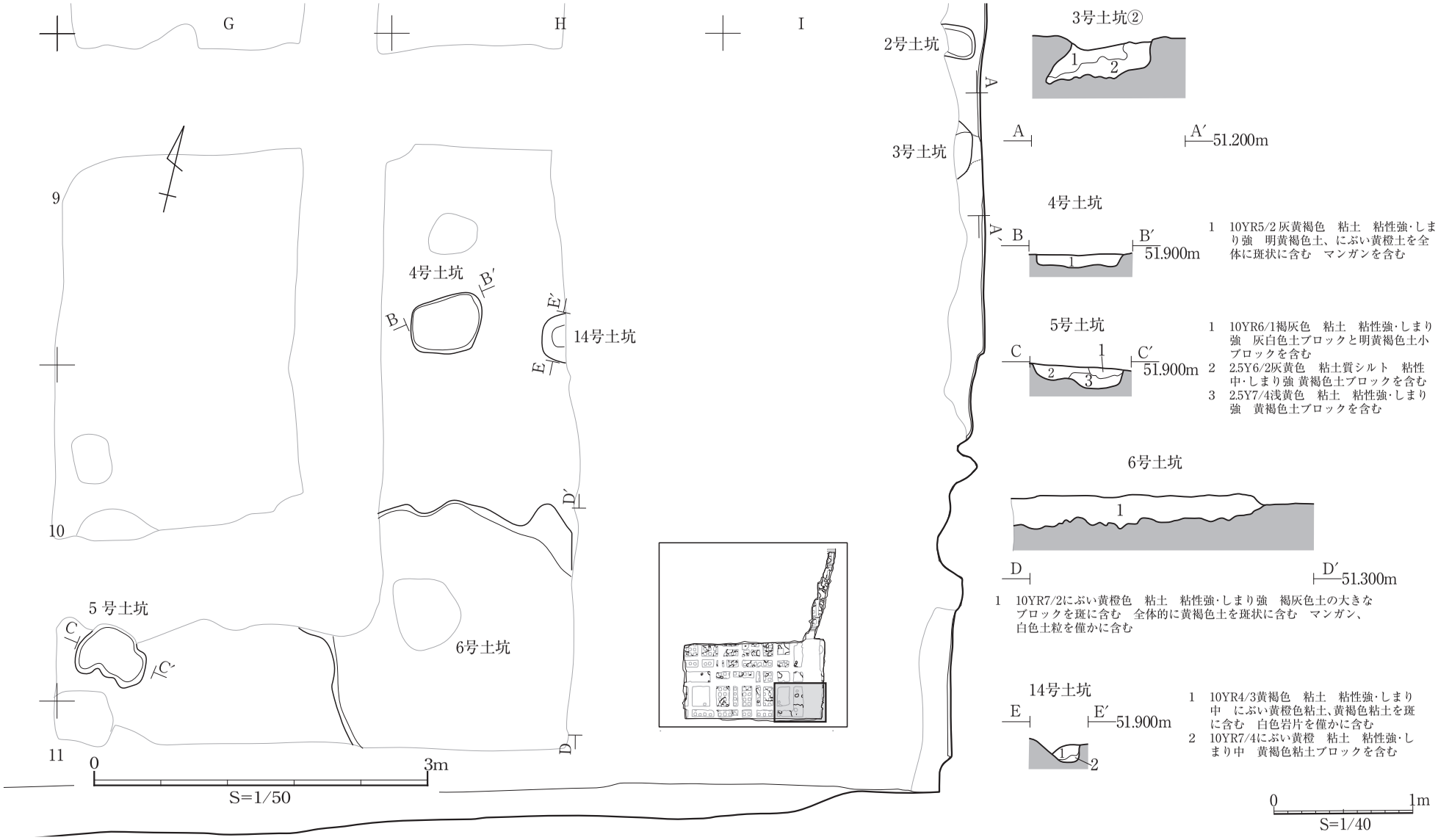


図13 芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（6）
Fig. 13 Features at TM7 (6)

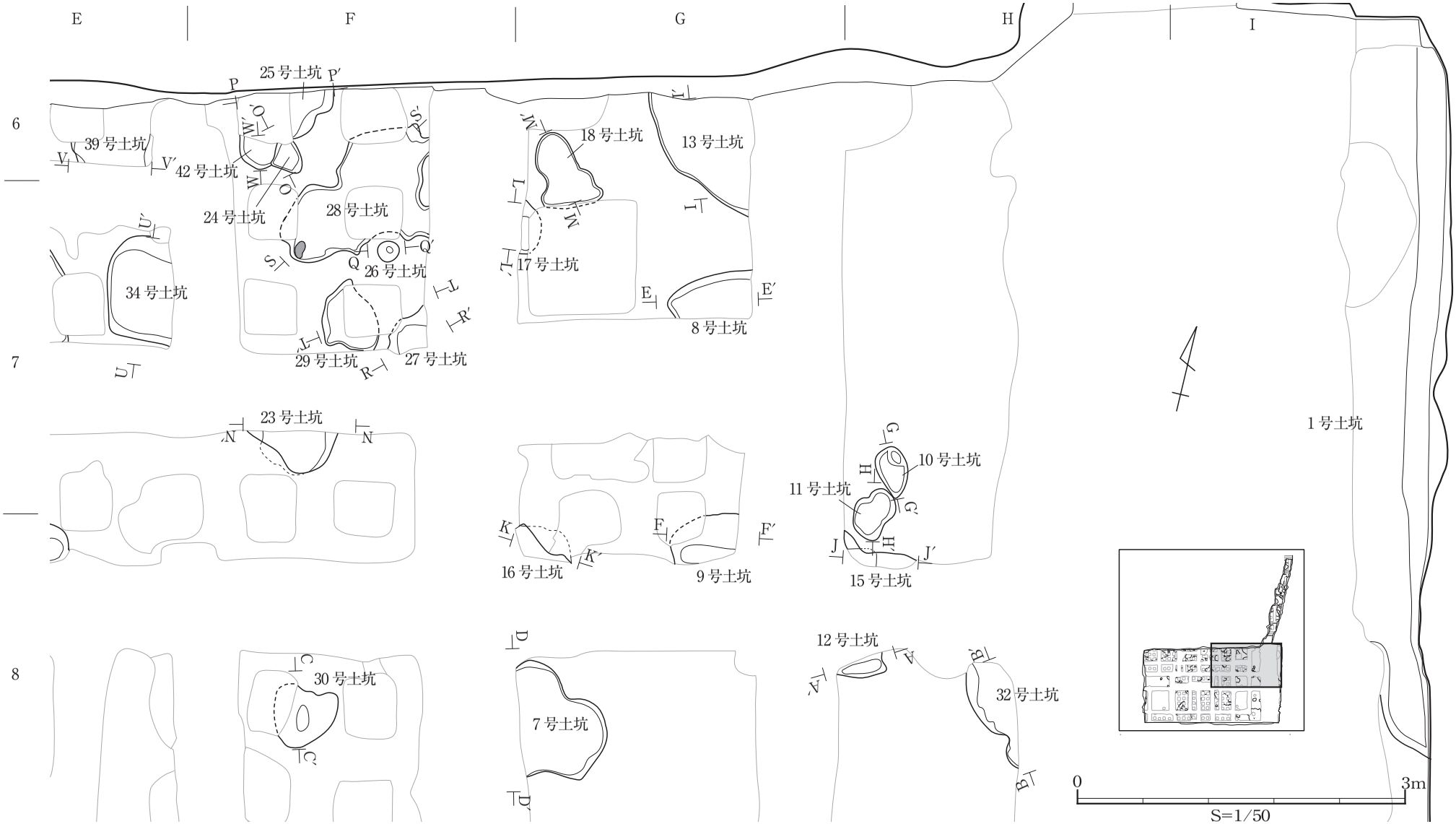
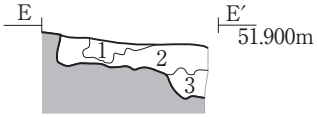


図14　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（7）
Fig. 14　Features at TM7 (7)

7号土坑

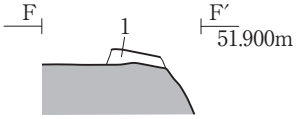
1　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　黒褐色土を大きなブロックで含む　明黄褐色土を全体に斑状に含む 白色岩片を僅かに含む

8号土坑



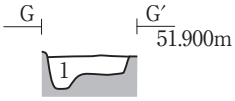
1　7.5YR4/1褐灰色　粘土　粘性強･しまり強　にぶい黄橙粘土と黄褐色粘土を斑状に含む　炭化物と白色土粒を含む
2　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　明黄褐色粘土を斑状に含む　炭化物を僅かに含む
3　10YR5/2灰黄褐色　砂を含む粘土質シルト　粘性強･しまり中　灰黄色粘土小ブロックを含む　黄褐色土を僅かに含む　炭化物、白色土粒を含む

9号土坑



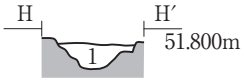
1　2.5Y6/3にぶい黄色　砂質シルト　粘性中･しまり強　黄褐色土小ブロックを含む　白色土粒を含む

10号土坑



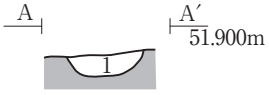
1　2.5Y5/2暗灰黄色　粘土　粘性強･しまり強　黒褐色土ブロックを含む　炭化物と白色岩片を僅かに含む

11号土坑



1　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　褐灰色粘土、にぶい黄橙々土を斑に含む　明黄褐色土を斑に含む　白色土粒マンガンを含む

12号土坑

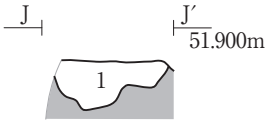


1　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり中　黄褐色粘土ブロック、暗褐色粘土ブロックを斑状に含む　マンガンを僅かに含む

13号土坑

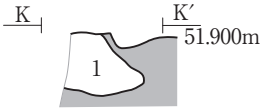
1　7.5YR5/2灰褐色　粘土質シルト　粘性中･しまり強　黄褐色土ブロックを含む

15号土坑



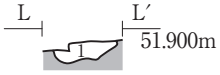
1　10YR5/1褐灰色　粘土　粘性強･しまり強　黄褐色粘土ブロックを多く含む　白色岩片を僅かに含む

16号土坑



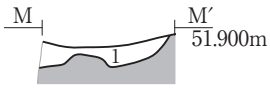
1　10YR5/3にぶい黄褐色　粘土　粘性強･しまり強 黄褐色粘土を斑に含む　白色土粒･マンガンを含む　灰黄褐色粘土を一部に層状に含む

17号土坑



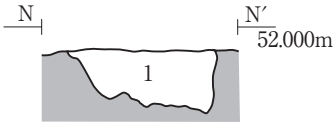
1　5YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性中･しまり強　黄褐色土を斑に含む　炭化物と白色土粒を僅かに含む

18号土坑



1　7.5YR5/1褐灰色　粘土　粘性強･しまり強　黒褐色土ブロックを僅かに含む　黄褐色土を全体に斑状に含む　炭化物･白色土粒を僅かに含む

23号土坑



1　7.5YR3/1黒褐色　粘土　粘性強･しまり中　明褐色、明褐灰色粘土ブロックを斑状に含む　白色土粒と炭化物を僅かに含む

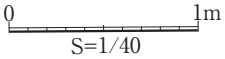
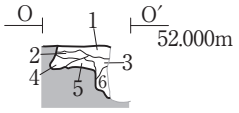


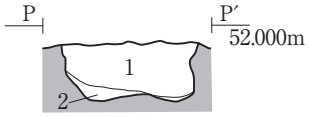
図15　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（8）
Fig. 15　Features at TM7 (8)

24号土坑



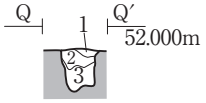
1　7.5YR5/2灰褐色　粘土　粘性強･しまり強　白色土粒･明褐色土粒を含む　灰白色粘土小ブロックを僅かに含む
2　7.5YR6/2灰褐色　シルト　粘性中･しまり強褐色土を層状に含む　明褐色土を斑状に含む
3　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　明黄褐色土を斑状に僅かに含む
4　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性中･しまり強　明褐色土を斑状に僅かに含む
5　2.5Y6/2灰黄色　粘土　粘性強･しまり強　黒褐色小ブロックを極僅かに含む　明褐色土を斑状に含む
6　7.5YR5/2灰褐色　粘土　粘性中･しまり強　明褐色土を斑状に僅かに含む

25号土坑



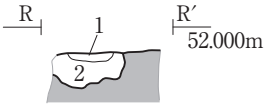
1　7.5YR4/2灰褐色　粘土質シルト　粘性中･しまり強 灰黄褐色粘土ブロック、明黄褐色土ブロックを含む 炭化物･白色土粒を僅かに含む
2　2.5Y7/4浅黄色　粘土　粘性強･しまり強　明黄褐色　粘土を斑状に含む　灰黄褐色土を僅かに含む

26号土坑



1　10YR5/1褐灰色　粘土　粘性強･しまり強　黄褐色粘土ブロックを僅かに含む
2　10YR6/8明黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　灰白色粘土小ブロックを僅かに含む
3　10YR5/8黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　黒褐色粘土小ブロックを僅かに含む

27号土坑

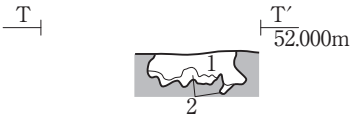


1　7.5YR3/2黒褐色　粘土　粘性強･しまり強　黄褐色土を斑状に含む　炭化物を僅かに含む
2　2.5Y6/3にぶい黄色　粘土　粘性強･しまり強　黄褐色土、黒褐色土を斑状に含む

28号土坑

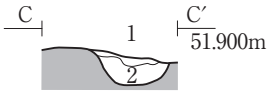
1　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　にぶい黄橙色粘土、黄褐色粘土を斑状に含む　白色土粒を僅かに含む

29号土坑



1　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強･しまり強　炭化物を僅かに含む　灰を含む
2　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　明黄褐色粘土ブロック、黒褐色粘土小ブロックを斑状に含む

30号土坑



1　2.5Y5/2暗灰黄色　粘土　粘性強･しまり強　炭化物を僅かに含む　灰を含む
2　2.5Y6/3にぶい黄色　粘土　粘性強･しまり中 白色土粒･黒色土粒を含む　下部には赤色土粒を含む

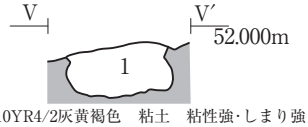
32号土坑

1　2.5Y7/3浅黄色　粘土　粘性強･しまり強　灰黄褐色粘土　にぶい黄橙粘土をブロック状に僅かに含む　明黄褐色粘土小ブロックを斑状に含む　白色岩片を極僅かに含む

34号土坑

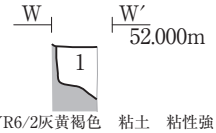
1　2.5Y6/2灰黄色　粘土　粘性強･しまり強　黄褐色粘土小ブロックを全体に斑状に含む　褐灰色土を極僅かに含む　白色土粒を僅かに含む

39号土坑



1　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強を黄褐色土を斑状に含む　炭化物と白色土粒を極僅かに含む

42号土坑



1　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　明黄褐色土を斑状に含む　褐灰色土小ブロックを極僅かに含む

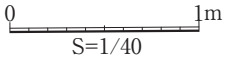


図16　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（9）
Fig. 16　Features at TM7 (9)

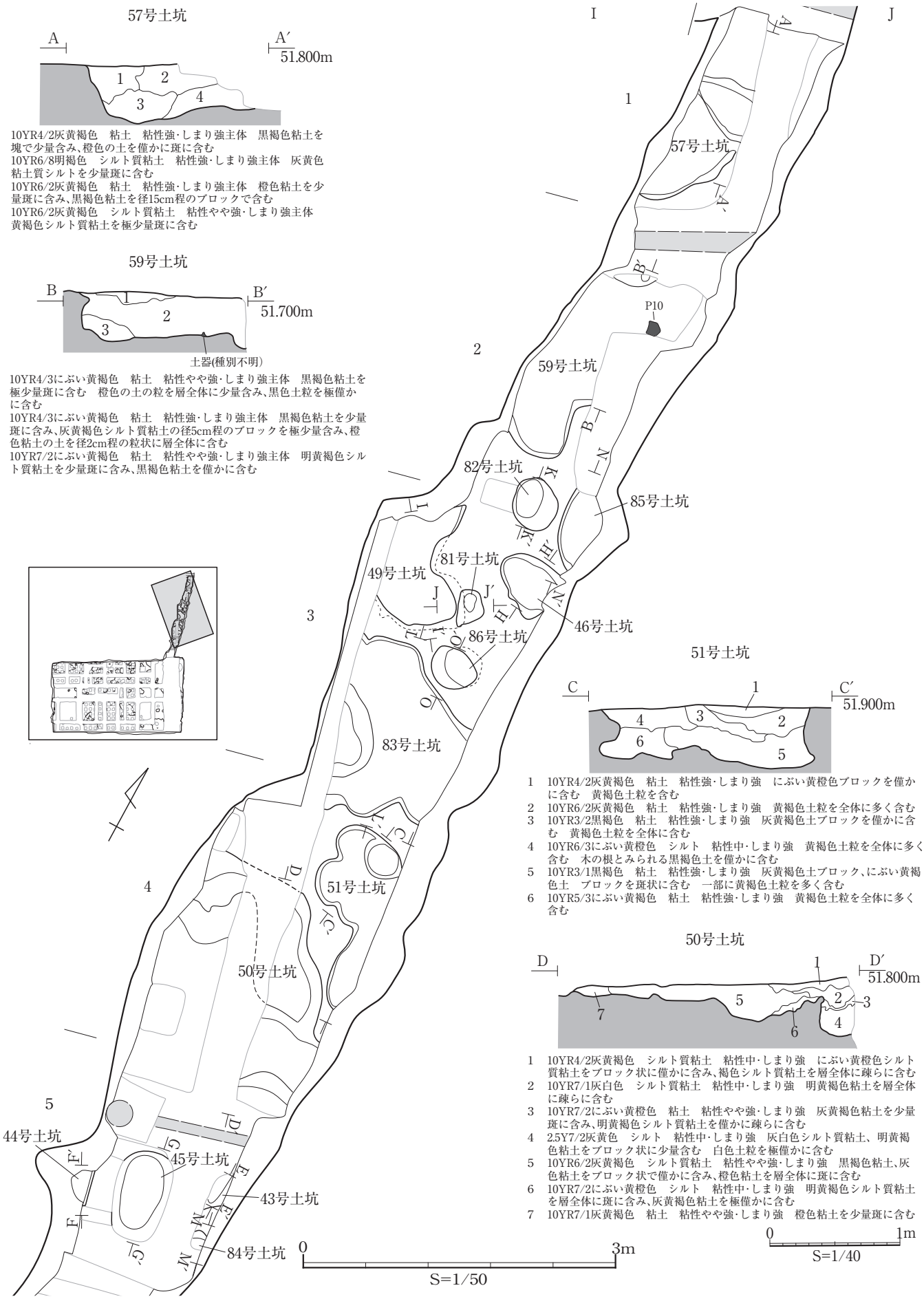
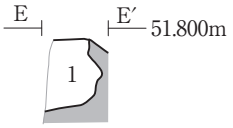


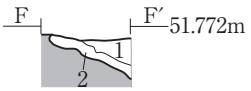
図17　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（10）
Fig. 17　Features at TM7 (10)

43号土坑



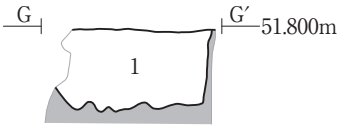
1　7.5YR4/2灰褐色　粘土　粘性強･しまり強　灰黄褐色、明黄褐色、褐灰色土を斑状に含む　炭化物径1mm程度を僅かに含む

44号土坑



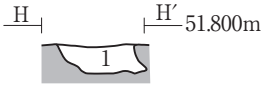
1　10YR6/2灰黄褐色　シルト質粘土　粘性中･しまり強　明黄褐色粘土を少量斑に含む
2　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　灰黄褐色粘土をブロックで僅かに含み、黄褐色粘土を少量斑に含む

45号土坑



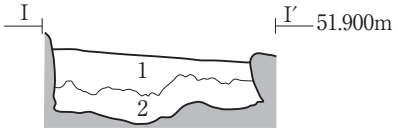
1　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性やや強･しまり強　黄褐色シルト質粘土を少量斑に含み、黒褐色粘土を大きな塊で少量含む　白色土粒を極僅かに含む

46号土坑



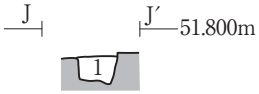
1　10YR6/2灰黄褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり強　灰黄褐色粘土を径3-5cm程のブロックで少量含む　明黄褐色シルト質粘土を少量斑に含む

49号土坑



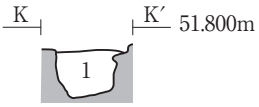
1　7.5YR3/2黒褐色　粘土　粘性強･しまり強　にぶい黄褐色土、灰黄褐色土を大きなブロックで含む　黄褐色土粒を全体に含む　径2-5mmの炭化物を僅かに含む　白色土粒を僅かに含む
2　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　にぶい黄褐色土を比較的大きなブロック状に含む　黄褐色土粒を多く含む　径2-5mmの炭化物、白色土粒を僅かに含む

81号土坑



1　10YR6/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　灰黄褐色粘土と橙色粘土を僅かに斑に含む

82号土坑

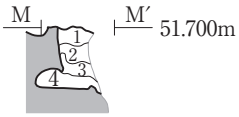


1　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり中　にぶい黄粘土ブロックを全体に斑に含む　暗褐色粘土ブロックを極僅かに含む　径2-5mmの炭化物を僅かに含む　黄褐色土粒を全体に含む

83号土坑

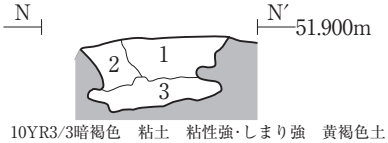
1　10YR6/3にぶい黄橙色　粘土　粘性強･しまり強　にぶい黄橙色粘土、灰黄褐色粘土をブロック状に含み、橙色粘土を少量斑に含む
2　10YR7/2にぶい黄橙色　シルト質粘土　粘性やや強･しまり強　黄褐色シルト質粘土を少量斑に含む

84号土坑



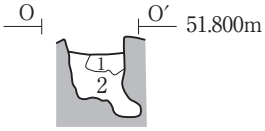
1　10YR6/2灰黄褐色　シルト　粘性やや弱･しまり強　灰黄褐色粘土を径3cm程のブロックで極少量、明黄褐色シルトを僅かに疎らに含む
2　10YR6/2灰黄褐色　シルト　粘性中･しまり強　灰黄褐色粘土と黄褐色粘土を極少量斑に含む
3　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　黒褐色粘土を径5cm程のブロックで僅かに含む
4　10YR7/2にぶい黄橙色　シルト質粘土　粘性やや強･しまり強　明黄褐色粘土を極少量斑に含む

85号土坑



1　10YR3/3暗褐色　粘土　粘性強･しまり強　黄褐色土をブロック状に含む　黄褐色土粒を全体に含む　黒褐色土を僅かに含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土　粘性強･しまり強　黄褐色土粒を全体に多く含む
3　10YR2/2黒褐色　粘土　粘性きわめて強･しまり強　にぶい黄橙色ブロック、黄褐色土粒を含む

86号土坑



1　10YR6/2灰黄褐色　シルト　粘性やや強･しまり強　灰黄褐色粘土と明黄褐色シルト質粘土を少量斑に含む
2　10YR7/2にぶい黄橙色　砂質シルト　粘性やや弱・しまりやや強主体　明褐色粘土を少量斑に含む　層下部に灰黄褐色粘土を多く含む

0　1m
S=1/40

図18　芦ノ口遺跡第７次調査の遺構（11）
Fig. 18　Features at TM7 (11)

３．出土遺物

今回の調査では、細片を含み総計250点（1531.4g）の土器が出土した（表５）。その内訳は推定も含め土師器170点（840.2g）、縄文土器59点（622.9g）、不明土器21点（68.3g）となる。包含層は存在しないため、１層出土の縄文土器１点以外は、土坑内からの出土となる。その他、不明の漆製品が６号土坑から出土している（図版24－WL1）。

これらの遺物の遺存状態は非常に悪く、土壌にほぼ同化しかかった遺物も存在した。そのため、器面は剥落あるいは摩耗した遺物がほとんどである。縄文土器とした遺物は、文様や縄文が確認できたものはなく、その胎土や器形などから縄文土器と判断した。

縄文土器が出土したのは６・33・42・68号土坑の４基である。図示した遺物は、３点であり、33・42・68号土坑からの出土遺物である（図19－P3・P4・P9）。先述の通り、剥落あるいは摩耗のため調整等は確認できない。胎土には砂粒が多く混入しており、その焼成は均質的ではない。残存している器厚・底径から、P3はやや大きめの深鉢、P4・P9は小型の深鉢である可能性がある。図版24で提示した土器（Ｐ2）は、６号土坑からの出土である。器厚や傾き等から判断して、底部付近の部位が想定できる。これらの出土土器は、第４次調査区から出土している縄文時代晩期の土器とは、胎土や器厚等が異なる。詳細な時期は不明であるが、縄文時代前期・中期の土器に類似する。

土師器は、１・40・45・46・57・59・83号土坑の７基から出土している。全体に遺存状態が良くなく、特徴が判り時期の推定が可能なものは、１号土坑出土の坏のみである（図19－P1）。このP1は、丸底で口縁部が緩く外反する坏である。内面の口縁部と体部の境の稜線は、あまり明確ではない。表面の保存状態が良くないため、器面調整は判別し難い部分が多い。口縁部は内外面ヨコナデ。外面は体部・底部ともにナデで、外面の底部にはヘラケズリの痕跡が残る。外面はナデの後に粗いヘラミガキが施されているかのように見える部分もあるが、はっきりしない。内面はナデ後に粗い暗文状のヘラミガキが施される。体部内面には、ヘラナデの工具のあたりと思われる痕跡が認められる。全体の形状、外反する口縁部が短いことなどから、古墳時代中期の引田式期新段階（藤沢敦1992）のものと考えられる。仙台市太白区富沢窯跡（渡邉泰伸ほか1974）、同下ノ内遺跡４号住居（篠原信彦ほか1990）などで類似した資料が認められる。図版のみで提示した遺物は５点である（図版24－P5～P8・P10）。P6の土師器は、比較的薄手（器厚６mm）で、内外面ともにナデが施されている。甕と推定される。P7は、甕あるいは壺と推定され、外面には刷毛目が観察できる。この40号土坑の出土遺物の２点の遺存状態は、比較的良い。P5・P10は甕あるいは甑と推定される厚手の破片である。ナデが施されている以外は不明である。P8は坏かと推定される薄手の土師器であるが、全体的に歪み、剥落あるいは摩耗が著しいため、その詳細は不明である。

表５　芦ノ口遺跡第７次調査出土土器集計表
Tab. 5　Distribution of pottery from TM7

遺構名・層位		種別	重量（g）	点数	重量/点数
１層		縄文土器	20.5	1	20.5
１号土坑	埋土	土師器	286.8	13	22.1
６号土坑	埋土	縄文土器	43.9	8	5.5
20号土坑	埋土	不明	1.8	1	1.8
33号土坑	埋土	縄文土器	67.6	9	7.5
		土師器？	21.5	16	1.3
40号土坑	埋土	土師器	78.3	28	2.8
42号土坑	埋土	縄文土器	346.3	35	9.9
45号土坑	埋土	土師器	30.9	3	10.3
46号土坑	埋土	土師器	7.1	6	1.2
49号土坑	埋土	不明	9.3	7	1.3
57号土坑	埋土	縄文土器	73.2	4	18.3
		土師器	84.7	4	21.2
		不明	2.1	2	1.1
59号土坑	埋土下部	土師器	107.4	15	7.2
	埋土	土師器	215.5	82	2.6
	埋土	不明	54.7	10	5.5
68号土坑	埋土	縄文土器	71.4	2	35.7
83号土坑	埋土	土師器	8	3	2.7
85号土坑	埋土	不明	0.4	1	0.4
合計			1531.4	250	6.1

・「重量（g）」はバインダー含浸後の重量である。
・「点数」は、破片点数である。

表６　芦ノ口遺跡第７次調査出土遺物観察表
Tab. 6　Notes on various implements at TM7

登録番号	出土位置	種類	器種名	観察事項	口径（cm）	底径（cm）	高さ（cm）	器厚（cm）	図	図版
P1	１号土坑埋土	土師器	坏	口縁部は内外面ヨコナデ。外面は体部・底部ともにナデで、外面底部にはヘラケズリの痕跡が残る。内面はナデ後に粗い暗文状のヘラミガキが施される。	15.6	—	5.8	0.5	19	24
P2	6号土坑埋土	縄文土器	不明	全面が摩耗しており、調整等は確認できない。径1－3mm程の砂粒を多く含む。	—	—	—	1.1	—	24
P3	33号土坑埋土	縄文土器	深鉢	内面は剥落している。外面も剥落や摩耗が著しく、縄文・調整等は確認できない。	—	10.0	3.6	0.7	19	24
P4	42号土坑埋土	縄文土器	深鉢	全面が摩耗しており、調整等は確認できない。径1－3mm程の白色の鉱物を多く含む。	—	10.2	9.5	0.7	19	24
P5	57号土坑埋土	土師器	甕または甑	内外面共にナデ。	—	—	—	9.0	—	24
P6	40号土坑埋土	土師器	甕?	内外面共にナデ。	—	—	—	0.6	—	24
P7			甕または壺	外面は刷毛目の後にナデ？、内面はナデ。	—	—	—	1.0	—	24
P8	45号土坑埋土	土師器	坏？	剥落・摩耗のため調整等不明。	—	—	—	0.3	—	24
P9	68号土坑埋土	縄文土器	深鉢	内面は剥落している。外面も剥落や摩耗が著しく、縄文・調整等は確認できない。	—	6.0	6.6	0.7	19	24
P10	59号土坑埋土	土師器	甕または甑	内面ナデ、外面は剥落のため調整不明。	—	—	—	0.9	—	24
WL1	6号土坑埋土	漆製品	不明	皮膜のみ遺存。元の形状等は不明。	横5.2×縦1.5				—	24

・法量は残存部による。

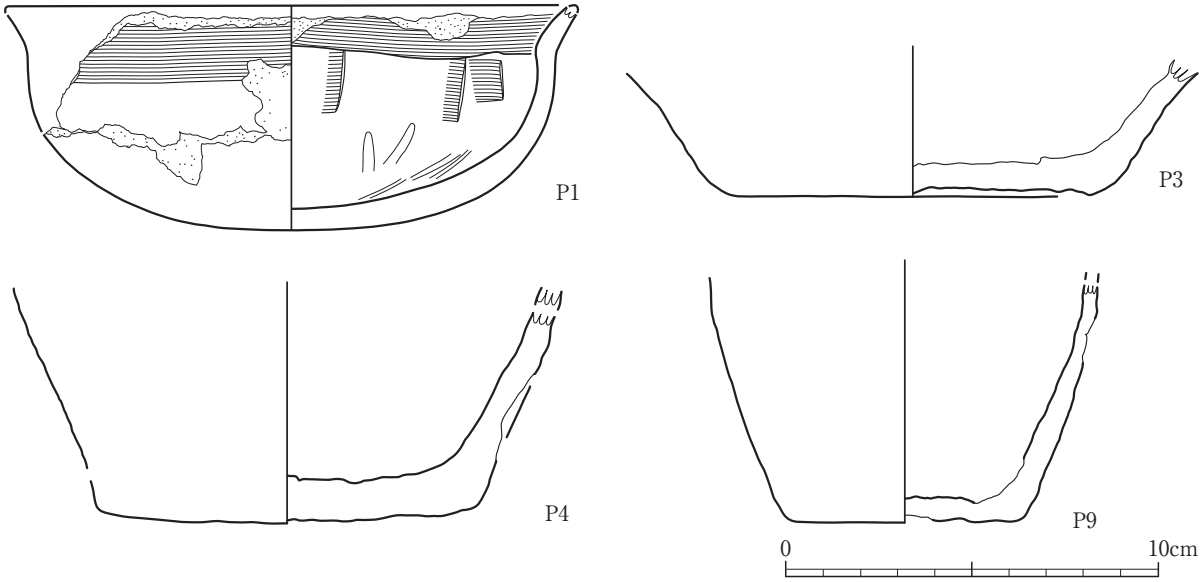


図19　芦ノ口遺跡第７次調査出土土器
Fig. 19　Pottery from TM7

４．まとめ

今回の調査では、泥炭層の分布範囲が以前に推定した範囲（年報14：p.131）よりも更に南側に広がることが確認できた（図20）。ただし、本調査区南側で確認できた泥炭層の層厚は、僅か12cm程度であり、その南端に近いことは明らかである。今回検出した泥炭層は１層のみであり、分層はできない。植物遺体は認められず、分解がかなり進んだ状態を示している。そして、泥炭層の直上層である良質な粘土層由来の粘土が網状に混ざる（カラー図版３）。こうした層の特徴は、本調査区北西側に位置する第３次調査Ｎ２・３区の泥炭層最上層である8a層に類似する。また、さらに北側の第４次調査では、泥炭層は大きく２分され、そのうち最上層の7a層が、第３次調査の8a層に対比されている。これらのことから、本調査区で検出した泥炭層は、これまでに検出されている泥炭層の中でも最も上の層であると判断できる。

今回の調査で検出された遺構は、土坑81基である。今回の調査区は、近現代とくに明治期における陸軍幼年学校の建物基礎により撹乱を受けているため、完全な形で検出された土坑はほとんど無い。撹乱を受けていない土坑は、４・10・11・26・76・81・82・86号土坑の小型の８基のみである。

土坑の規模には、小型のものから大型のものまで各規模が存在する。規模の大きい土坑は、６号土坑（4.17㎡）、１号土坑（4.03㎡）、79号土坑（4.01㎡）、80号土坑（3.21㎡）の４基である（表３・４）。79号土坑、80号土坑の様に本体調査区北西側には、浅く広く不整形に広がる土坑が多い。一方で、１号土坑あるいは59号土坑等の北側には深い土坑が多い。

土坑埋土には、植物遺体由来の黒色あるいは灰色の粘土が多々認められる。これらの土坑の中で、堆積層下部の泥炭層を掘り込んだものは無いことから、当時の地表面が混ざりこんだものと考えられる。22号土坑では、未分解の状態で多少の植物遺体が認められた。また、29・30・36号土坑の埋土上層には、灰が含まれていた。この灰は、火山灰の可能性もあるが、少量であるためサンプル採集等は行なっていない。

出土した縄文土器と土師器のほとんどは、土坑埋土中から出土している。それらの土器は破片であることが多く、その出土状況から混入したものと考えられる。１号土坑出土の完形に近い土師器（図19－P1）は、埋土の中程から出土していることから、埋没途中に廃棄されたものと考えられる。また、42号土坑では底面から縄文土器深鉢の底部付近が、逆さに伏せたような形で出土している（図版14－1）。その隣には同一個体の破片が並んで出土した。この土器の底径と厚さからは、比較的小型の深鉢と考えられる（図19－P4）。土坑埋土にはその他の

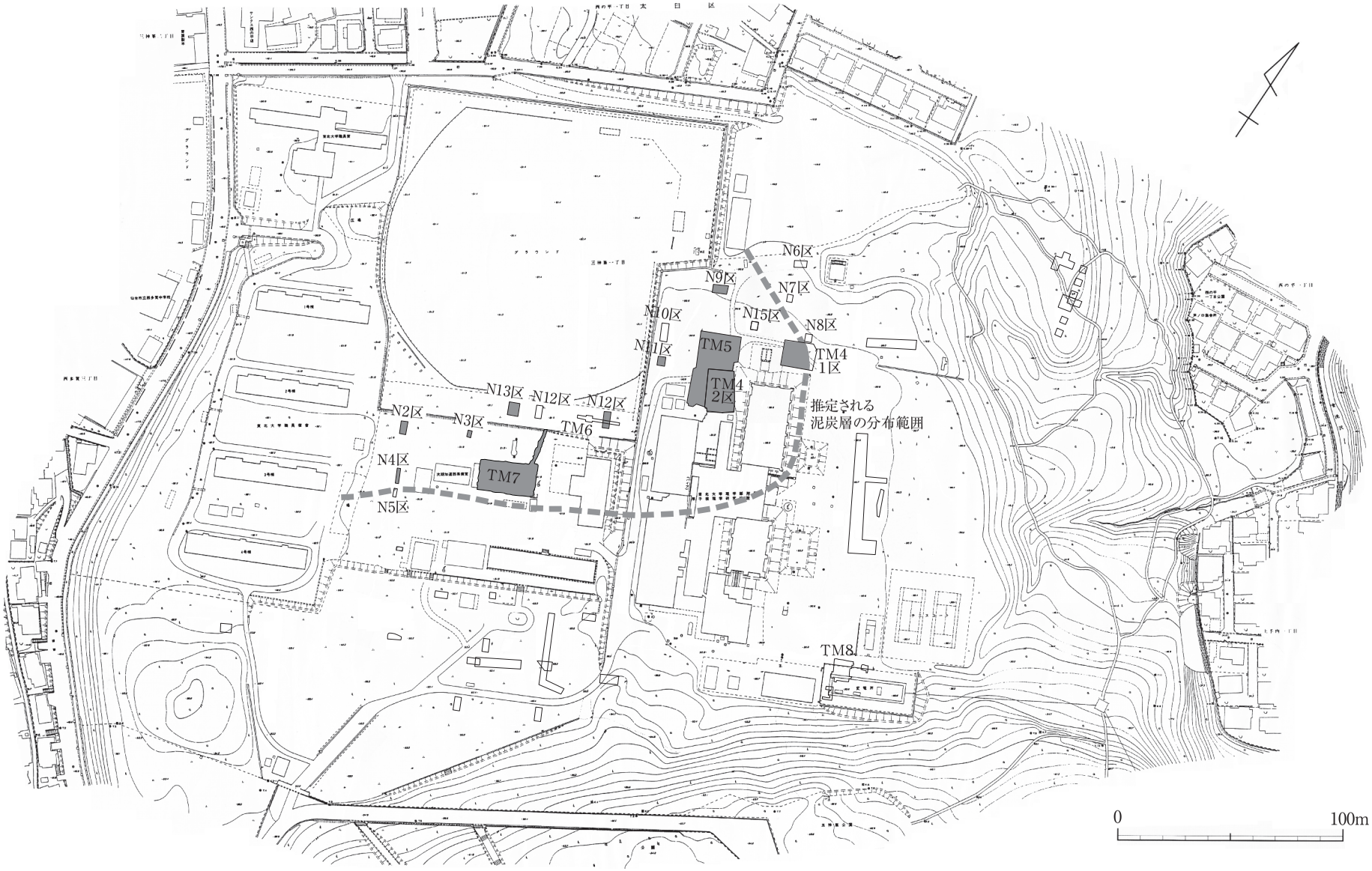
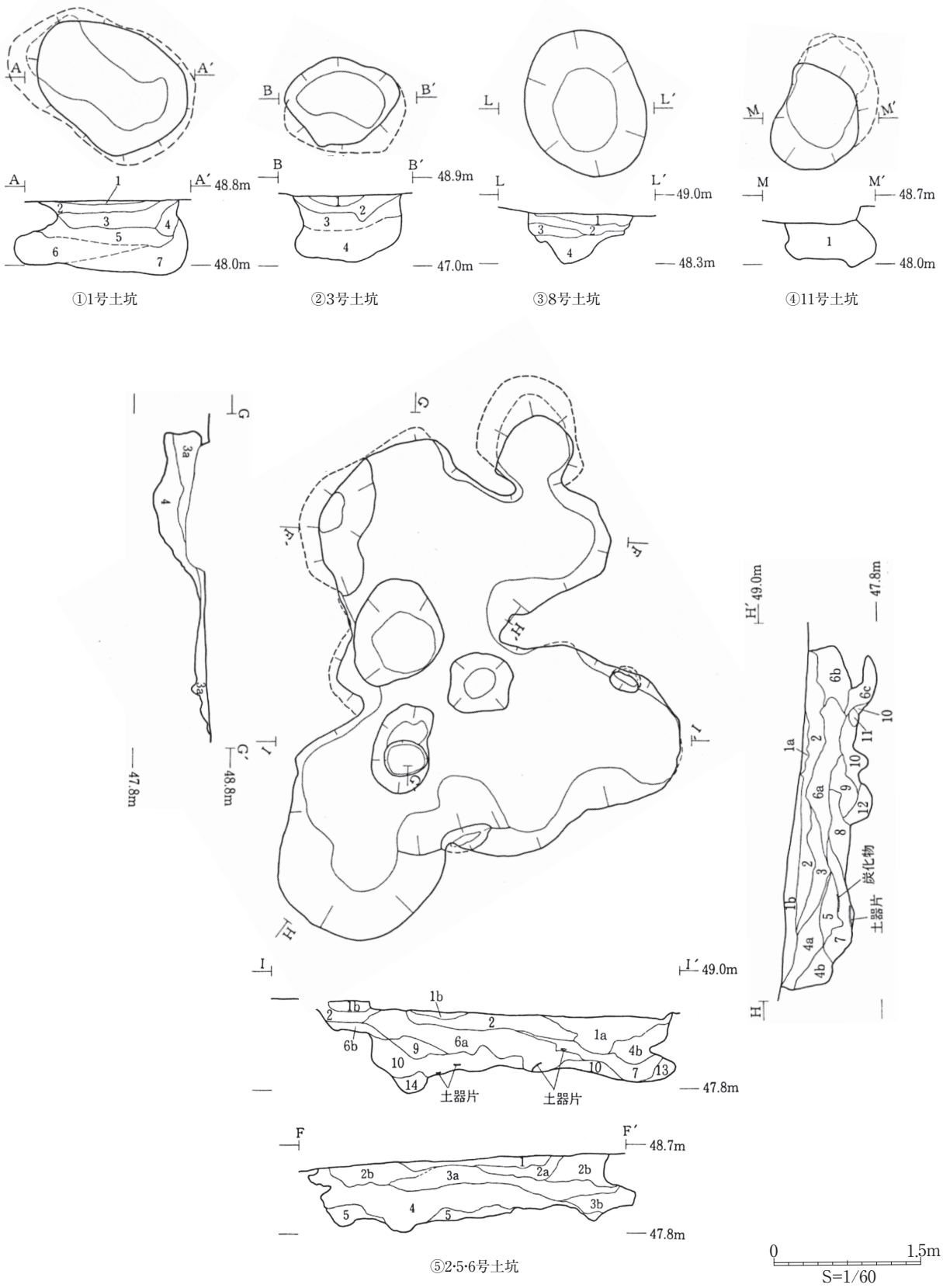


図20　芦ノ口遺跡での泥炭層の分布範囲
Fig. 20　The estimated extent of peat deposits at Ashinokuchi site

第4次調査



①1号土坑　②3号土坑　③8号土坑　④11号土坑

⑤2･5･6号土坑

図21　芦ノ口遺跡の土坑（1）
Fig. 21　Pits at Ashinokuchi site (1)

第4次調査

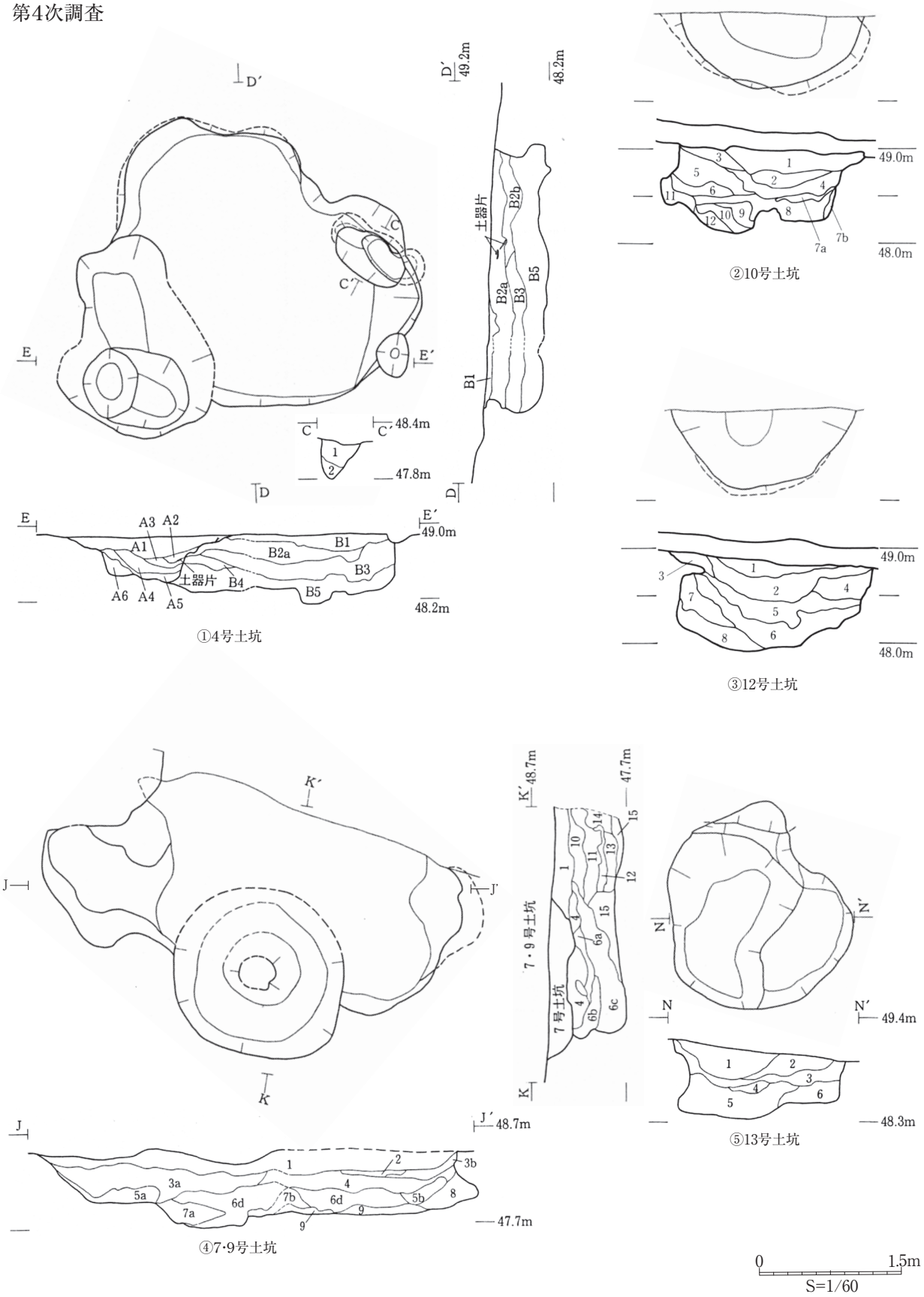
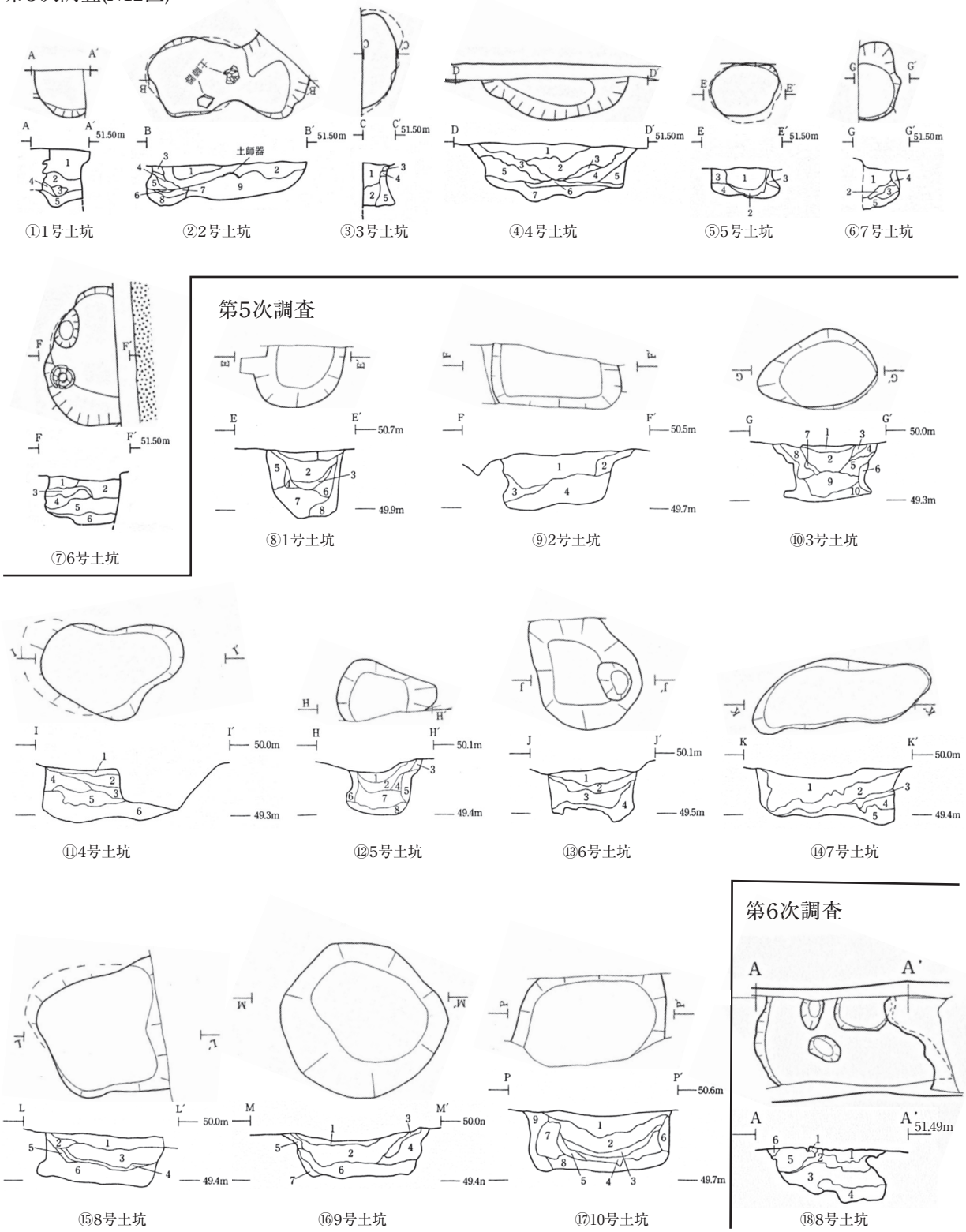


図22　芦ノ口遺跡の土坑（2）
Fig. 22　Pits at Ashinokuchi site (2)

第3次調査(N12区)



①1号土坑 ②2号土坑 ③3号土坑 ④4号土坑 ⑤5号土坑 ⑥7号土坑

⑦6号土坑

⑧1号土坑 ⑨2号土坑 ⑩3号土坑

⑪4号土坑 ⑫5号土坑 ⑬6号土坑 ⑭7号土坑

⑮8号土坑 ⑯9号土坑 ⑰10号土坑 ⑱8号土坑

図23　芦ノ口遺跡の土坑（3）
Fig. 23　Pits at Ashinokuchi site (3)

表７　芦ノ口遺跡検出土坑・ピット一覧表
Tab. 7　List of earthen pit at Ashinokuchi site

地区		遺構名	底面標高(m)	規模 面積(cm²)	規模 長軸×短軸(cm)	出土遺物
TM1	A'区	ピット１	53.96	1196.1	48×30	
		ピット２	54.32	333.2	20×18	
		ピット３	53.99	327.4	24×18	
		ピット４	54.20	(1879.3)	(54)×42	
		ピット５	53.60	2148.8	57×48	
	B区	ピット１	—	1283.1	44×36	
		ピット２	—	721.6	32×28	
		ピット３	—	1050.0	40×(28)	
		ピット４	—	1501.9	44×32	
		ピット５	—	1035.0	36×32	
		ピット６	—	2324.3	60×(44)	
		ピット７	—	3568.1	72×60	土師器・須恵系土器 紡錘車（平安）
		ピット８	—	3297.9	96×(36)	土師器・ 須恵系土器（平安）
		ピット９	—	1575.7	44×36	
		ピット10	—	—	—	
		ピット11	—	—	—	
		ピット12	—	—	—	
		ピット13	—	523.6	28×20	
		ピット14	—	(456.6)	44×32	
		ピット15	—	767.9	36×28	
		ピット16	—	1289.3	40×40	
		ピット17	—	(2730.7)	88×40	
		ピット18	—	(2768.4)	72×44	須恵系土器（平安）
		ピット19	—	(8640.3)	—	
		ピット20	—	2244.6	56×52	
		ピット21	—	(2256.1)	64×(48)	
		ピット22	—	2767.5	76×52	
		ピット23	—	1026.7	36×32	
		ピット24	—	1026.4	40×36	
		ピット25	50.74	(3019.4)	(60)×56	土師器・須恵系土器 土錘（平安）
TM2	AI−7・8区	ピット１	52.80	(6766.7)	(95)×(73)	
	AR−5区	ピット１	52.95	(5605.7)	(105)×80	
		ピット２	53.15	(302.6)	(20)×20	
		ピット３	53.27	570.6	28×25	
		ピット４	53.35	873.1	38×25	
		ピット５	53.35	1931.0	53×45	
		ピット６	53.97	1102.4	40×38	
		ピット７	53.15	(1078.0)	(70)×(18)	
		ピット８	—	(414.6)	30×(15)	
	AR−12・13区	ピット１	53.23	(2174.3)	83×(25)	使用痕ある剥片
		ピット２	53.30	1163.0	40×35	
		ピット３	53.20	(7039.2)	125×60	縄文土器
		ピット４	53.20	(2442.1)	80×(45)	縄文土器

地区		遺構名	底面標高(m)	規模 面積(cm²)	規模 長軸×短軸(cm)	出土遺物
TM3	N7区	１号土坑	49.45	(3268.8)	110×(38)	
	N10区	ピット１	50.15	7334.4	110×90	使用痕ある剥片
	N12区	１号土坑	50.85	(1973.6)	(50)×(48)	
		２号土坑	50.86	(10096.6)	160×80	土師器
		３号土坑	50.80	(2772.7)	95×(33)	土師器
		４号土坑	50.91	(4444.5)	145×(40)	
		５号土坑	50.95	2800.0	70×53	
		６号土坑	50.73	(7904.6)	140×(75)	土師器（古墳前期）
		７号土坑	50.83	(2719.0)	80×(43)	
TM4	１区	１号土坑	47.90	15220.4	160×115	縄文晩期土器
		２号土坑	47.82	128204.5	570×365	縄文晩期土器
		5・6号土坑	48.15			
		３号土坑	48.05	7544.5	120×90	縄文晩期土器
		４号土坑A	48.40	88896.5	400×335	縄文晩期土器
		４号土坑B	48.20			
		７号土坑	48.25	(82303.6)	445×(270)	縄文晩期土器
		９号土坑	47.67			
		８号土坑	48.30	14509.6	150×120	縄文晩期土器
		10号土坑	48.10	(11268.5)	190×(80)	縄文晩期土器
		11号土坑	47.97	7074.0	105×85	
		12号土坑	47.90	(11947.1)	195×(80)	縄文晩期土器
		13号土坑	48.38	30862.4	210×205	縄文晩期土器 剥片石器
		ピット１	—	1173.0	45×35	
		ピット２	—	691.4	35×30	
		ピット３	—	2134.9	75×40	
	２区	ピット１	—	795.1	35×35	
		ピット２	—	757.5	35×25	
	排水溝区	ピット１	—	722.2	38×30	縄文土器
TM5		ピット１	49.42	(2631.7)	65×(50)	
		ピット２	49.35		75×53	
		ピット３	50.12	(7494.6)	95×(90)	土師器
		１号土坑	49.82	(4777.9)	76×(63)	剥片石器
		２号土坑	49.70	(6745.6)	133×(60)	
		３号土坑	49.30	6530.6	120×80	土師器（古墳前期）
		４号土坑	49.23	9818.8	145×90	
		５号土坑	49.40	(4404.6)	100×(60)	
		６号土坑	49.42	(10038.7)	105×(115)	
		７号土坑	49.30	9522.7	185×65	
		８号土坑	49.35	(13515.8)	135×(123)	
		９号土坑	49.43	19136.8	170×155	
		10号土坑	49.78	(11981.8)	145×(90)	
TM6		８号土坑	—	(13081.6)	170×(135)	土師器
		９号土坑	—	(6424.6)	115×(63)	土師器
		10号土坑	—	(5646.1)	(75)×(85)	土師器
		11号土坑	—	(2449.6)	(68)×(40)	
		12号土坑	—	4696.0	90×63	
		13号土坑	—	(1719.3)	75×(33)	
		14号土坑	—	(7643.4)	(98)×(88)	土師器（古墳前期）

土器片は無い。おそらく、この土器は埋まっていない土坑に廃棄されたものと推定したい。土坑の細かな時期は確定できないが、床面から縄文土器が出土した６号土坑、42号土坑は縄文時代の可能性がある。そのほか、埋土中から土師器が出土している１（引田式期新段階）・33・40・45・46・57・59・83号土坑に関しては、その頃の時期が考えられる。ただし、これらの土師器は、床面ではなく埋土からの出土であることから、厳密に時期を決定することは難しい。

土坑の形状は、円形や楕円形などの整った形状は少なく、ほとんどが不整形である。また、底面近くで横に掘り進めることにより、壁がオーバーハング状を呈する土坑が多く認められた（51号土坑：図17など）。これらの土坑は、縄文時代における貯蔵穴としての定型的なフラスコ状土坑とは異なり、オーバーハングする箇所は不規則であり、壁もまた不整形である。さらに、底面が著しく凹凸している事例も多い（１号土坑：図６など）。このような形状から、今回検出した土坑は、これまでの調査で確認されているような粘土採掘坑と考えられる。また、小型円形・楕円形の土坑も、やはり底面付近でオーバーハングしている事例が認められる（86号土坑：図18など）。これは粘土層の確認のための試掘坑である可能性が考えられる。

第４次調査では、縄文時代晩期において良質な粘土層（本調査区の４層に相当）まで到達する粘土採掘坑が確認されている（図21・22、表７）。この中で、２・５・６号土坑（図21－⑤）、４号土坑（図22－①）、9号土坑（図22－④）は不整形で底面の凹凸も著しく、壁面もしばしばオーバーハングする。また、４号土坑はＡとＢの２基が重複している。これらの土坑の規模は、それぞれ約12.8㎡、8.9㎡、8.2㎡となり、今回検出した土坑よりも、かなり大きい。そして、この大型土坑の周辺には、複数の土坑が近接して密集する。それらの土坑も床面には凹凸があり、壁面はオーバーハングをする。これらの土坑の堆積状況は、壁際からレンズ上に堆積しており、自然堆積の様相を示している。このことから、土坑は埋められずに、周辺ではそのまま粘土採掘が行われていたことが想定できる。その結果、２・５・６号土坑の様に、複数の土坑が一連の埋土により自然に埋没する。その埋土には、当時の地表面に由来すると考えられる黒色土層が層状に混じるほか、壁際には壁面の崩壊により堆積した粘土層が堆積する。また、古墳時代前期と考えられる第３次調査区N12区、第５・６次調査区の粘土採掘坑には、大型のものは確認されていない（図23）。しかし、土坑の形状や埋土の堆積状況は、縄文時代の粘土採掘坑の特徴と大きく変わるものではない。これは芦ノ口遺跡の縄文時代から古墳時代において、粘土採掘の方法に大きな変化が無かったことを示している。

基本層序の項で説明したとおり、堆積層は北側に向けて傾斜している。調査区南北各セクション（図６）の４層検出面における標高の最大値と最小値の中央の値は、南側から51.07m、50.99m、50.41mとなる。この値からは、今回の本体調査区東側では標高がおおむね51.00m以下にて４層が確認できることになる。また、本体調査区の西側に位置する第２次調査N5区の良質な粘土層検出面の標高の中央の値は、51.41mである（図７）。本体調査区の南側の値より34cm程高くなることから、西側は51.40m以下にて４層が確認できる。これらの値からは、かつての地表面と同様に、４層も南から北に向かい傾斜していることがわかる。一方で、本調査区より北側に位置する第３次調査N14区の良質な粘土層検出面の標高の中央の値は、50.50mである（図７）。本体本調査区北側の値は50.41mであることから、良質な粘土層は北西部に向かって傾斜しておらず、その傾斜は凹凸の範囲内であるとみられる。したがって、今回の北部調査区の良質な粘土層の検出面は、大体50.55m以下と仮定したい。

今回の調査区内から検出された土坑で、良質な粘土層である４層を掘り込んでいる土坑は存在していなかったが、土坑底面の標高からもその状態を確認することができる（表３・４）。本体調査区において最も北西端に位置する80号土坑の底面の標高は、51.74mであり、良質な粘土層の検出面よりはるかに高い。南東に位置する５号土坑、６号土坑の底面標高は、それぞれ51.72m、51.66mとなり、同様の状況となる。また、規模の大きな土坑である本体調査区北東部に位置する１号土坑の底面は51.16mである。この場合、セクション図（図６－①）からでも明らかである通り、良質な粘土層に到達するためには、これからさらに40cm以上は掘り込まなければ

ならない。さらに、最も北部に位置する57号土坑の底面標高は51.22mであり、これも良質な粘土層には到達しないことになる。

今回調査した土坑の底面の標高は、最大値51.78m、最小値51.16m、平均値51.59mとなり、大体その全てが良質な粘土層の検出面より高い。良質な粘土層の検出面の標高が最も高い本体調査区西側（51.40m）よりも、底面の標高が低い北部調査区以外の土坑は、40号土坑と76号土坑の２基しか存在していない。そのうち40号土坑は、調査区北壁に接しやや東寄りであることから、良質な粘土層検出面はより下位にあるものと推定される。もう一つの76号土坑は、ほぼ南西端に位置し、底面付近よりグライ化した粘土層が確認されている（図８・10、図版21）。この76号土坑は、その位置や底面標高（51.34m）からも、良質な粘土層の表面までは到達したものと考えられる。しかし、なぜかその粘土層を採掘すること無く、試掘坑としてのみ留まっている。これらのことから、本調査区の土坑群は２、３層の小さな礫や砂を含む良質ではない粘土を採掘していたものと推定される。

第Ⅲ章　芦ノ口遺跡第８次調査（ＴＭ８）

１．基本層序

本調査では、５枚の堆積層を確認した（図24・25）。１層は、近現代の盛土・撹乱層である。２層は旧表土面と考えられる黒色土層である。２層には、未分化な植物の根、小円礫などのほか、非常にわずかな縄文土器小片が含まれる。この２層は、ほぼ全域に広がり、南西から北東方向に向かって傾斜する。ただし、最南部の２区南部では、この黒色土層は検出されず、この黒色土層より下位の層を検出した。これは、三神峯公園から続く傾斜面が、整地の際の平坦面作出により削平されたことによるものと考えられる。

３層は、大きめの礫を多く含むしまりの弱い褐色土層である。この層は、非常に摩耗した土器小片と石器を少数含む。また、この層は、南側では厚く堆積しているが、北側に進むにつれ礫と遺物は激減する。２区北側では、この３層の堆積状況から沢状の地形と推定される落ち込みを確認した（図25－③）。また、２区では含有物の違いにより３層を3a～3c層に細分した。１区３層は、２区の3c層に対応する。3a層と3b層は、沢状の落ち込みに堆積した３層の新しい段階と理解した。３層は、土質、堆積状況、包含物の状況から、三神峯公園方面からの崩壊土層と考えられる。４層は、部分的に分布する礫が少なく固くしまった粘土層である。遺物は４層の最上面のみに極少数認められたが、著しく摩耗した小片である。本来は３層に含まれる遺物と推定される。この４層は、土質等の点から５層の土壌化が進行した土層として捉えた。５層は、かなり固く締まった小円礫混じりの砂質土層で、遺物は全く含まれない。北側の撹乱部において、現地表面から深さ2m以下まで５層が続くことを確認した。

２．出土遺物

出土遺物は総点数644点、総重量4317.5gである（表８）。そのうち縄文土器が626点（3455.9g）であり、全体の97.2％を占める。土師器は内面に黒色処理がなされた小片である。小片のため図示等はしていない。本調査区50m程北側の第１次調査のＢ区において、平安時代の土師器14点などを含む土坑や焼土等が検出されており、その区域との関係が考えられる。また、磁器と陶器は近代のものと考えられる。図示はしていない。沢状地形の最後の堆積層である3a層には、先述の土師器が出土している。最も出土量の多かった３層出土の縄文土器には、大木５式から大木7a式までの各時期が出土している。これらのことからも、第８次調査における堆積層は、三神峯公園方面からの崩落土層という理解で問題ないものと考えられる。

表８　芦ノ口遺跡第８次調査出土遺物集計表
Tab. 8　Distribution of various implements from TM8

層位	全体		縄文土器			石器			土師器		陶器		磁器	
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	重量/点数	点数	重量(g)	器種	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
１層	66	967.5	61	257.4	4.2	3	16.5	石鏃2 スクレイパー1	1	1.1	1	678.5	1	13.5
２層上面	1	6.3											1	6.3
２層	85	291.8	78	263	3.4	1	95.7	石核1						
２層・３層	104	697.7	104	697.6	6.7				6	20.7			1	1.9
3a層	2	110.2	1	14.5	14.5	3	18.1	剥片2 チップ1	1	1.4				
３層	382	2208	378	2187.4	5.8									
４層	4	36	4	36	9.0									
合計	644	4317.5	626	3455.9	5.5	7	130.3	―	8	23.2	1	678.5	3	21.7

・縄文土器の「重量（g）」は、バインダー含浸後の重量である。
・縄文土器・土師器・陶器・磁器の「点数」は、破片点数である。

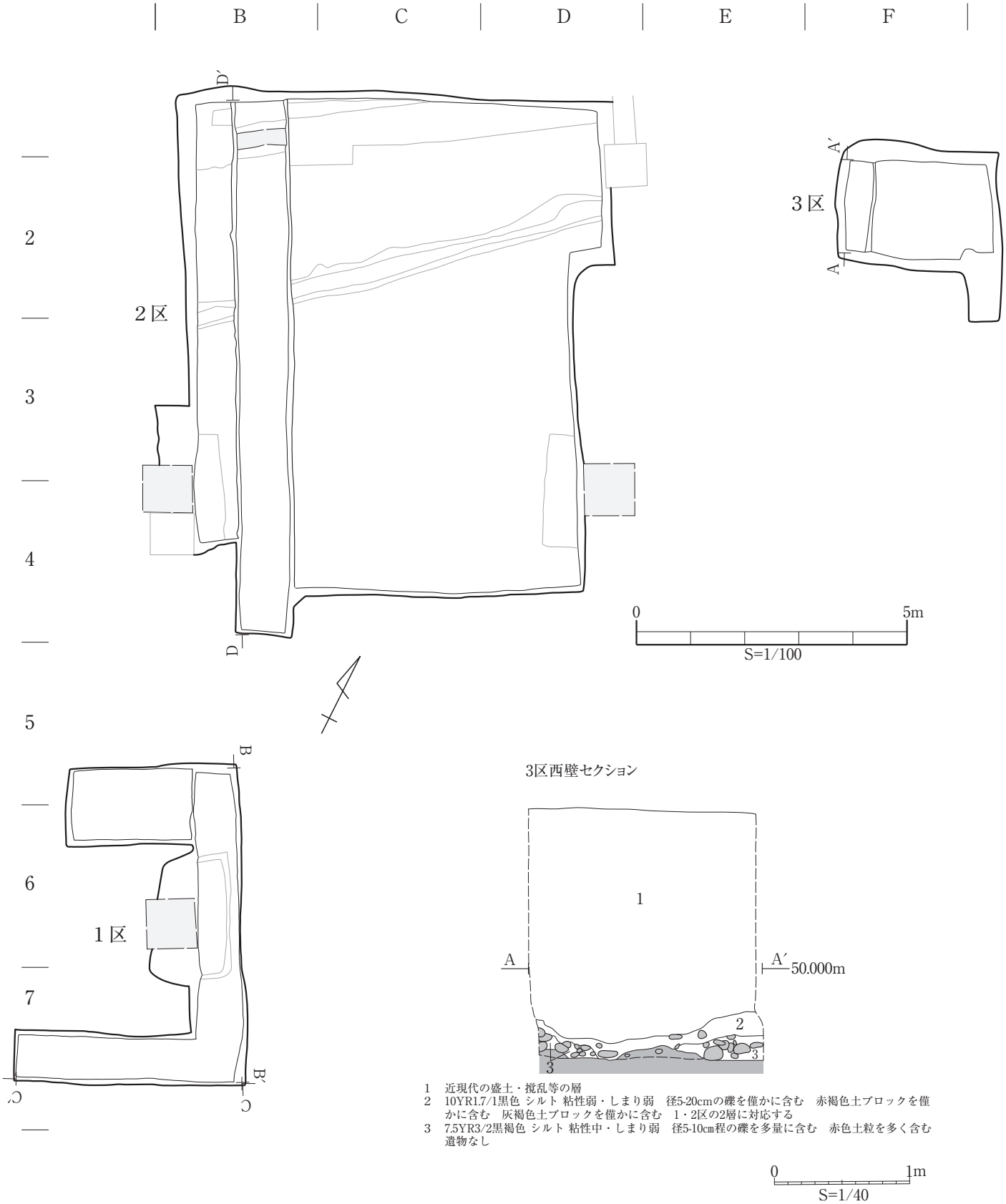
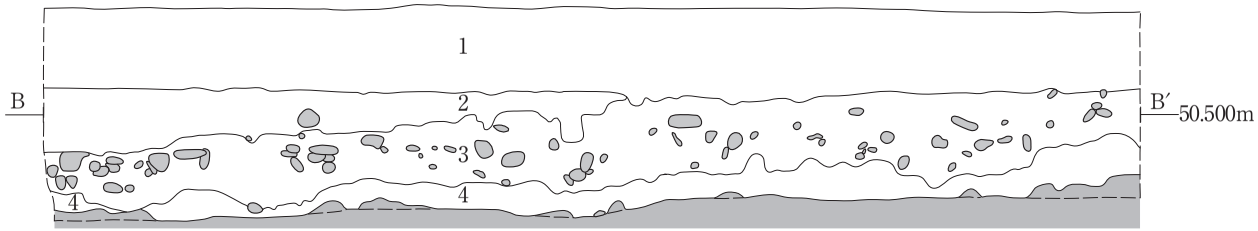
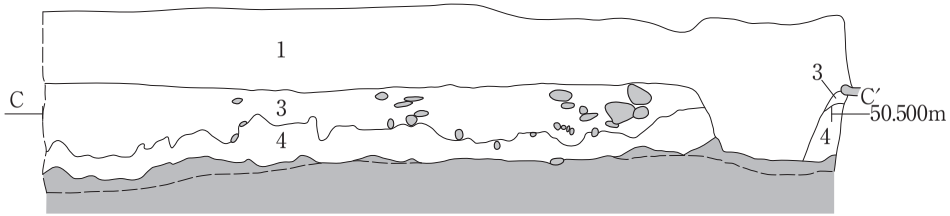


図24　芦ノ口遺跡第８次調査平面図・断面図
Fig. 24　Plan and cross section of excavation at TM8

①1区東壁セクション



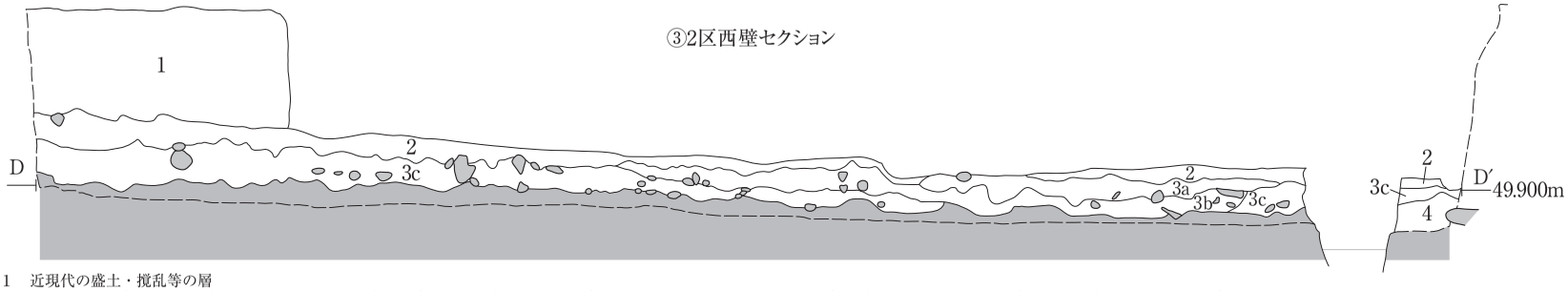
②1区南壁セクション



0　1m
S=1/40

1　近現代の盛土・撹乱等の層
2　10YR2/3黒褐色　シルト 粘性弱・しまり弱　径3-10cm程の円礫を僅かに含む　明黄褐色土、にぶい黄橙土を極僅かにブロック状に含む　層の下部では、下層由来の暗褐色土を極僅かにブロック状に含む
旧表土、植物の根を含む　遺物が僅かに出土する
3　10YR4/4褐色　シルト 粘性中・しまり中　径2-15cm程の礫を含み、部分的に多く含むところもある　赤色土粒、黄褐色土粒、炭化物を極僅かに含む　遺物が多数出土する
4　10YR5/6 黄褐色　シルト 粘性中・しまり中　径3-5cm程の礫を極僅かに含む　黄褐色土粒をやや多く含む　白色土粒を僅かに含む　遺物が極僅かに出土

③2区西壁セクション



1　近現代の盛土・撹乱等の層
2　10YR3/2黒褐色　シルト 粘性中・しまりやや弱主体　褐色シルトと鉄分を僅かに含む　撹乱の土と見られる　明黄褐色の粘土と石の混じった土塊や径2-5cm程の石を極僅かに含む　1区2層に対応する
3a　10YR5/4にぶい黄褐色　粘土 粘性強・しまりやや弱主体　黒褐色粘土を径2cm程の粒状に極少量を含み、明赤褐色のブロック、径1cm程の炭化物を極僅か含む
3b　2.5Y4/3オリーブ褐色　粘土 粘性強・しまりやや中主体　黒褐色粘土と酸化鉄を極僅かに斑に含む　径10-20cm板状・球状の石を多く含む
3c　10YR4/6褐色　粘土 粘性強・しまり強主体　黒褐色シルトを少量斑に含み、酸化鉄、径5cm程の炭化物を極僅かに含む　径10cm程の石を疎らに含む　1区3層に対応する
4　10YR5/4にぶい黄褐色　粘土 粘性強・しまり中主体　黒褐色粘土質シルトを極僅かに含む

0　1m
S=1/50

図25　芦ノ口遺跡第８次調査断面図
Fig. 25　Cross section of excavation at TM8

（1）縄文土器

縄文土器は、今回の調査で最も多く出土している。しかし、小片で摩耗や剥落が著しく、その中で図示できたのはわずか14点である（図26、表９、図版30）。また、摩耗などのため、縄文や調整は確認できない破片が多い。本文中では、確認できた内容に関してのみ記載する。

P1～P8は大木５式と考えられる土器片である。P1は、口縁に粘土帯を貼付後、押圧あるいは刻みにより鋸歯状にする。縄文施文後に細粘土紐を貼付し、横位に山形文を展開させる。P2は、半円状の粘土紐を貼付後に、それを塞ぐ様に直線的な短い粘土紐を貼付する。P3は、波状口縁の頂部表面に円形の粘土貼付を行う。そののちに竹管状工具で刺突する。P4は、縄文施文後に、粘土紐を貼付する。左下から右上に向かう梯子状のモチーフとなるものと推定される。梯子の段部分の短隆帯は最後に貼付する。P5は、縄文施文後、下側３条の粘土紐貼付、逆三角形状に粘土紐を貼付し鋸歯状にする。P6は縄文施文後に、粘土紐により平行する連続山形文を２条施す。P7は、縄文施文後に太めの隆帯を貼付後、竹管状の工具で刺突する。P8は、沈線で連続山形文を２条、横位に施す。

P9は、幅広く浅い２条の線が施される。P10は、クランク状のモチーフの沈線が施される。P11は、幅広く浅い竹管状の工具により沈線が施される。P12は、半裁竹管による横位押引文が施される。P13は、半裁竹管による刺突を２列施す。P14は、頸部から強く外反する。沈線を２条施す。口縁端面に竹管状の工具で刺突した痕跡、沈線下には縄文の痕跡が認められる。P9～P11は大木６式、P12～P14は大木7a式？の可能性が高い。

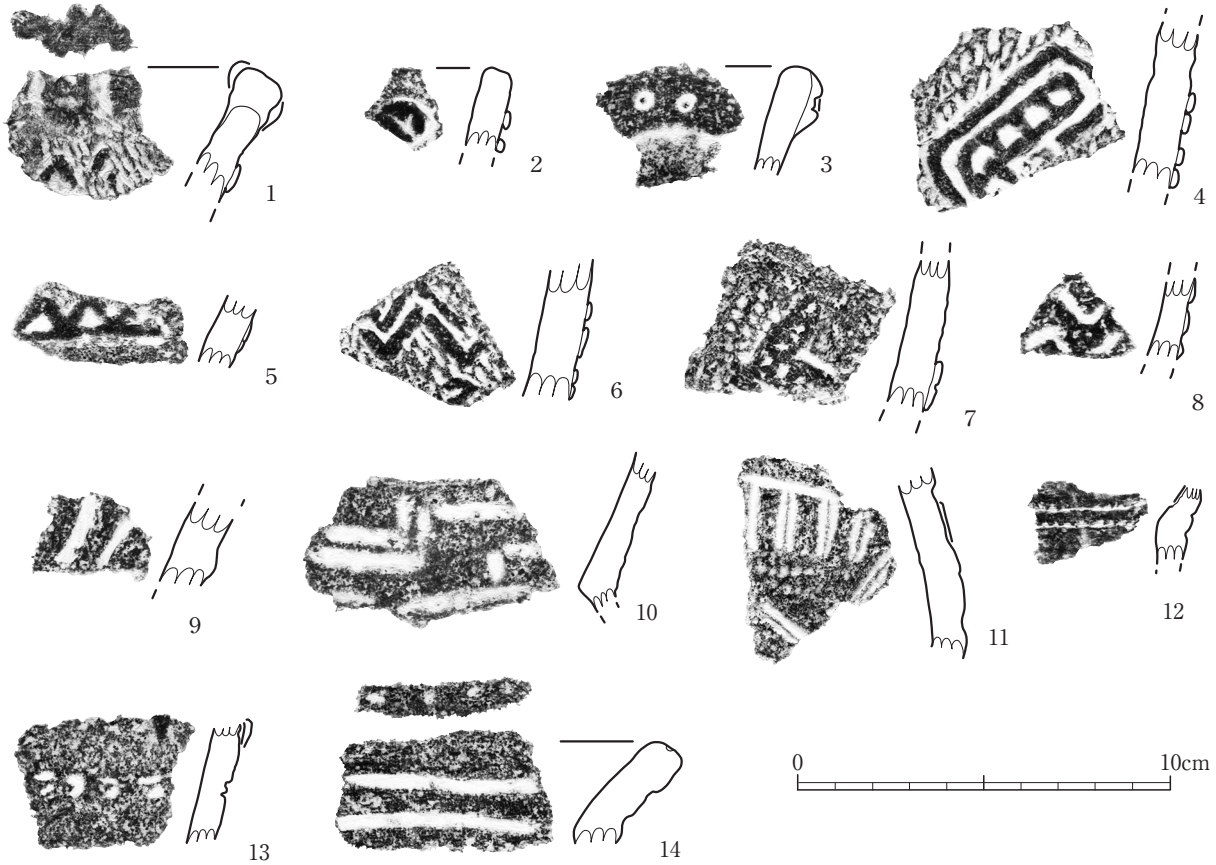


図26　芦ノ口遺跡第８次調査出土土器
Fig. 26　Pottery from TM8

表９　芦ノ口遺跡第８次調査出土縄文土器観察表
Tab. 9　Notes on Jomon pottery at TM8

登録番号	層位	機種	部位	その他	長さ（cm）	幅（cm）	器厚（cm）	図	図版
P1	３層	深鉢	口縁部	縄文（撚糸文L）	3.8	4	0.9	26	30
P2	１層	深鉢	口縁部		2.2	2.3	0.85	26	30
P3	３層	深鉢	口縁部		2.9	3.8	7.5	26	30
P4	１層	深鉢	胴部	縄文（LR）	5	5.5	1	26	30
P5	３層	深鉢	胴部		2.5	4.5	0.9	26	30
P6	３層	深鉢	胴部	縄文（撚糸文L）	3.8	4.5	1.2	26	30
P7	２層	深鉢	胴部	縄文（LR）	4.2	5.5	1	26	30
P8	２層	深鉢	胴部		2.5	3	0.7	26	30
P9	２・３層	深鉢	口縁部付近?	大木６式の口縁部付近か。	2.2	3.2	1.1	26	30
P10	３層	深鉢	頸部		3.9	6.7	0.75	26	30
P11	２・３層	深鉢	胴部	体部上半が強く球状に膨らみ、下半は筒形となる器形の体部上半部分と考えられる。	5	4.2	1	26	30
P12	１層	深鉢	頸部		2.3	3.3	0.8	26	30
P13	３層	深鉢	口縁部付近?	瘤状の貼付が認められ、縦位隆帯の残存部である可能性もある。	3.3	4.5	0.8	26	30
P14	３層	深鉢	口縁部		2.9	5.7	1.1	26	30

・法量は残存部による。

（2）石器

出土石器は、石鏃１点、石匙１点、二次加工ある剥片１点、石核１点、剥片２点、砕片１点である（図27、表10、図版31）。長さと幅がともに2㎝以下で明確な二次加工が認められないものに関しては砕片として分類した。石材別では、石核、剥片１点（S5）、石鏃は石英安山岩、剥片１点（S4）と石匙は鉄石英、砕片は玉髄、二次加工ある剥片は頁岩である。

石鏃（S1）は、非常に薄手である。この石鏃は、基部の一部が欠損している。片面には、折れ面から入る剥離面がほぼ先端部まで認められる。この剥離面は、切り合い関係や、末端形状が他の加工面とは異なり明瞭なヒンジフラクチャーを呈していることから加工とは異なる要因により形成されたことがわかる。また、先端部にも小さくはあるが同様な要因によると考えられる剥離面が認められる。これらの痕跡は、石鏃の弓矢としての使用実験（御堂島正1991）で確認された衝撃剥離痕に非常に類似している。衝撃剥離の形状分類から、石鏃の基部側に認められるものは折れと縦溝状剥離の複合に分類できる。また、先端部側に認められる剥離面は、縦溝状剥離に分類できる。これらのことから、石鏃もほぼ同様な使用方法により欠損し、この遺跡内に廃棄もしくは遺棄されたと想定される。石器表面には付着物がみられ、衝撃剥離痕の存在から推定される石鏃の使用方法などを考慮すると、石鏃と柄との膠着材の可能性がある。石鏃の製作的特徴を見ると剥離面は、左下から右上方向に向かって連続的に剥離されているのが確認できる。

石匙の形態は、大きく縦型と横型に分類できるが（中谷治宇二郎1925）、今回出土した石匙（S2）は横型である。この石匙にはつまみ部先端部からの剥離面が認められ、この剥離面は製作時の他の剥離面とは異なり、顕著なヒンジフラクチャーを呈しており明瞭な打点が認められないことから、非意図的に形成されたものである可能性が高い。石匙の先端部には、周辺の加工とは異なり、より細かな連続的な剥離が施されている。また、石器の周囲の加工では両面からの交互剥離が認められるが、先端部では同一面を打面とした剥離面のみによって形成されている。この箇所の刃角は、他の箇所が約35°から45°の範囲内で形成されているのに対して、約59°から65°の急角度に作出されている。このように、この箇所は他の加工面とは明らかに異なる特徴を有していることがわかる。この箇所の縁辺は、摩耗し丸みを帯びているのが観察できる。このような特徴を総合するとこの箇所が使用を目的として作出されたことが考えられる。しかし、この箇所を中心に落射照明付金属顕微鏡（オリンパスBX51M）

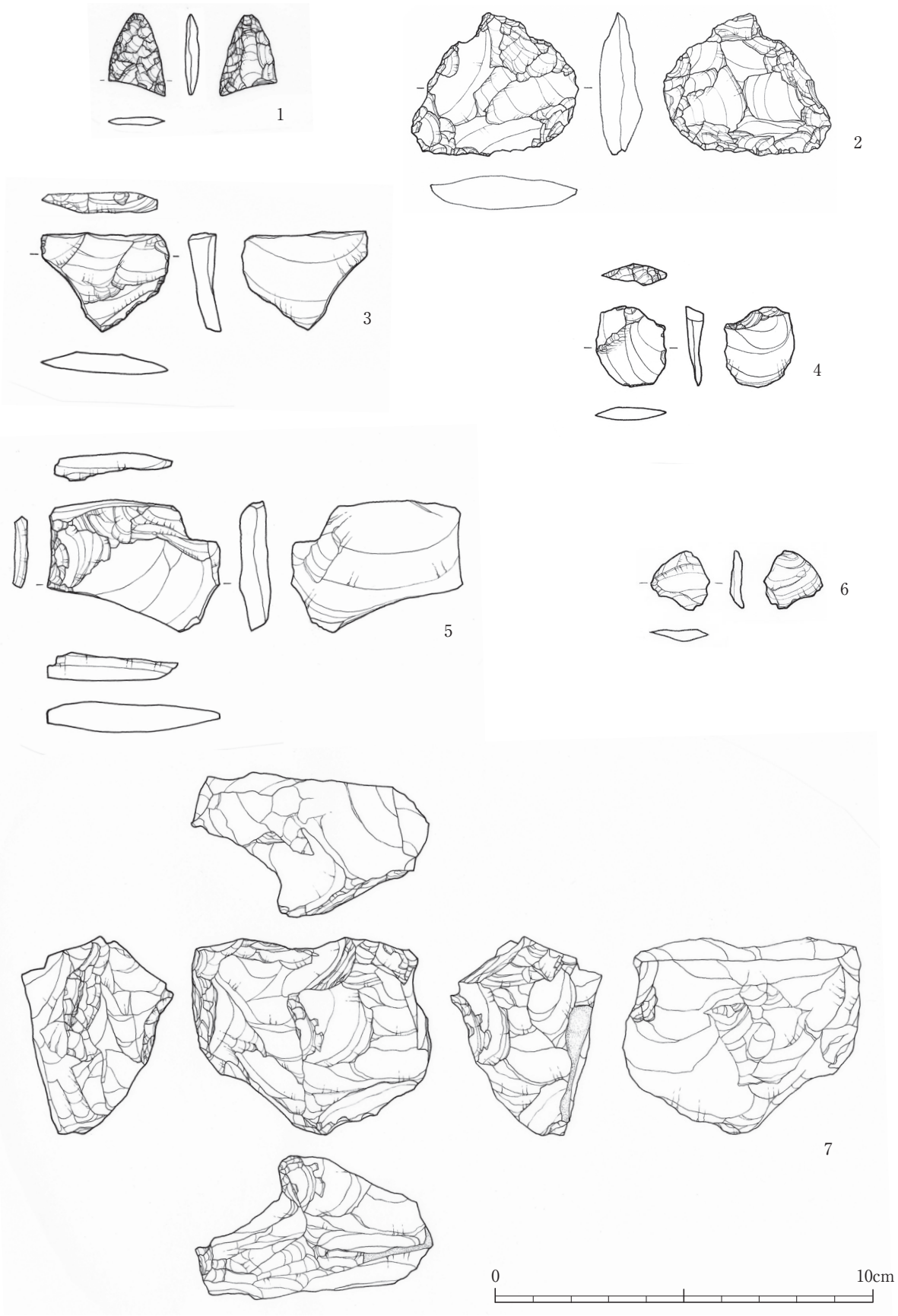


図27　芦ノ口遺跡第８次調査出土石器
Fig. 27　Stone implements from ＴＭ８

で主に200倍を用いて観察した結果、明確な使用痕を確認することはできなかった。この傾向は、リダクションによる使用痕の欠如を反映しているとも考えられるが、明瞭な多段階表面変化（阿子島香1989）や、二次加工面における砕片などとの接合関係が確認できないことから現時点では使用の有無について明確に判断することはできない。

二次加工ある剥片（S3）は、打面部と末端部の一部が欠損した資料の片側縁の一部に、同一面からの連続的な剥離による加工が施されている石器である。二次加工が認められる箇所を中心に落射照明付金属顕微鏡（オリンパスBX51M）で主に200倍を用いて観察したが、明確な使用痕は確認できなかった。

石核（S7）は、石英安山岩である。この石核と剥片（S5）は同一母岩であると考えられる。石核には、自然面が表面の一部に残されている。頭部調整などの痕跡から、打面転移が少なくとも４回行われている。明確な打面調整は認められない。

図示した剥片は２点であり、剥片（S5）は、石英安山岩であり、石核（S7）と同一母岩であると考えられる。打面部は欠損している。背面には複数の剥離面が確認でき、それらは腹面とは剥離面の方向が異なることから打面調整剥片と推定できる。剥片（S4）は、背面にポジ面が残っている。打面は比較的大きく打面構成は複剥離面である。石材は、鉄石英である。

砕片（S6）は、玉髄製である。今回図示した石器の中で玉髄製のものはこの砕片１点のみである。

表10　芦ノ口遺跡第８次調査出土石器観察表
Tab. 10　Notes on Stone artifacts at TM8

登録番号	層位	器種	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	石材	備考	図	図版
S1	１層	石鏃	21.1	15.0	3.1	0.80	石英安山岩	基部の一部が欠損	27	31
S2	１層	石匙	37.0	43.8	9.0	15.16	鉄石英	つまみ部先端が欠損	27	31
S3	３層	二次加工ある剥片	25.7	32.9	5.7	4.74	頁岩		27	31
S4	３層	剥片	21.4	19.2	5.0	1.37	鉄石英		27	31
S5	３層	剥片	45.2	32.5	7.2	12.00	石英安山岩		27	31
S6	１層	砕片	13.7	14.8	2.3	0.51	玉髄		27	31
S7	3a層	石核	45.9	61.5	36.1	95.56	石英安山岩		27	31

３．まとめ

本調査区では、厚い盛土がなされ、旧表土（２層）が遺存していた。三神峯公園に近い南側の地点では削平がなされていたが、その旧表土は、比較的厚く堆積した未分解の植物を含む腐植土壌であり、安定的に堆積した様相が窺われる。しかし、その黒色土直下の土層は、多くの礫を含むしまりの無い、三神峯公園側斜面からの崩落と考えられる土層（３層）であった。３層から出土した土器は、摩耗しきった小破片がほとんどであり、全体の形状がわかるものは皆無である。その崩落土層のうち最初に堆積した１区３層・２区3c層は、前期後葉から中期初頭の縄文土器を含んでいることから、中期初頭以後の堆積であることがわかる。その後、２区では3c層が開析され、小さな沢状の地形が形成される。そして、再び類似する土層（3a・3b層）により埋没する。最上層である3a層には土師器も混ざっていることから、3c層の堆積時期とは比較的離れた時間差が想定できる。

これまでの調査の中では、第１次調査Ａ区において、今回の出土土器と同様の土器や石器が、表土あるいは近・現代の整地層から出土している。Ｂ区でも、同様な状況で同時期の遺物が出土している。いずれも元々の包含層あるいは遺構から出土したものではない。本調査区は、土層堆積状況や三神峯遺跡の第６次調査成果等を踏まえ、三神峯公園方面からの流れ込みを想定した。しかし、丘陵斜面部からやや離れたＡ区やＢ区にも遺物が出土していることを踏まえると、芦ノ口遺跡の南側にも同時期の遺構等が存在していた可能性もある。

引用・参考文献

阿子島香　1989 『石器の使用痕』 ニューサイエンス社
伊東信雄　1950 「仙台市内の古代遺跡」『仙臺市史』３別編１　仙台市　pp.1－106
岩渕康治ほか　1980 『三神峯遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第25集　仙台市教育委員会
大久保弥生ほか　2009 『三神峯遺跡－第６次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第338集　仙台市教育委員会
工藤信一郎　1994 『北原街道Ｂ遺跡』仙台市文化財調査報告書第181集　仙台市教育委員会
興野義一　1968 「大木式土器理解のために（Ⅳ）」『考古学ジャーナル』24　pp.17－19
興野義一　1969 「大木式土器理解のために（Ⅴ）」『考古学ジャーナル』32　pp.6－9
興野義一　1970a 「大木式土器理解のために（Ⅵ）」『考古学ジャーナル』48　pp.20－22
興野義一　1970b 「大木5b式の提唱」『古代文化』22－4　pp.97－102
興野義一　1984 「大木式土器について」『宮城の研究』１　清文堂出版　pp.173－190
小岩直人・平野信一・松本秀明　2005 「仙台平野とその周辺地域」『東北日本の地形３』 東京大学出版会　pp.91－133
佐伯修一　2010 『三神峯－三神峯遺跡第４・５次発掘調査　三神峯古墳群確認調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第379集　仙台市教育委員会
佐藤憲幸・三好秀樹　2003 『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第192集　宮城県教育委員会
篠原信彦ほか　1990 『下ノ内遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ－』仙台市文化財調査報告書第136集
主浜光朗　1992 『土手内』仙台市文化財調査報告書第165集　仙台市教育委員会
白鳥良一　1974 「仙台市三神峯遺跡の調査」『東北の考古歴史論集』 宝文堂出版　pp.1－54
仙台市史編さん委員会　2009 『仙台市史通史編７近代２』 仙台市
東北大学百年史編集委員会　2003 『東北大学百年史４部局史１』 東北大学
東北大学百年史編集委員会　2009 『東北大学百年史11資料４』 東北大学
豊島正幸ほか　2001 「仙台地域における台ノ原段丘面の形成時期」『第四紀研究』40－1　pp.53－59
内藤正恒　1939 『宮城県利府村春日瓦焼場大澤瓦窯址研究調査報告』東北帝国大学法文学部奥羽史料調査部研究報告第１
中川久夫　1998 「(2) 遺跡周辺の地質・地形」『東北大学埋蔵文化財調査年報』９　pp.74－76
中田高ほか　1976 「仙台平野西縁・長町－利府線に沿う新規地殻変動」『東北地理』28－2　pp.111－120
中谷治宇二郎　1925 「石匙に対する二三の考察」『人類学雑誌』40－4　pp.144－153
早瀬亮介 「前期大木式土器の変遷と地域性」 pp.273－282
早瀬亮介 「前期大木式土器」『総覧縄文土器』 アム・プロモーション　pp.226－233
早瀬亮介・菅野智則・須藤隆　2006 「東北大学文学研究科考古学陳列館所蔵大木囲貝塚出土基準資料－山内清男編年基準資料－」 Bulletin of the Tohoku University Museum 5 pp.1－40
藤沢　敦　1992 「引田式再論」『歴史』第79輯　pp.68－86
藤沢　敦　1995a 「三神峯古墳群」『仙台市史特別編２考古資料』 仙台市　p.265
藤沢　敦　1995b 「富沢窯跡」『仙台市史特別編２考古資料』 仙台市　pp.350－351
藤沢　敦　2002 「東北地方の円筒埴輪－窯焼成埴輪の波及と展開－」『埴輪研究会誌』６　pp.17－42
松下芳男　1973 『山紫に水清き』 仙幼会
御堂島正　1991 「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』92　pp.79－97
村田晃一ほか　1987 『小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第122集　宮城県教育委員会
山内清男　1979 『日本先史土器の縄紋』 先史考古学会（1997年　示人社より再刊）
吉岡恭平ほか　2001 『八木山緑町遺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第253集　仙台市教育委員会
渡邉泰伸ほか　1974 『富沢窯跡仙台三神峯丘陵所在埴輪窯跡調査報告』研究報告３　古窯跡研究会
渡辺　紀　1989 『北前遺跡－第３次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第129集　仙台市教育委員会

国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程

平成６年５月17日　規第56号

（趣旨）

第１条　この規程は、国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

（目的）

第２条　調査室は、国立大学法人東北大学（以下「本学」という。）の特定事業組織として、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

（職及び職員）

第３条　調査室に、次の職及び職員を置く。

室長

文化財調査員

特任准教授

事務職員

その他の職員

（室長）

第４条　室長は、調査室の業務を掌理する。

２　室長は、本学の専任の教授をもって充てる。

３　室長の選考は、第６条に規定する運営委員会の議に基づき、総長が行う。

４　室長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（文化財調査員）

第５条　文化財調査員は、室長の命を受け、調査室の業務に従事する。

２　文化財調査員は、調査室の職員をもって充てる。

（運営委員会）

第６条　調査室に、その組織、人事、予算その他運営に関する重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

（運営委員会の組織）

第７条　運営委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　東北大学施設整備・運用委員会各地区キャンパス整備委員会の委員　各１人

二　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授　若干人

三　発掘調査地に関連のある部局の教授又は准教授で、その都度委員長が指名するもの

四　施設部長

（委員長）

第８条　委員長は、室長をもって充てる。

２　委員長は、運営委員会の会務を総理する。

３　委員長は、必要があると認めるときは、運営委員会の同意を得て、委員以外の者を運営委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

（調査部会）

第９条　運営委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、調査部会を置く。

（調査部会の組織）

第10条　調査部会は、部会長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　調査室の特任准教授

二　文化財調査員

三　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授　若干人

四　施設部計画課長

五　発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

（部会長）

第11条　部会長は、室長をもって充てる。

２　部会長は、調査部会の会務を掌理する。

（委嘱）

第12条　第７条第１号から第３号まで並びに第10条第３号に掲げる委員は、室長が委嘱する。

（任期）

第13条　第７条第１号から第３号まで並びに第10条第３号に掲げる委員の任期は、２年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

２　前項の委員は、再任されることができる。

（幹事）

第14条　運営委員会に幹事を置き、施設部計画課長をもって充てる。

（事務）

第15条　調査室の事務については、国立大学法人東北大学事務組織規程（平成16年規第151号）の定めるところによる。

（雑則）

第16条　この規程に定めるもののほか、調査室の組織及び運営に関し必要な事項は、室長が定める。

附　則

１　この規程は、平成６年５月17日から施行する。

２　東北大学埋蔵文化財調査委員会規程（昭和58年規第38号）は、廃止する。

３　東北大学公印規程（昭和46年規第17号）の一部を次のように改正する。

〔次のよう〕略

附　則（平成16年４月１日規第207号改正）

この規程は、平成16年４月１日から施行する。

附　則（平成18年4月26日規第80号改正）

１　この規程は、平成18年４月26日から施行し、改正後の国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程の規定は、平成18年４月１日から適用する。

２　平成18年４月１日（以下「適用日」という。）の前日にセンター長の任にある者は、適用日において改正後の第４条第３項の規定により室長となったものとみなし、その任期は、同条第４項の規定にかかわらず、平成18年５月16日までとする。

附　則（平成19年４月１日規第76号改正）

この規程は、平成19年４月１日から施行する。

東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧

《東北大学埋蔵文化財調査年報》

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報１	1985	昭和58年度（1983年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第１地点（ＮＭ１）	
		仙台城跡二の丸第２地点（ＮＭ２）	
		仙台城跡二の丸第３地点（ＮＭ３）	
東北大学埋蔵文化財調査年報２	1986	昭和59年度（1984年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		青葉山Ｂ遺跡第１次調査（ＡＯＢ１）	
		青葉山Ｂ遺跡第２次調査（ＡＯＢ２・旧称ＡＯＦ）	
		青葉山Ｅ遺跡第１次調査（ＡＯＥ１）	
東北大学埋蔵文化財調査年報３	1990	昭和60年度（1985年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第６地点（ＮＭ６）	
		芦ノ口遺跡第１次調査（ＴＭ１）	
		芦ノ口遺跡1976年考古学研究室による調査（ＴＫ）	
		研究編－東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題ほか	
東北大学埋蔵文化財調査年報４・５	1992	昭和61年度（1986年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		昭和62年度（1987年度）事業概要	
		仙台城跡二の丸第４地点（ＮＭ４）	
		仙台城跡二の丸第７地点（ＮＭ７）	
		仙台城跡二の丸第８地点（ＮＭ８）	
東北大学埋蔵文化財調査年報６	1993	昭和63年度（1988年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）	
東北大学埋蔵文化財調査年報７	1994	平成１年度（1989年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）付帯施設部分	
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）調査成果の検討	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第５地点（ＢＫ５）	
		川渡農場町西遺跡第１地点（ＫＷ１）	
東北大学埋蔵文化財調査年報８	1997	平成２年度（1990年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第９地点（ＮＭ９）	
東北大学埋蔵文化財調査年報９	1998	平成３年度（1991年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第10地点（ＮＭ10）	
		芦ノ口遺跡第２次・３次調査（ＴＭ２・ＴＭ３）	
		考察編－仙台城二の丸跡の考古学的調査－	
東北大学埋蔵文化財調査年報10	1998	平成４年度（1992年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第13地点（ＮＭ13）	
		青葉山地区分布調査	
		研究編－相馬藩における近世窯業生産の展開	
東北大学埋蔵文化財調査年報11	1999	平成５年度（1993年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第12地点（ＮＭ12）	
		仙台城跡二の丸第14地点（ＮＭ14）	
		青葉山Ｅ遺跡第２次調査（ＡＯＥ２）	
東北大学埋蔵文化財調査年報12	1999	平成６年度（1994年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第15地点（ＮＭ15）	
		青葉山Ｅ遺跡第３次調査（ＡＯＥ３）	
東北大学埋蔵文化財調査年報13	2000	平成７年度（1995年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第11地点（ＮＭ11）	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第４地点（ＢＫ４）	
		青葉山Ｅ遺跡第４次調査（ＡＯＥ４）	
		研究編－東北大学構内（仙台城二の丸跡）遺跡出土漆器資料の材質と製作技法	
東北大学埋蔵文化財調査年報14	2001	平成８年度（1996年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第６地点（ＢＫ６）	
		青葉山Ｅ遺跡第５次調査（ＡＯＥ５）	
		芦ノ口遺跡第４次調査（ＴＭ４）	
東北大学埋蔵文化財調査年報15	2001	平成９年度（1997年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第16地点（ＮＭ16）	
		青葉山Ｅ遺跡第６次調査（ＡＯＥ６）	

＊これらの刊行物は、宮城県遺跡リポジトリおよび東北大学機関リポジトリTOURで全て公開している。
宮城県遺跡リポジトリ　http://rar. miyagi. nii. ac. jp/
東北大学機関リポジトリTOUR　http://ir. library. tohoku. ac. jp/re/

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報16	2001	平成10年度（1998年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		研究編－糖アルコール含浸法における予備実験	
東北大学埋蔵文化財調査年報17	2002	平成11年度（1999年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報18	2005	平成12年度（2000年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第17地点（ＮＭ17）	
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第１分冊	2006	平成13年度（2001年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		芦ノ口遺跡第５次調査（ＴＭ５）	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 遺構	
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第２分冊	2009	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 陶磁器・土器・土製品・瓦	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第３分冊	2007	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 木簡・墨書ある木製品	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第４分冊	2008	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） その他の遺物	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第５分冊	2010	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 分析・考察	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報20	2006	平成14年度（2002年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点（ＢＫ８）	
		青葉山Ｅ遺跡第７次調査（ＡＯＥ７）	
		青葉山Ｅ遺跡第８次調査（ＡＯＥ８）	
東北大学埋蔵文化財調査年報21	2007	平成15年度（2003年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第９地点（ＢＫ９）	
		芦ノ口遺跡第６次調査（ＴＭ６）	
東北大学埋蔵文化財調査年報22	2008	平成16年度（2004年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報23	2009	平成17年度（2005年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報24	2010	平成18年度（2006年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（ＢＫ10）	
		青葉山新キャンパス地区試掘調査	

＊これらの刊行物は、宮城県遺跡リポジトリおよび東北大学機関リポジトリTOURで全て公開している。
宮城県遺跡リポジトリ　http://rar. miyagi. nii. ac. jp/
東北大学機関リポジトリTOUR　http://ir. library. tohoku. ac. jp/re/

《東北大学埋蔵文化財調査室調査報告》

シリーズ名	書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告１	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区 第11地点・第12地点 －仙台市高速鉄道東西線機能補償関係調査報告書－	2011	東西線補償関係埋蔵文化財調査の概要	東北大学 埋蔵文化財調査室
			仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11）	
			仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（BK12）	
			川内地区の絵図記載人名の検討	
			川内地区における江戸時代の道路の復元	
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告２	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区 第13地点	2013	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13）	東北大学 埋蔵文化財調査室
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告３	芦ノ口遺跡第７次・第８次調査	2014	芦ノ口遺跡第７次調査（ＴＭ７）	東北大学 埋蔵文化財調査室
			芦ノ口遺跡第８次調査（ＴＭ８）	

《東北大学埋蔵文化財調査室年次報告》

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2007	2010	平成19年度（2007年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2008	2010	平成20年度（2008年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2009	2012	平成21年度（2009年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2010	2012	平成22年度（2010年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2011	2013	平成23年度（2011年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2012	2014	平成24年度（2012年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室

＊これらの刊行物は、宮城県遺跡リポジトリおよび東北大学機関リポジトリTOURで全て公開している。
宮城県遺跡リポジトリ　http://rar. miyagi. nii. ac. jp/
東北大学機関リポジトリTOUR　http://ir. library. tohoku. ac. jp/re/

RESEARCH REPORTS
IN ARCHAEOLOGY ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY
No.3 MARCH 2014

The Archaeological Research office
On the Campus, Tohoku University
1-1, Katahira 2chome, Aoba Ward, Sendai
980-8577 JAPAN

Summary

On the campus of Tohoku University a lot of archaeological sites are known. Tomizawa campus includes Jomon and Kofun period site.

In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. The Office mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on campus.

This report carries the research result of salvage excavations of TM7 (the 7th excavation of Ashinokuchi site at Tomizawa campus) and TM8 (the 8th excavation of Ashinokuchi site at Tomizawa campus), which was conducted by the Archaeological Research Office on the Campus of Tohoku University in 2009.

TM7 (the 7th excavation of Ashinokuchi site at Tomizawa campus)

This area was excavated prior to construction of a building for the laboratory of Research Center for Electron Photon Science. The area of the excavation was 330.3㎡. 81 clay pits were found. The shape of the clay pits is pseudomorphic circle and the floor is not flat. The clay was scooped out from the floor, the wall of the clay pits were irregularly overhanged.

In the past excavation which we have done, TM4, it was concluded that the aim of the clay pits was to get good quality clay. It was layer 4. But in this excavation, TM7, it was clear that the aim of the clay pits was layer 2 or 3. Clay of layer 2 and 3 is not as good as layer 4, because it includes more sand and pebbles.

Jomon potteries were found in 4 clay pits, and Haji wares were found in 7 clay pits. All of these were in bad condition. Their surfaces were damaged, so the types and designs of all Jomon pottery were unknown. A Haji ware is dated to middle stage of Kofun period by the shape.

TM8 (the 8th excavation of Ashinokuchi site at Tomizawa campus)

This area was excavated prior to construction of Electric Substation equipments. The area of the excavation was 90.2㎡. The south part of TM8 is an upward slope toward the Mikamine Park.

No structural remains were found, but an ancient swamp stream was found. Jomon pottery, Haji wares and stone tools were found from the swamp. Jomon pottery and Haji wares were small pieces and abraded. These were pieces fallen down from the upward slope toward the Mikamine Park.

写　真　図　版

1．調査区全景（南から）

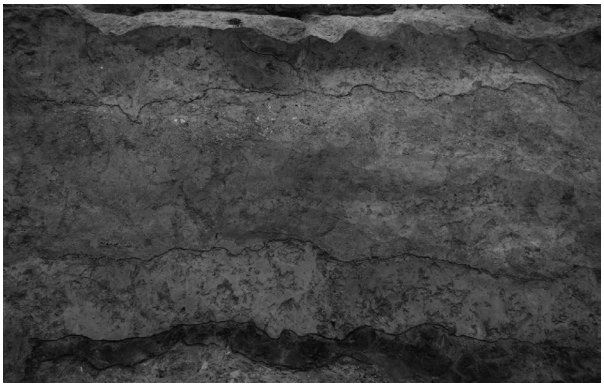
2．調査区東側（北から）

図版１　芦ノ口遺跡第７次調査全景（1）
Pl. 1　Views of TM7 (1)

1．調査区西側（北から）

2．調査区北東側（北東から）

3．調査区東壁北側（西から）



4．調査区東壁中央（西から）

図版２　芦ノ口遺跡第７次調査全景（2）
Pl. 2　Views of TM7 (2)

1．調査区東壁南側（西から）

2．1号土坑セクション（西から）

3．1号土坑検出状況（北から）

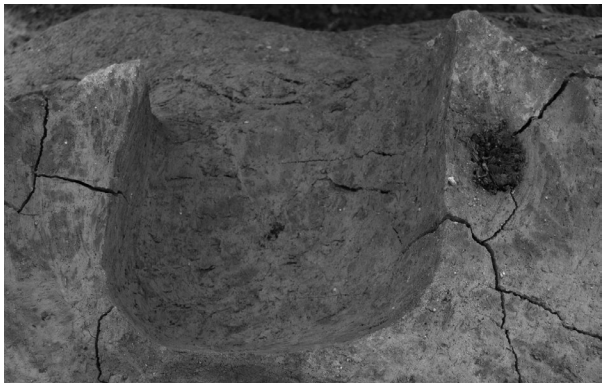
4．1号土坑（北から）

5．1号土坑（北西から）

6．1号土坑遺物出土状況（西から）

図版３　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（1）
Pl. 3　Features of TM7 (1)

1．2号土坑セクション（西から）



2．2号土坑（東から）

3．3号土坑セクション（西から）

4．3号土坑（東から）

5．4号土坑セクション（南から）

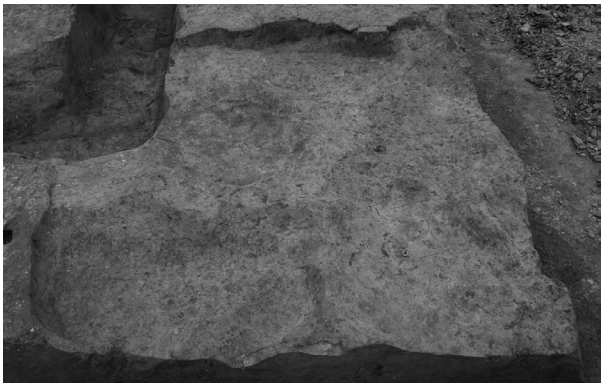
6．4号土坑（南から）

7．5号土坑セクション（南から）

8．5号土坑（南から）

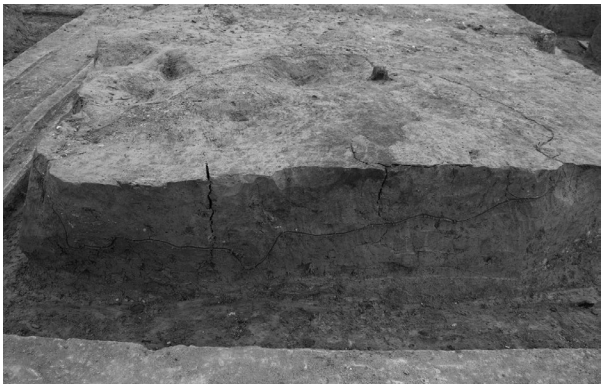
図版４　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（2）
Pl. 4　Features of TM7 (2)

1．6号土坑セクション（東から）



2．6号土坑（南から）

3．6号土坑漆製品（WL1）出土状況（北から）

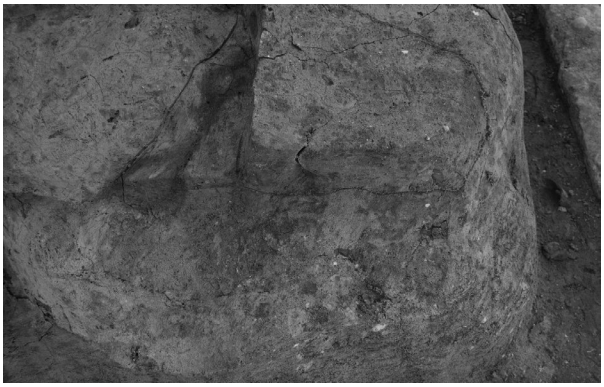


4．7号土坑セクション（西から）

5．7号土坑（西から）

6．8号土坑セクション（南から）

7．8号土坑（北から）



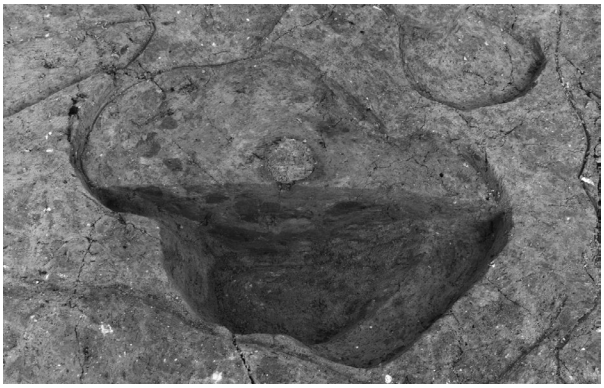
8．9号土坑セクション（南から）

図版５　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（3）
Pl. 5　Features of TM7 (3)

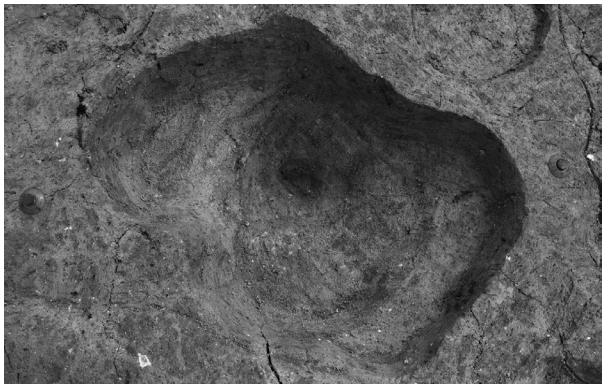
1．9号土坑（南から）

2．10号土坑セクション（西から）

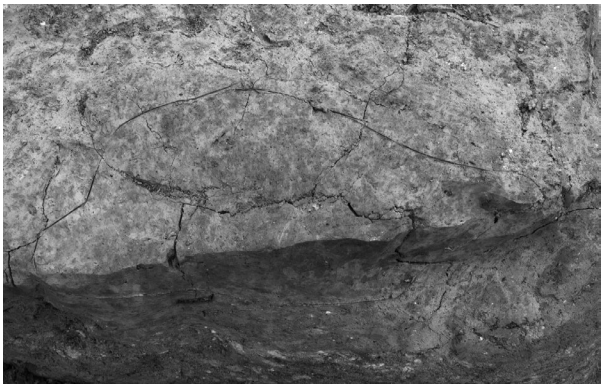
3．10号土坑（東から）



4．11号土坑セクション（西から）



5．11号土坑（西から）



6．12号土坑セクション（北から）

7．12号土坑（北から）

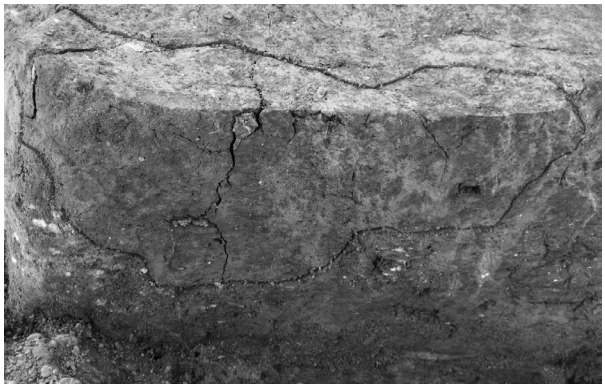
8．13号土坑セクション（東から）

図版６　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（4）
Pl. 6　Features of TM7 (4)

1．13号土坑（北から）

2．14号土坑セクション（東から）

3．14号土坑（東から）



4．15号土坑セクション（南から）

5．15号土坑（北から）

6．16号土坑セクション（南から）

7．16号土坑（南から）

8．17号土坑セクション（西から）

図版７　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（5）
Pl. 7　Features of TM7 (5)

1．17号土坑（東から）

2．18号土坑セクション（東から）

3．18号土坑（東から）

4．19号土坑セクション（東から）

5．19号土坑（東から）

6．20号土坑セクション（東から）

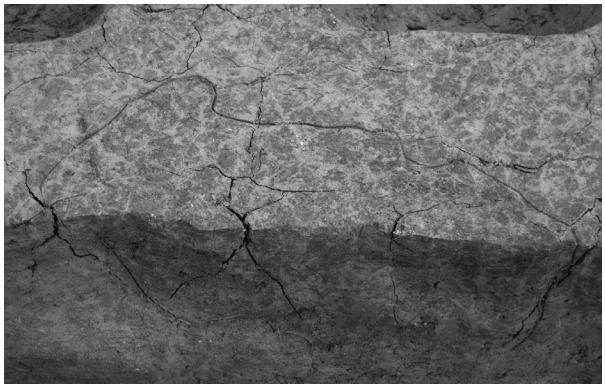
7．20号土坑（東から）

8．21号土坑セクション（西から）

図版８　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（6）
Pl. 8　Features of TM7 (6)

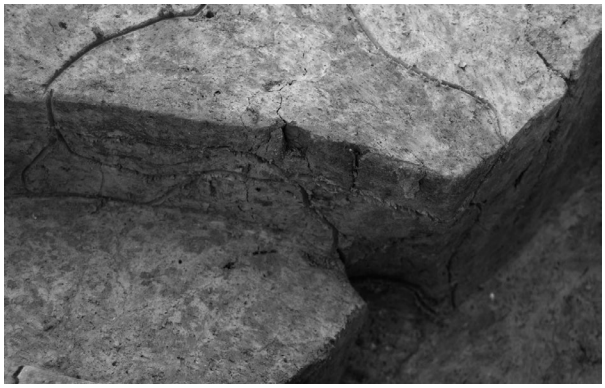
1．22号土坑セクション（東から）

2．22号土坑（東から）



3．23号土坑セクション（北から）

4．23号土坑（北から）



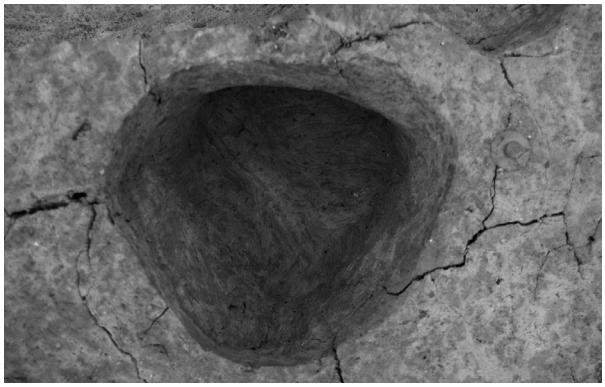
5．24号土坑セクション（北東から）

6．25号土坑東壁セクション（西から）

7．25号土坑（南から）

8．26号土坑セクション（南から）

図版９　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（7）
Pl. 9　Features of TM7 (7)

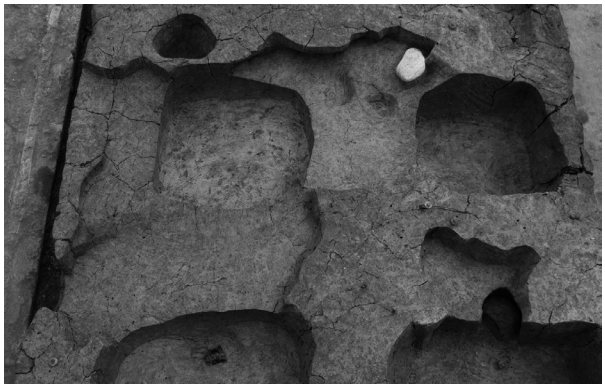


1．26号土坑（南から）

2．27号土坑セクション（東から）

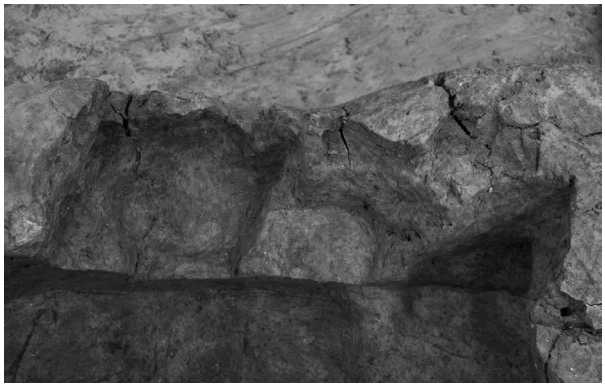
3．27号土坑（北から）

4．28号土坑セクション（南東から）

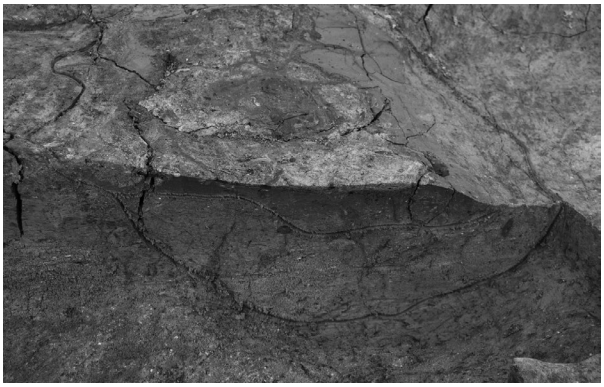


5．28号土坑（北から）

6．29号土坑セクション（北から）



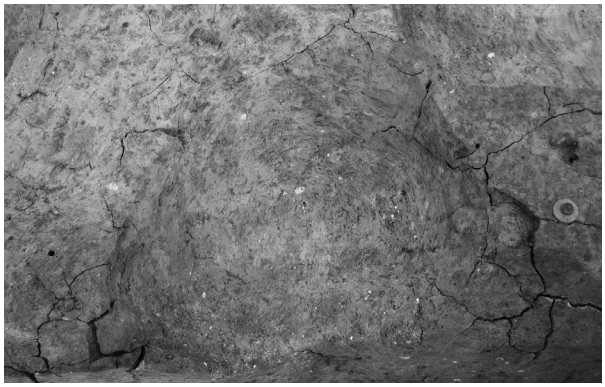
7．29号土坑（北から）



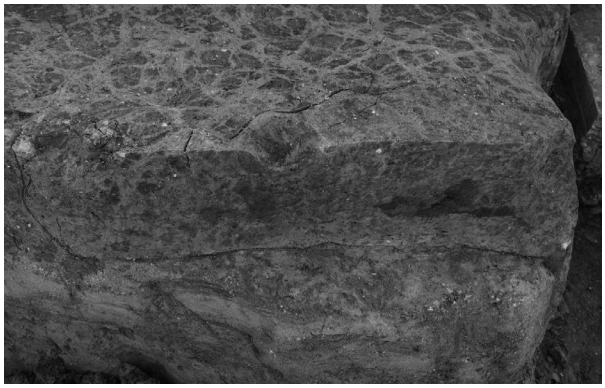
8．30号土坑セクション（東から）

図版10　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（8）
Pl. 10　Features of TM7 (8)

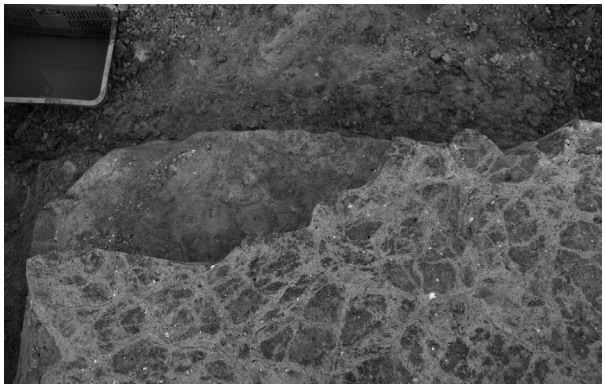
1．30号土坑（北西から）



2．31号土坑（南から）



3．32号土坑セクション（東から）



4．32号土坑（西から）

5．33号土坑セクション（西から）

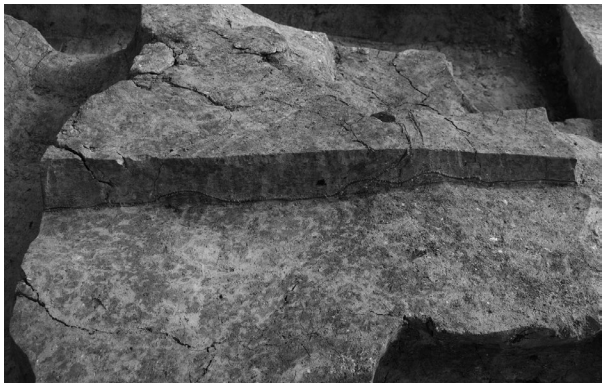
6．33号土坑遺物出土状況（西から）

7．33号土坑（南から）

8．34号土坑セクション（東から）

図版11　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（9）
Pl. 11　Features of TM7 (9)

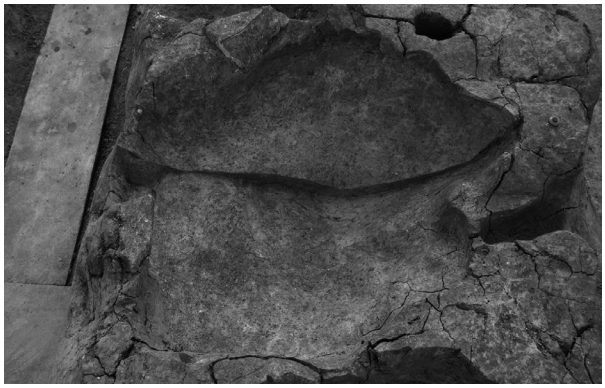
1．34号土坑（東から）



2．35号土坑セクション（北から）

3．35号土坑（北から）

4．36号土坑セクション（東から）



5．36号土坑（東から）

6．37号土坑セクション（南から）

7．37号土坑（南から）

8．38号土坑セクション（南から）

図版12　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（10）
Pl. 12　Features of TM7 (10)

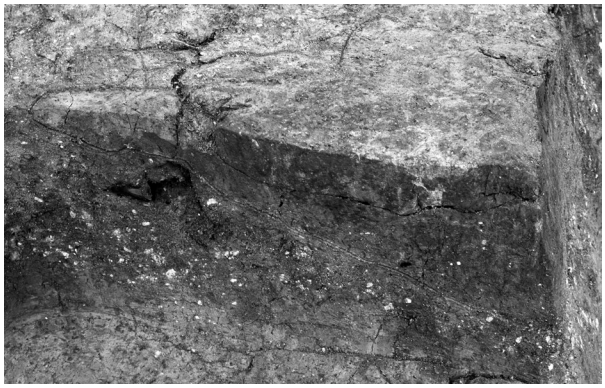
1．38号土坑（南から）

2．39号土坑セクション（南から）

3．39号土坑（北から）

4．40号土坑セクション（南から）

5．40号土坑（北から）

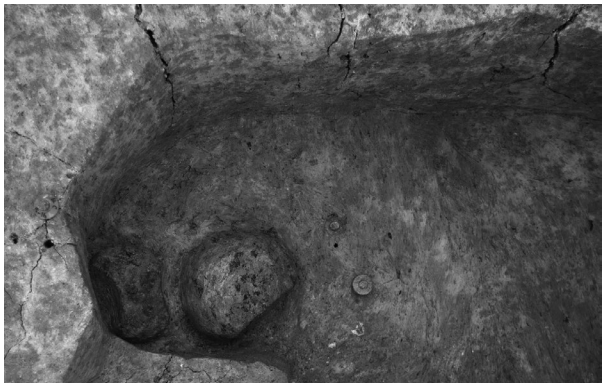


6．41号土坑セクション（西から）

7．41号土坑（西から）

8．42号土坑セクション（東から）

図版13　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（11）
Pl. 13　Features of TM7 (11)



1．42号土坑遺物出土状況（東から）

2．42号土坑（北から）

3．43号土坑セクション（西から）

4．43号土坑（東から）

5．44号土坑セクション（東から）

6．44号土坑（東から）

7．45号土坑セクション（東から）

8．45号土坑遺物出土状況（東から）

図版14　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（12）
Pl. 14　Features of TM7 (12)

1．45号土坑（東から）

2．46号土坑セクション（西から）

3．46号土坑（北から）

4．49号土坑セクション（西から）

5．49号土坑（西から）

6．50号土坑セクション（西から）

7．50号土坑（東から）

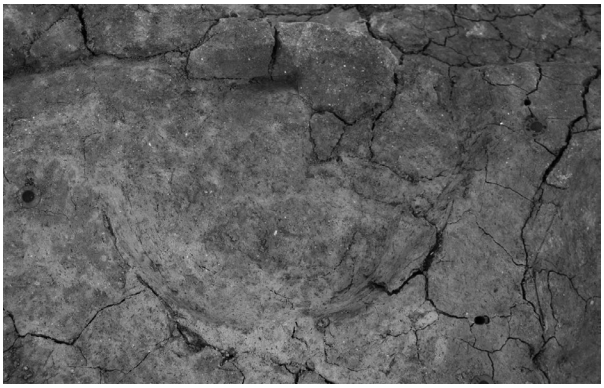
8．51号土坑セクション（西から）

図版15　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（13）
Pl. 15　Features of TM7 (13)

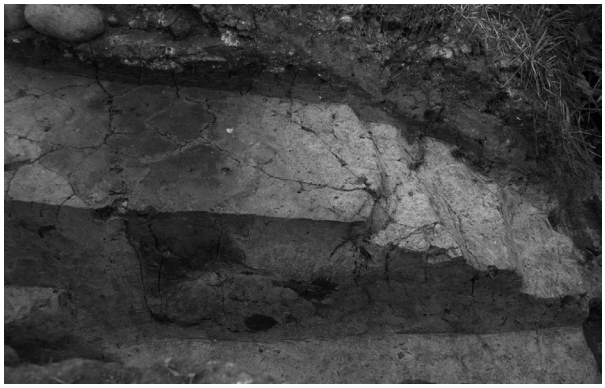
1．51号土坑（東から）

2．55号土坑セクション（西から）

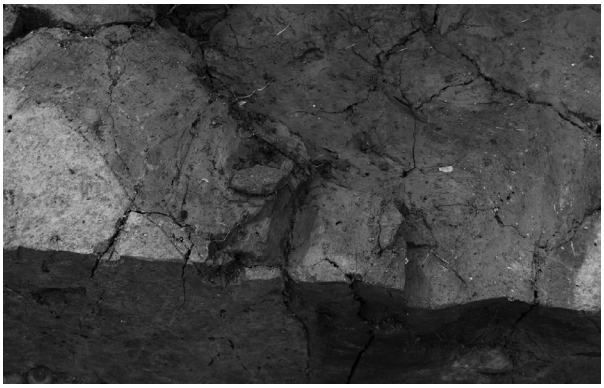
3．56号土坑セクション（南から）



4．56号土坑（北から）



5．57号土坑セクション（東から）



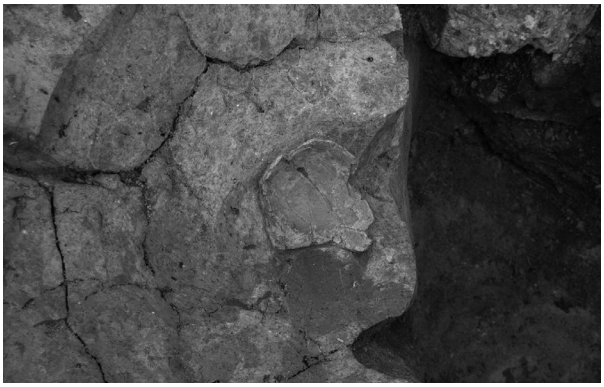
6．57号土坑遺物出土状況（東から）

7．57号土坑（東から）

8．58号土坑セクション（北から）

図版16　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構(14)
Pl. 16　Features of TM7 (14)

1．59号土坑セクション（東から）



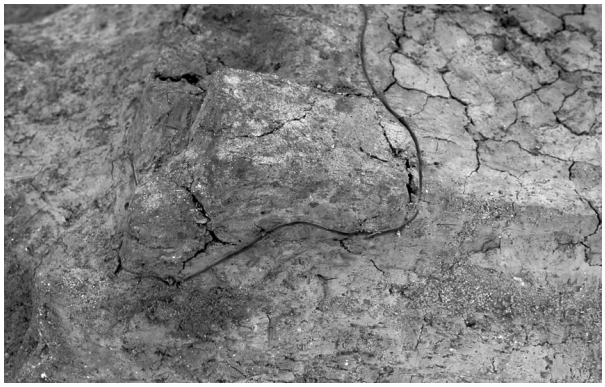
2．59号土坑遺物出土状況（西から）

3．59号土坑（東から）

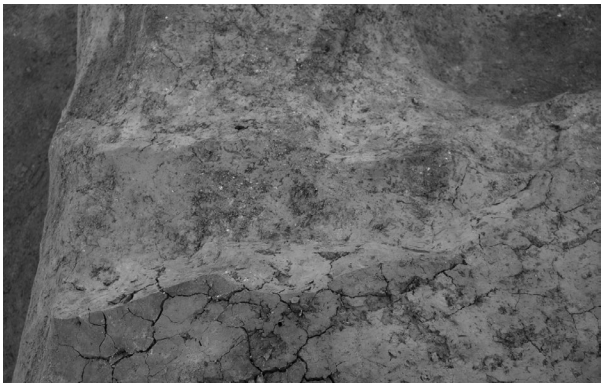
4．60号土坑セクション（西から）

5．61号土坑セクション（東から）

6．61号土坑（東から）



7．62号土坑セクション（北から）



8．62号土坑（西から）

図版17　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（15）
Pl. 17　Features of TM7 (15)

1．63号土坑セクション（北から）

2．63号土坑（北から）

3．64号土坑セクション（西から）

4．64号土坑（西から）

5．65号土坑セクション（西から）

6．65号土坑（西から）

7．66号土坑セクション（西から）

8．66号土坑（南から）

図版18　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（16）
Pl. 18　Features of TM7 (16)

1．67号土坑セクション（東から）

2．67号土坑（東から）

3．68号土坑セクション（北から）

4．68号土坑遺物出土状況（西から）

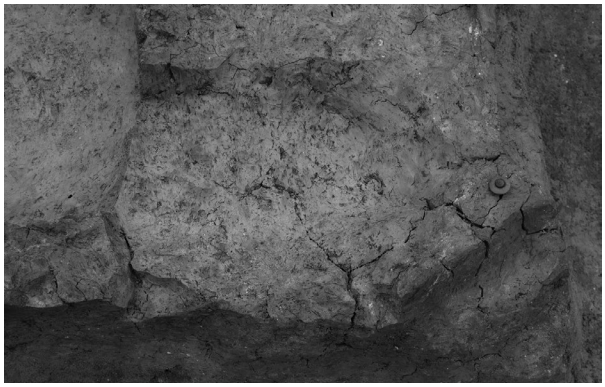
5．68号土坑（北から）

6．69号土坑セクション（南から）

7．69号土坑（北から）

8．70号土坑セクション（南から）

図版19　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（17）
Pl. 19　Features of TM7 (17)



1．70号土坑（南から）

2．71号土坑セクション（東から）

3．71号土坑（東から）

4．72号土坑セクション（南から）

5．72号土坑（南から）

6．73号土坑セクション（西から）

7．73号土坑（西から）

8．74号土坑セクション（北から）

図版20　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（18）
Pl. 20　Features of TM7 (18)

1．74号土坑（東から）

2．75号土坑セクション（東から）

3．75号土坑（東から）

4．76号土坑セクション（北から）

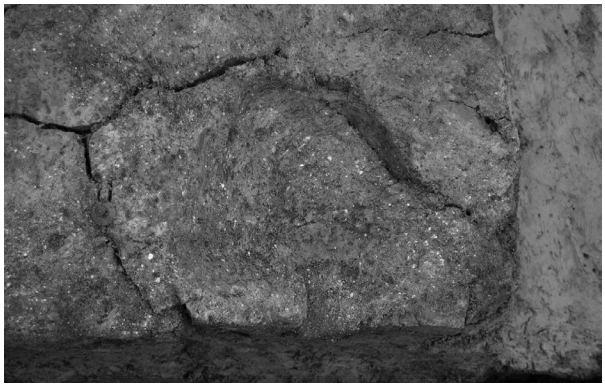
5．76号土坑（北から）

6．77号土坑セクション（東から）

7．77号土坑（東から）

8．78号土坑セクション（南から）

図版21　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（19）
Pl. 21　Features of TM7 (19)



1．78号土坑（南から）

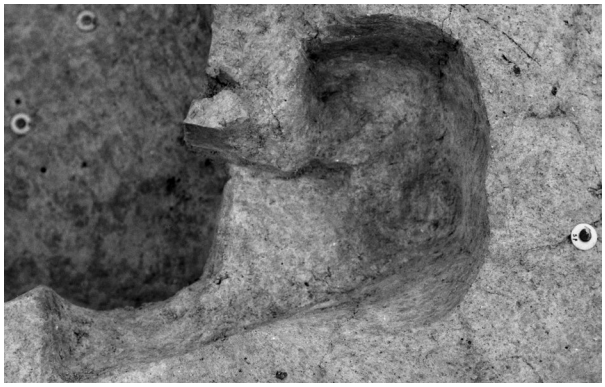
2．79号土坑セクション（西から）

3．79号土坑（北から）

4．80号土坑セクション（東から）

5．80号土坑（北から）

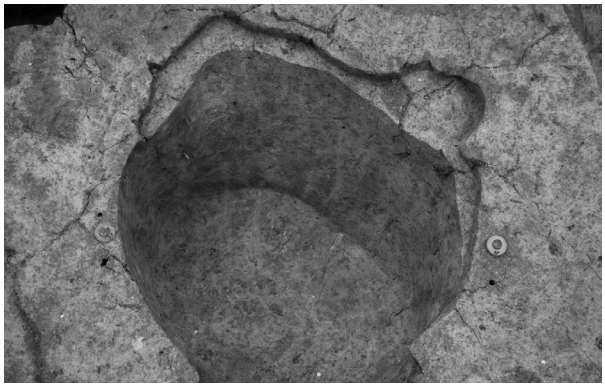
6．81号土坑セクション（南から）



7．81号土坑（南から）

8．82号土坑セクション（西から）

図版22　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構（20）
Pl. 22　Features of TM7 (20)



1．82号土坑（西から）

2．83号土坑セクション（西から）

3．83号土坑（西から）

4．84号土坑（西から）

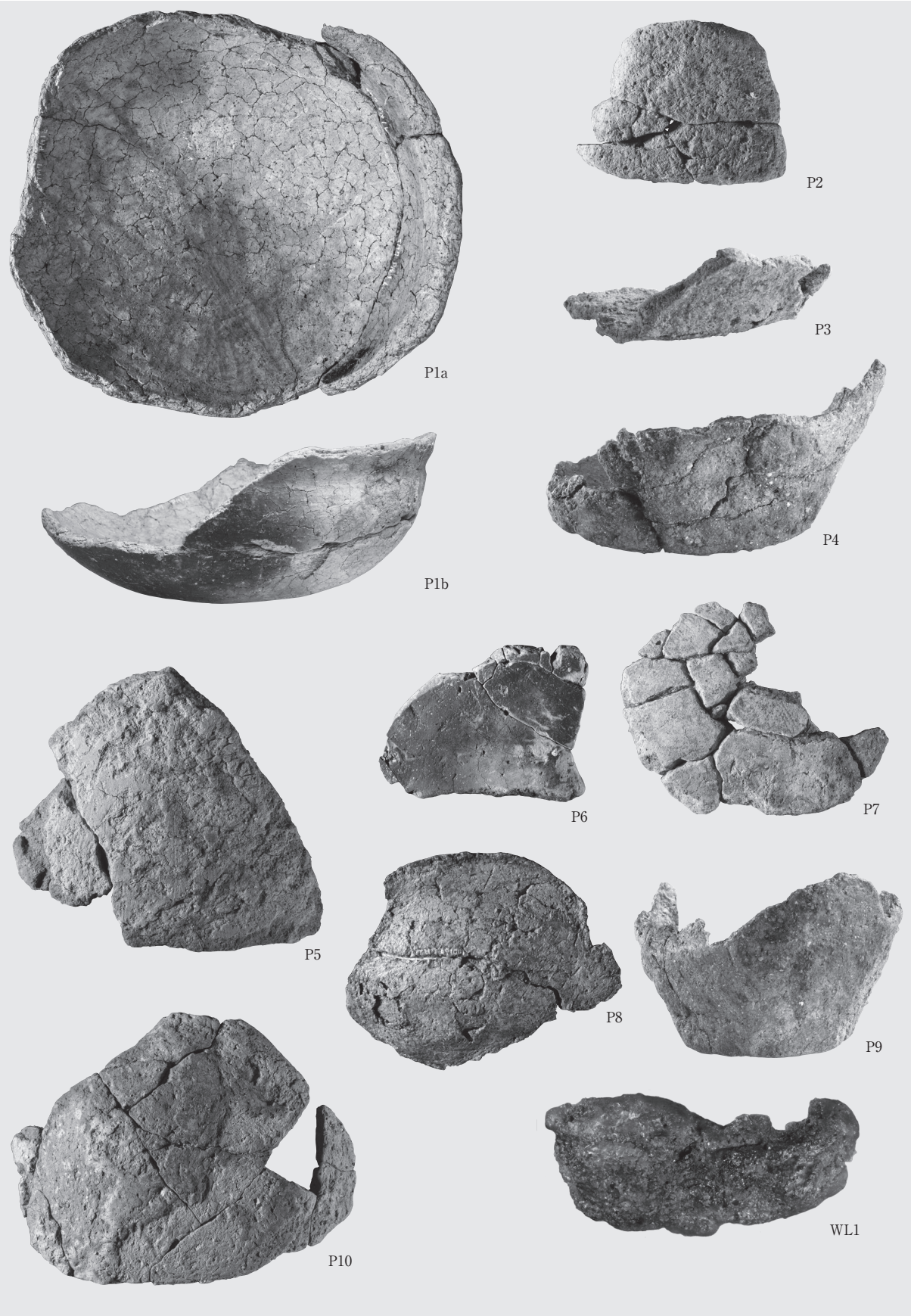
5．85号土坑セクション（西から）

6．85号土坑（西から）

7．86号土坑セクション（東から）

8．86号土坑（南西から）

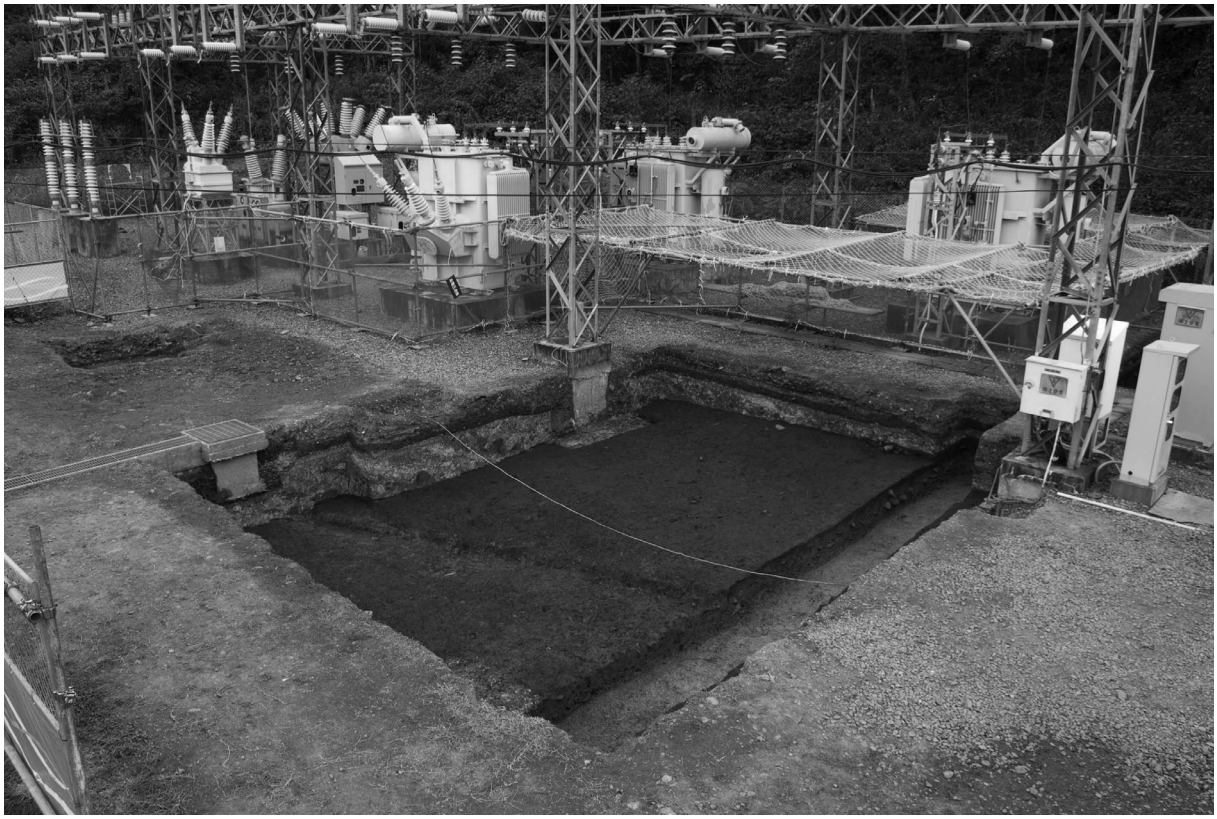
図版23　芦ノ口遺跡第７次調査検出遺構(21)
Pl. 23　Features of TM7 (21)



図版24　芦ノ口遺跡第７次調査出土遺物
Pl. 24　Various implements from TM7

P１～10　S＝１：２
WL1　S＝１：１

1．調査区遠景（西から）



2．調査区全景（2・3区）（北西から）

図版25　芦ノ口遺跡第８次調査全景
Pl. 25　Views of TM8

1．1区全景（北西から）

2．1区B列南壁セクション（北から）

3．1区A列東側南壁セクション（北から）

4．1区A列中央南壁セクション（北から）

5．1区A列西側南壁セクション（北から）

図版26　芦ノ口遺跡第８次調査１区調査状況（1）
Pl. 26　Views of area 1 at TM8 (1)

1．1区全景（南東から）

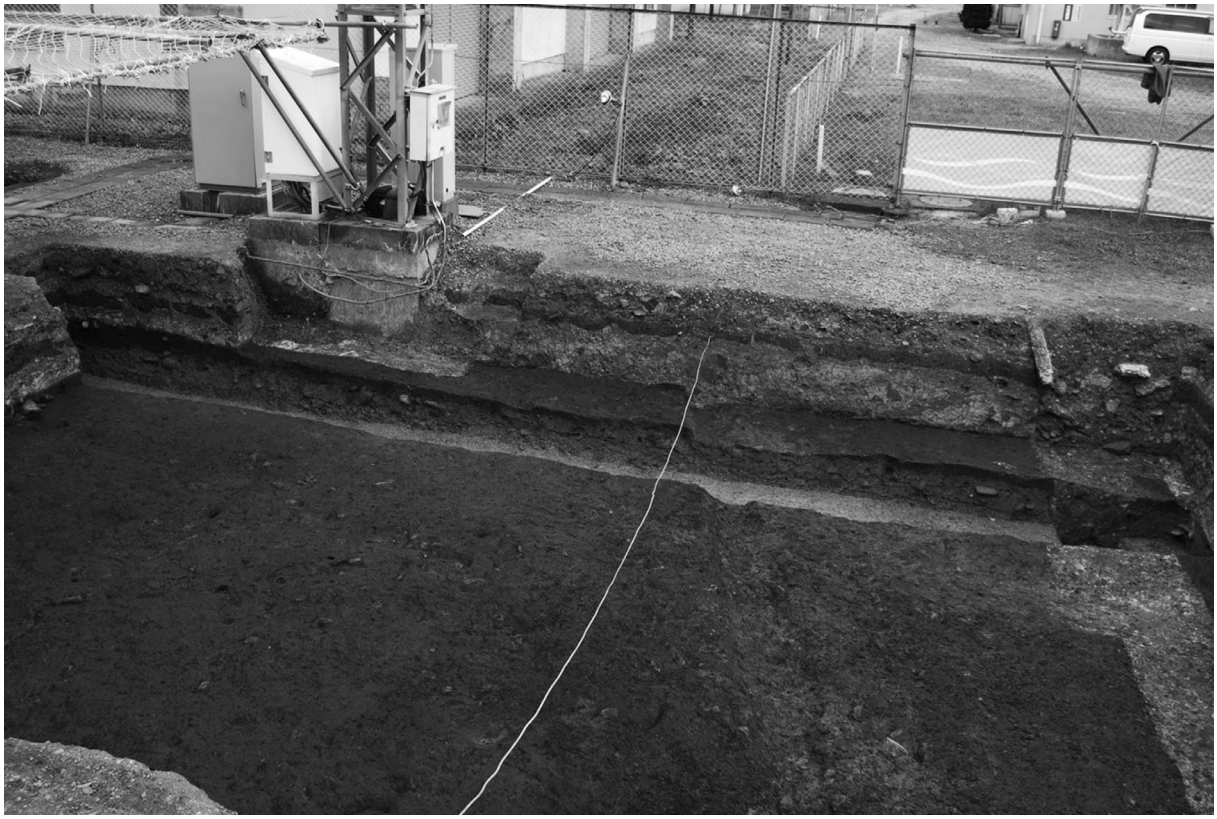
2．1区東壁5列セクション（西から）

3．1区東壁6列北側セクション（西から）

4．1区東壁6列南側セクション（西から）

5．1区東壁7列セクション（西から）

図版27　芦ノ口遺跡第8次調査1区調査状況（2）
Pl. 27　Views of area 1 at TM8 (2)



1．2区トレンチ全景（東から）

2．2区トレンチ全景（北から）

3．2区西壁4列セクション（東から）

4．2区西壁3・4列セクション（東から）

図版28　芦ノ口遺跡第8次調査2区調査状況
Pl. 28　Views of area 2 at TM8

1．2区西壁3列南側セクション（東から）

2．2区西壁3列北側セクション（東から）

3．2区西壁2列南側セクション（東から）

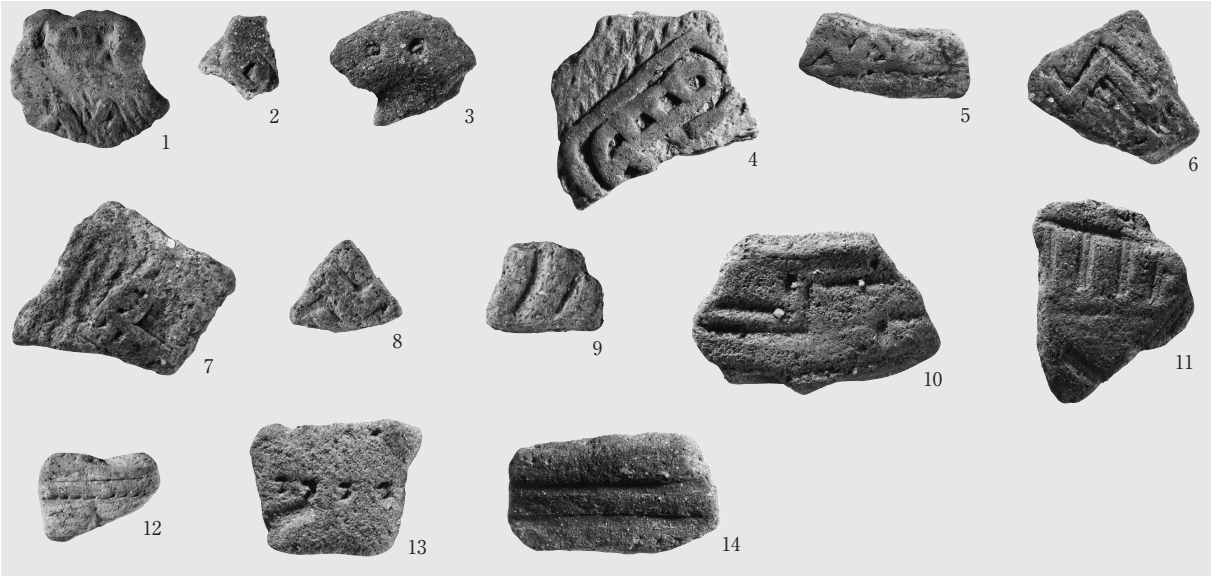
4．2区西壁2列北側セクション（東から）

5．2区西壁1・2列セクション（東から）

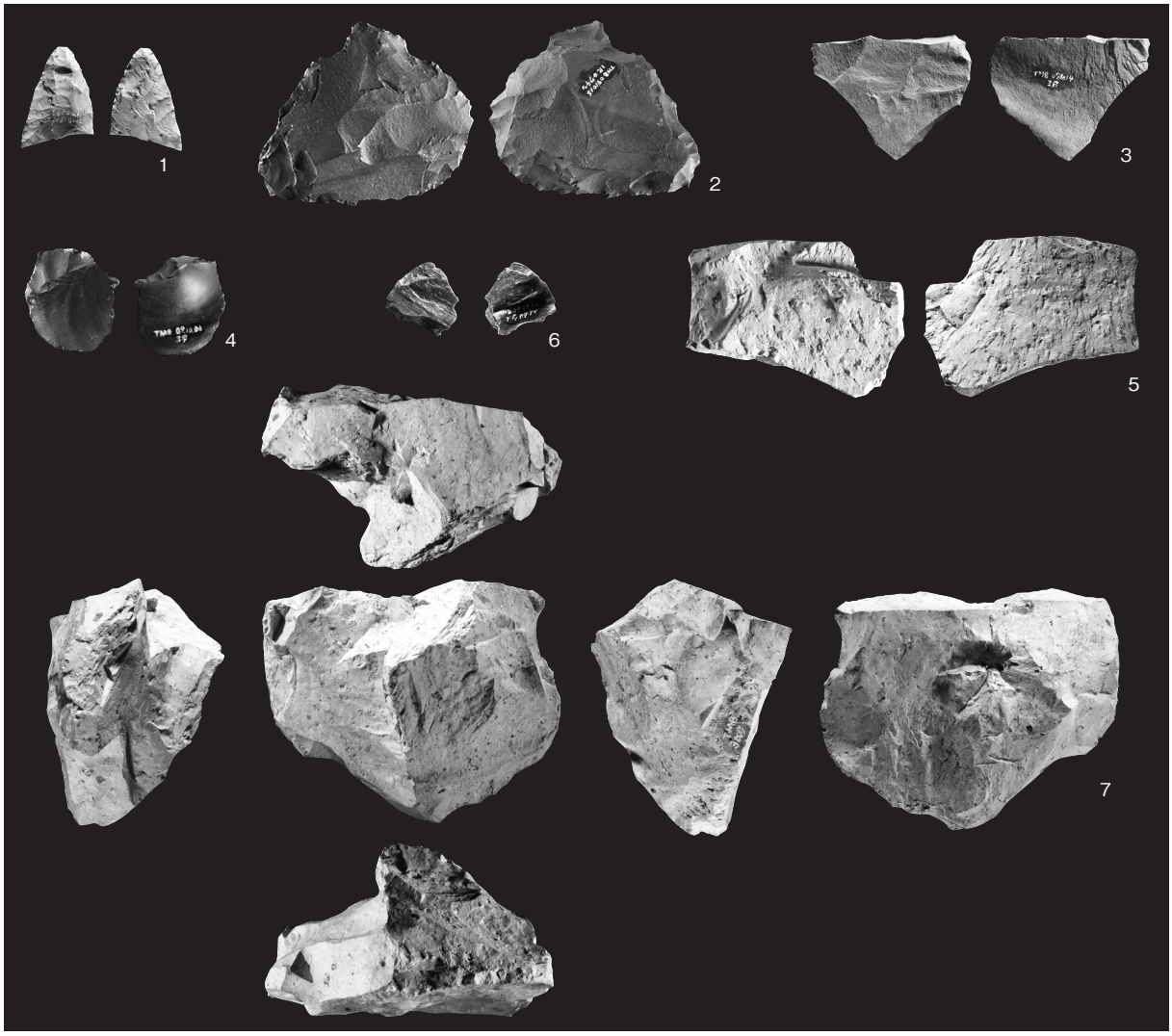
6．3区西壁セクション（東から）

7．3区全景（東から）

図版29　芦ノ口遺跡第8次調査2・3区調査状況
Pl. 29　Views of area 2 and 3 at TM8



図版30　芦ノ口遺跡第８次調査出土土器　　S＝1：2
Pl. 30　Pottery from TM8



図版31　芦ノ口遺跡第８次調査出土石器　　S＝2：3
Pl. 31　Stone implements from TM8

報　告　書　抄　録

ふりがな	あしのくちいせきだい７じちょうさ・だい８じちょうさ
書名	芦ノ口遺跡第７次調査・第８次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	東北大学埋蔵文化財調査室調査報告
シリーズ番号	３
編著者名	菅野智則・柴田恵子・傳田恵隆
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平二丁目1－1　TEL022－217－4995
発行年月日	西暦2014年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
あしのくちいせき 芦ノ口遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくみかみね 太白区三神峯 いっちょうめほか 一丁目 他	04100	01035	38度 13分 35秒	140度 51分 20秒	2009.8.3 ～ 2009.9.30	330.3㎡	光源加速器棟 新営
						2009.9.24 ～ 2009.10.23	90.2㎡	特高変電所 受変電整備改修 その他工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
芦ノ口遺跡 第７次調査	集落跡	縄文時代 古墳時代	土坑	縄文土器・土師器・ 石器・漆塗製品	主な土坑は 粘土採掘坑と推定
芦ノ口遺跡 第８次調査	集落跡	縄文時代	遺物包含層	縄文土器・土師器・ 石器	

要約 芦ノ口遺跡 第７次調査	縄文時代と古墳時代の粘土採掘坑と推定される土坑を多数確認した。これらの土坑は、連続的に掘られており、不定形な形状となる。出土遺物は、全体的に遺存状態が悪く、細かな時期が比定できるものは少ない。そのうち１号土坑から出土した土師器のうち１点は、古墳時代中期引田式新段階と考えられる。また、以前の調査と同様に泥炭層が確認されたが、その層厚は薄い。そのため、今回検出した泥炭層は泥炭層分布範囲の南限近くと推定した。
芦ノ口遺跡 第８次調査	自然の沢状の落ち込みを検出した。この沢状の落ち込みは、三神峯丘陵側からの崩落土と考えられる堆積物により埋められている。その堆積層の中からは、縄文時代前期から中期の土器や、土師器の摩耗しきった小破片が出土している。

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告３

芦ノ口遺跡第７次調査・第８次調査

平成26年３月31日

発行　東北大学埋蔵文化財調査室
〒980－8577　仙台市青葉区片平2丁目1－1　TEL 022（217）4995

印刷　株式会社　東北プリント
〒980－0822　仙台市青葉区立町24－24　TEL 022（263）1166